

第366図 柳遺跡階段状造構・加工段51実測図  $S = 1/60$

は、外米系と考えられる完形の高环が横倒しになった状態で出土している。またコシキ形土器と甕(1)の下あたりには、外米系の甕が2点(26, 27)潰れた状態で出土している。26の口縁部は甕(1)の胴部に張り付いた状態で、本来はこの2者がほぼ直角に並列していたことを思わせる。コシキ形土器の下群の下には外米系と考えられる底部穿孔の鉢、もしくは甕の下半部(30)が完形で斜めに傾いて出土した。以上のような状態から、西上方肩部の一群の土器は甕や高环をまず置いた後に最後にコシキ形土器を置いた（あるいは投げ込んだ）ことが想定できる。

前述のコシキ形土器等の土器群の下方、ステップの平坦面付近には大量の土器が隙間なく密集して潰れたような状態で出土している。土器は地元、外米系の区別はほとんどなく出土しており、また同一個体が極端に離れて出土する状態もみられない。おそらく器種や来歴の区別なくかなりの土器が準備され、一時にまとめて置いた（または投げ込んだ）状況が想定される。

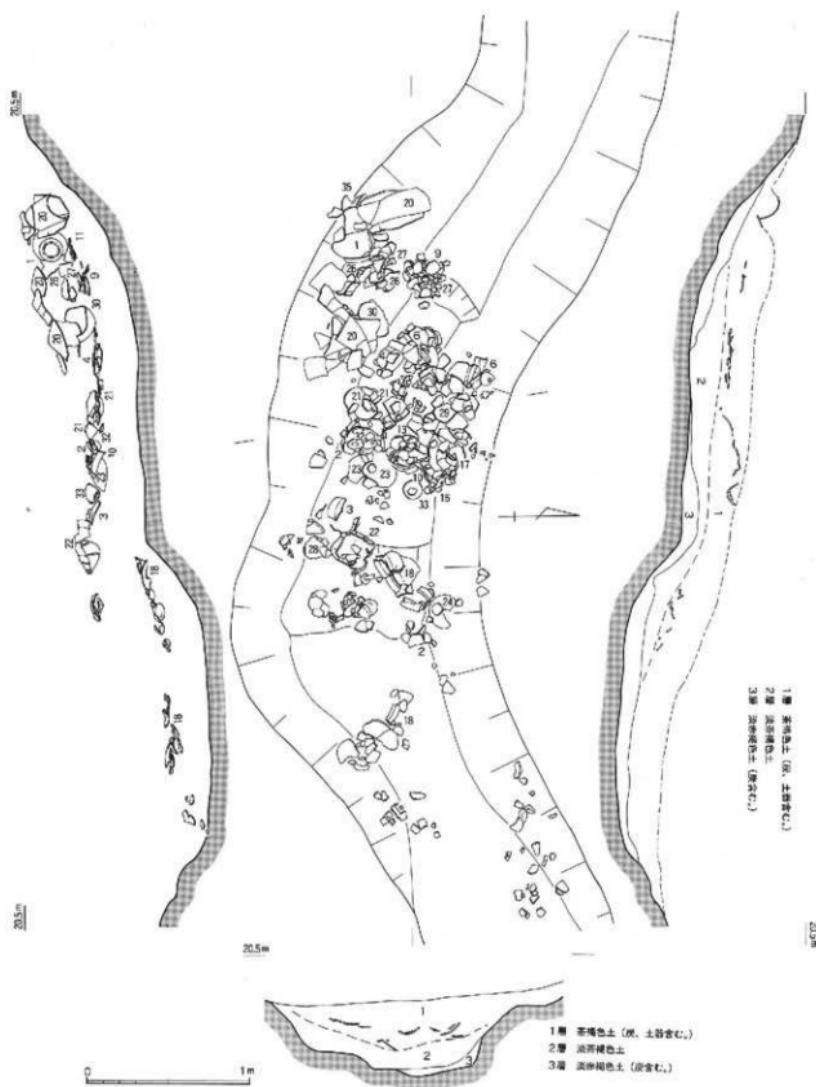
土器集中区域の平坦面の東下方の肩付近からステップの急斜面にかけて、散在的ながらもまとまつた土器が出土している。ちょうど肩付近には外米系と考えられる完形の壺(22)が斜めに倒れて出土、その北東側の急斜面に対応する位置に地元の土器と考えられる壺の上半(18)が出土している。さらにその北東側には外米系の壺底部下半が底を上にして出土した。これらの土器群の上方、つまり平坦面の東端肩部付近には、幅50cm~60cmの間、土器の密度の薄い空閑地がある。やや散在的で斜面にとどまるようなこれらの土器のあり方は、この辺りの空閑地からはずれてきたと考えるのが最も合理的な解釈であろう。ただし外米系の壺(22)はかなり高いレベルでの出土で、元々北壁の肩付近の高い位置に置かれたもの可能性が高い。

さらに東側下方でも土器は出土しているが、密度は薄い。基本的に上方の土器集中区域から流出したものと考えて良いだろう。肩下方の急斜面付近で出土した壺(18)の破片がこの辺りから出土しているのはその証左である。

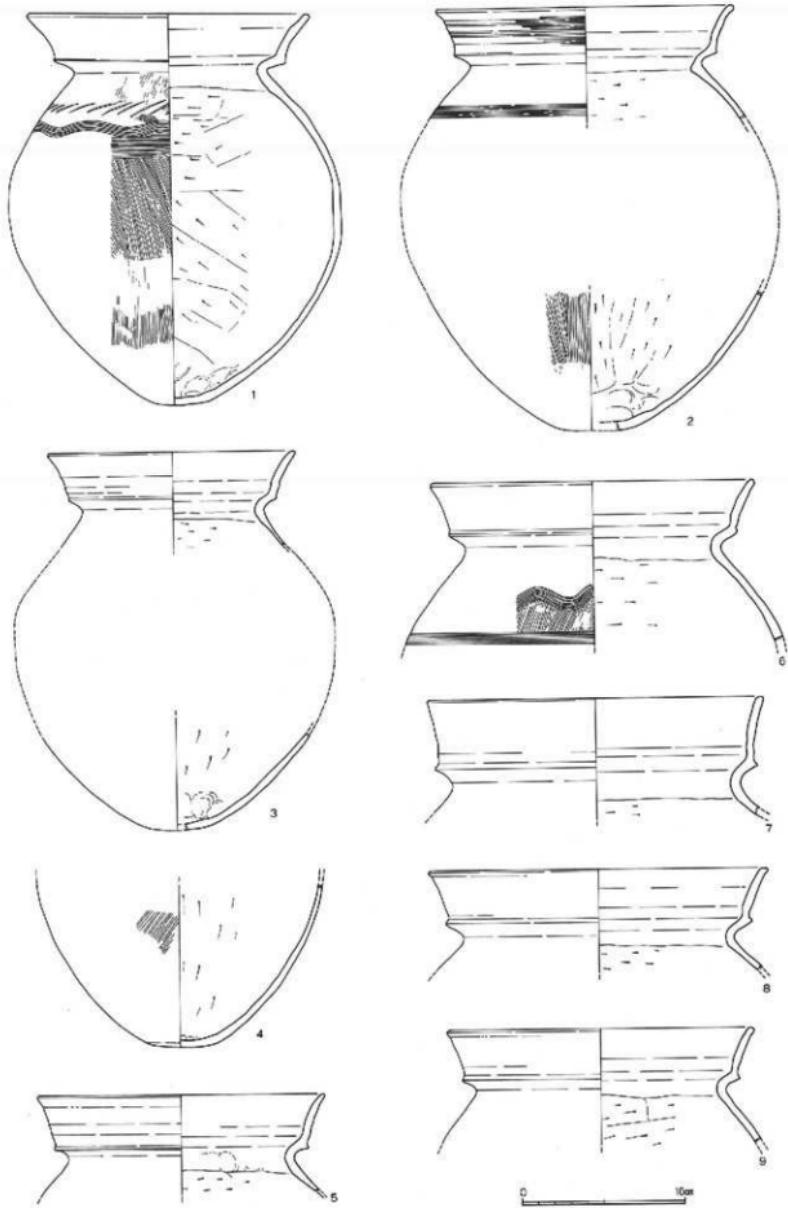
次に土器の立的な出土状況をみてみると、地山面からおおよそ30cm~40cm上方から出土しているのがわかる。土層的には2層の上面にあたり、これらの土器群は地山上にかなりの土砂が堆積してから置かれたことを示している。ただ土器群の下面もほぼステップ状を呈しており、この造構が道としてまだ機能している間に土砂が少しづつ溜まったのか、あるいは機能停止後に流入してきたのかは明確にしがたい。

以上のような状況からまとめると、土器が置かれた（投げ込まれた）状況は次のように考えられる。道と想定される階段状造構の底面に、数十cm土砂が溜まった後、ひとつのステップの平坦面部分（階段という踏み代部分）に大量の土器が置かれる。そしてその土器群の西側上方の北壁あたりに甕や高环がまとまって置かれ、最後にコシキ形土器が肩付近に置かれたのであろう。それに前後して平坦面東端付近の北壁肩あたりに壺が置かれてことが推測される。ステップ平坦面の東端付近の土器は、その後急斜面側にずれたものと考えられる。

階段状造構出土遺物(第368図～第373図) 1は口径17.5cm、胴部最大径20.5cm、器高24.2cmを測る複合口縁甕である。複合口縁部の綾はわずかに横方向につまみ出し、口縁はやや外反して立ち上がる。口縁の厚さは4mm~5mm、端部はわずかに面を意識したつくりとなっている。頸部は「く」字状に折れ、その下方にヘラ状工具で削突状に刻みを施している。その下は振幅の浅い櫛状工具による波状文を施し、その下にはヨコハケが見られる。胴部下半はタテハケを施し、底部はわずかに径3.5cm程度の平底を残している。底部内面は指頭圧痕が見られ、胴部内面は砂が左に動くヘラケズ



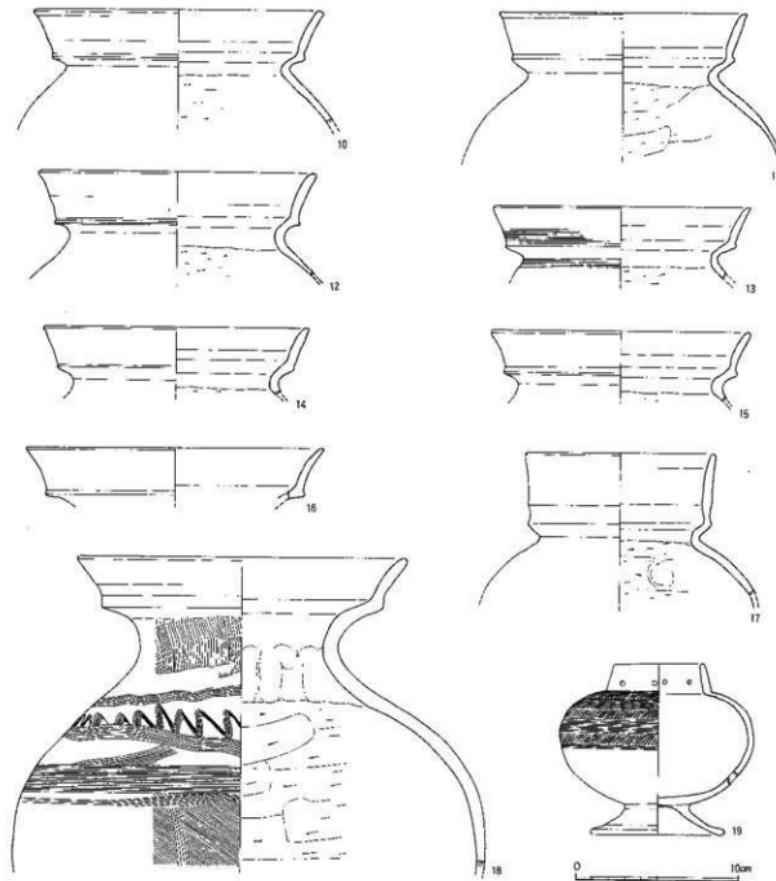
第367図 柳遺跡階段状造構 遺物出土状況 S=1/30



第368図 柳葉跡階段状遺構出土遺物実測図(1) S = 1 / 3

りを施している。淡褐色を呈し、外面には煤が付着している。

2は復元口径18.4cmを測る壺である。複合口縁部の稜は薄く横方向に引き伸ばし、口縁はわずかに外反気味に立ち上がる。口縁の器壁は3.5mm~4mmと薄く、外面には擬凹線を施した後なでているようである。端部は丸くおさめる。胴部上半の外面には櫛状工具による平行沈線を施し、内面は砂が右に動くヘラケズリが見られる。底部はわずかに平底を残し、内面には指頭压痕が見られる。淡黄褐色を呈し、外面には煤が付着している。3は復元口径15.3cmを測る複合口縁壺である。複合口縁の稜の直上を凹線上にくぼめており、口縁は中途で折れ気味に立ち上がる。口縁端は風化で不明瞭だが、端部を意識した調整を行っているように見える。胴部は部分的に2mmを切るほどの薄さで、



第369図 柳遺跡階段状造構出土遺物実測図(2) S = 1 / 3

内面は砂が右に動くヘラケズリを施している。同一個体と思われる底部は、幸うして平底を残しており、内面には指頭圧痕が見られる。白っぽい淡褐色を呈す。

4は甕の胸部下半である。いずれかの口縁部と同一個体だろうが、特定は出来なかった。径4.2cm程度の曲面を呈す底を持ち、内面には微かに指頭圧痕が見られるようだが、風化で明瞭ではない。黄褐色を呈し、外面上には煤が付着する。5は復元口径17.8cmを測る甕である。複合口縁部の稜は薄く横方向に引き出し、口縁は外方にほほまっすぐ伸びる。端部はわずかに外方に折れて、先端は薄く丸くおさめる。胸部は器壁が2mm以下と薄くなり、内面には砂が右に動くヘラケズリを施す。

6は復元口径20.0cmを測る甕である。複合口縁部の稜の直上は器壁が薄くなり、口縁はやや厚みを増して外方にまっすぐ立ち上がる。口縁端は丸くおさめている。胸部外面、頸部下方には櫛状工具で振幅のある波状文を施し、その下には平行沈線またはヨコハケが見られる。白っぽい淡褐色を呈す。7は復元口径20.8cmを測る甕である。複合口縁部の稜は薄く横に引き出し、口縁はほぼ直立して、中途でわずかに外方に折れて開く。立ち上がりの高さが4.3cmと高く、口縁上端には面を設けている。

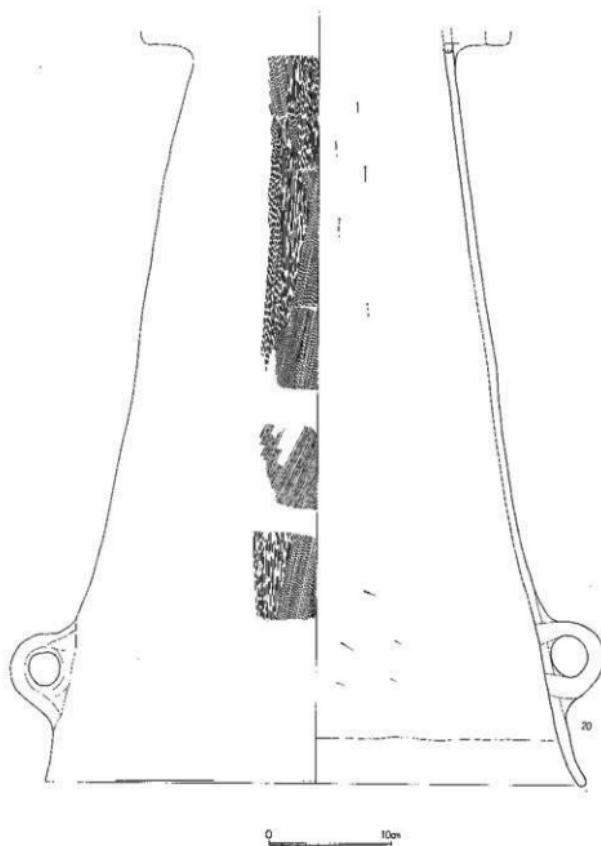
8は復元口径21.0cmを測る甕である。複合口縁部の稜は横方向に突出し、稜の直上付近は器壁が薄くなる。そこから口縁は厚み増して外方に立ち上がり、端部はわずかに外方に引き出して上端には水平な面を設けている。胸部は薄く、内面はヘラケズリで砂は右に動いている。9は復元口径17.8cmを測る甕である。複合口縁部の稜は横方向に膨らみ、その直上は器壁が薄くなっている。口縁は外方にまっすぐ立ち上がり、上端には面を意識して調整をしているように見受けられる。胸部内面はヘラケズリを施し、砂は右に動いている。

10は復元口径17.8cmの甕である。複合口縁部の稜は横方向に膨らみ、その直上は器壁が薄くなる。口縁は外方にやや開いてまっすぐ立ち上がり、端部は外方にわずかにアクセントを付けて上端は面を意識したつくりに見える。胸部内面はヘラケズリを施し、砂は右に動いている。11は復元口径15.3cmを測る甕である。複合口縁部の稜は横方向に膨らみ、その直上は器壁が薄くなる。口縁はやや外方に向けまっすぐ立ち上がり、端部は薄くなって外方に引き出すようにしている。胸部内面は砂が右に動くヘラケズリを施し、淡黄褐色を呈す。12は復元口径17.2cmを測る甕である。複合口縁部の稜はわずかに横方向に引き出し、その直上には1条沈線を施している。口縁はやや外反気味に立ち上がって端部は丸くおさめる。胸部内面には砂が右に動くヘラケズリを施し、2mm以下と非常に薄くなる。淡黄褐色を呈す。

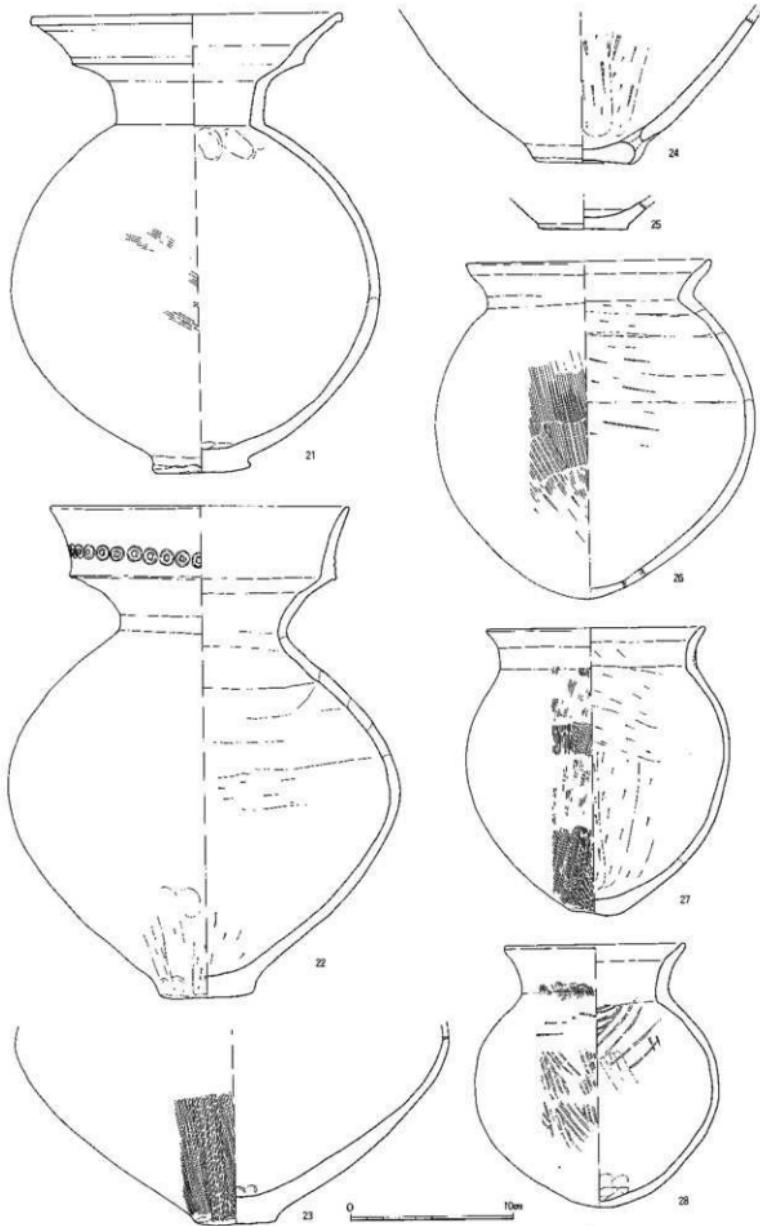
13は復元口径15.9cmを測る甕である。複合口縁部の稜は横方向に膨らみ、その直上に擬回線を施している。口縁は外方に開いてまっすぐ立ち上がり、端部はわずかに外方に引き出し氣味で上端には面が見られる。頸部付近には櫛状工具で平行沈線を施し、胸部内面はヘラケズリで砂は右に動いている。白っぽい淡褐色を呈す。14は復元口径16.4cmを測る甕である。複合口縁部の稜はわずかに横方向にアクセントを付け、口縁はやや分厚で外方にまっすぐ立ち上がる。端部はわずかながら外方に引き出し氣味である。15は復元口径16.0cmを測る甕である。口縁は厚さ3.5mm~4mmと薄く、やや外反気味に立ち上がって端部は丸くおさめる。黄褐色を呈す。16は復元口径18.4cmを測る甕である。複合口縁部の稜は横方向に引き出し、口縁は外反して立ち上がって端部は丸くおさめる。

16は複合口縁部が直立て長く伸びるいわゆる直口壺である。復元口径11.7cm、複合口縁部の稜の直上は器壁が薄くなり、口縁の高さは4.5cmを測る。胸部はよく張っており、内面は砂が右に動く

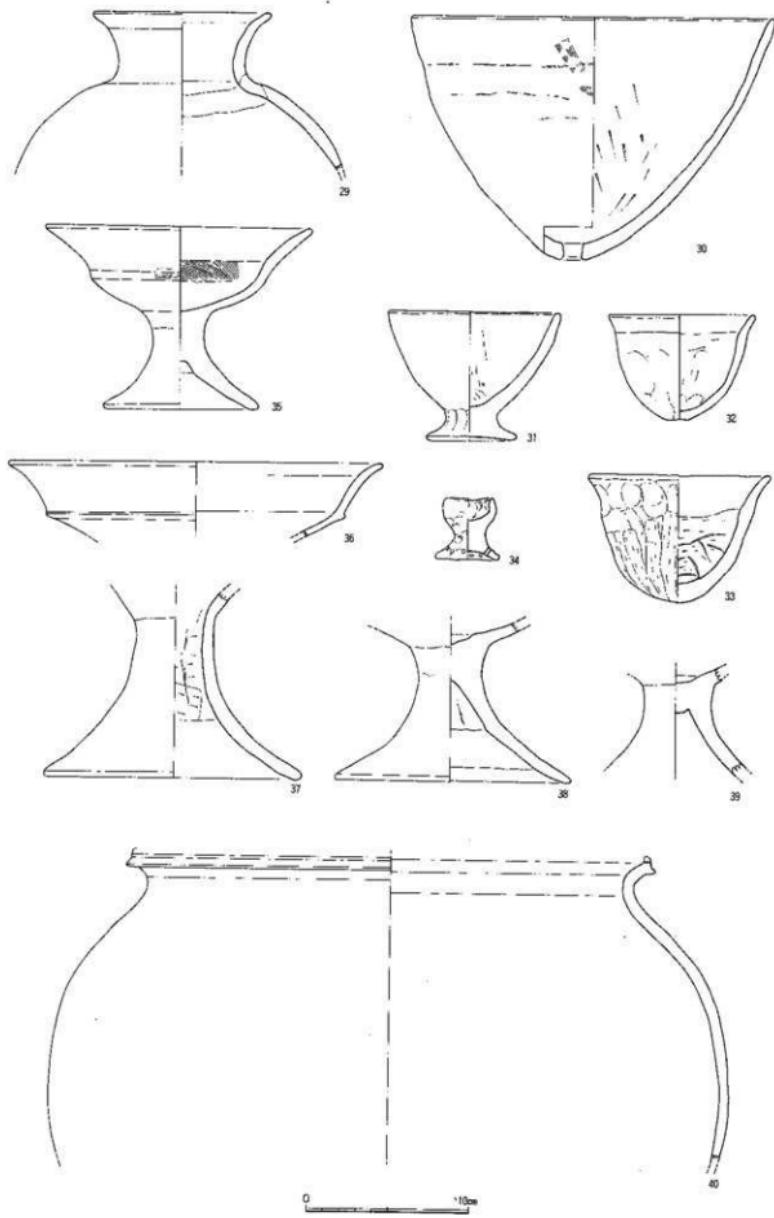
ヘラケズリを施している。外面は赤みが加っており、火を受けている可能性がある。18は口径20.3cmの複合口縁壺である。口縁は外方に開き、端部は丸くおさめる。頸部はおおきく内溝し、外面には縦方向のハケメを施す。胴部はよく張っており、外面上部にはくねった平行沈線間に、振幅の大きい柳状工具による波状文を施している。その下方にはヨコハケが見られ、胴部下半には縱～斜め方向のハケメを施す。内面はヘラケズリで、砂は左に動く。19はいわゆる台付き直口壺である。口径5.4cm、器高10.5cm、底径8.3cm、胴部はタマネギ形で外面上半には平行沈線間に貝殻復縁状工具で細かく刺突を施している。口縫部はわずかに内傾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。口縫部には2孔1単位で、対向する2方向に小孔を開けている。脚部は「ハ」字状によく開いており、端部は丸くおさめている。淡黄褐色を呈し、外面には赤色顔料が塗布されている。



第370図 柳遺跡階段状段構出土遺物実測図(3) S=1/3



第371図 棉遺跡階段状造構出土遺物実測図(4) S=1/3



第372図 柳遺跡階段状遺構出土遺物実測図(5) S = 1 / 3

20はコシキ形土器である。底径は44.5cm、高さは上方の把手の下部あたりまで残存し、現状で61cmを測る。よって通常例から考えると高さは75cm前後になるだろう。形態は広い底部からやや内傾してまっすぐ立ち上がっており、残存上端の把手部分の幅は22cmである。厚さは6mm～9mmで、これだけの大きさに比して薄い器壁といえる。下端から5～6cm上方に、縦方向に凹孔の開いた把手を取り付けている。把手の長さは6.5cm前後で、器壁に穴を開けて差し込んでいる。外面には縦方向の細かいハケメ、内面は上半が縦方向、過半が横方向のヘラケズリを施している。

第371図、第372図は通常当地ではあまり目にすることのない外来系と考えられる土器である。21は口径19.2cm、器高28.5cm、底径6.0cm、胴部最大径22.7cmを測る二重口縁の壺である。口縁は外方に大きく広がり、口縁端は断面三角形状に外方に突出させる。頸部はわずかに外方に傾いてまっすぐ伸び、胴部との境は屈曲する。胴部はほぼ球形で、底部は円盤状に突出している。調整は風化しているために不明瞭だが、外面にはハケメが一部見られる。明るい淡黄褐色を呈し、当地で一般的に見られる胎土とは明らかに雰囲気が異なる。

22は口径15.5cm、器高30.5cm、底径5.9cm、胴部最大径24.1cmを測る二重口縁壺である。二重口縁の稜はわずかながら斜め下方にアクセントを持ち、口縁は外反気味に立ち上がる。口縁立ち上がりの長さは4.4cmと比較的長く伸びている。口縁は上方に向かって先細りとなっていき、端部は丸くおさめている。口縁の稜の上部には、二重の半截竹管文を密にめぐらしている。頸部はあまり伸びず内湾し、胴部は最大径がほぼ中央にあって紡錘状を呈す。底部は明瞭な平底で、円盤状に突出している。風化のため調整は不明瞭だが、底部付近は外面もヘラケズリが見られ、内面下半もヘラケズリを施す。胴部内面上半はヘラケズリは観察されず、接合痕と思われるラインが平行して数条見られる。灰褐色を呈し、通常地元の土器にはほとんど含まれない黒色や小豆色の砂粒を含んでいるのが特徴である。

23は壺の胴部下半である。全容は不明だが、胴部の最大径がかなり下がっている印象を受ける。底部は平底で、底径5.2cm、円盤状に突出気味である。外面にはハケメが見られ、内面の底部付近には指頭圧痕が見られる。3mm以下の粗い砂粒を含み、黒色砂粒も含まれる。24は壺の胴部下半である。底部はやや突出気味の平底で、底部のわずかに上に焼成後の穿孔を行っている。3mm以下の粗い砂粒を含み、黒色や小豆色の砂粒も含んでいる。淡黄褐色を呈す。25は壺の底部である。底径5.6cmでわずかに円盤状に突出している。3mm以下の粗い砂粒を含み、小豆色の砂も見られる。

26は単純口縁の甕である。口径15.2cm、復元器高20.8cm、胴部最大径19.8cmを測る。口縁は「く」字状に折れ曲がり、口縁端はわずかに内方向に折り返し気味である。胴部は倒卵形で底部はほとんど尖り底である。胴部外面にはタキシカとも思えるような粗いハケメを施し、下にはヘラケズリ痕も見られる。内面はヘラケズリを施しているが、接合痕と考えられる横方向のラインも観察される。3mm以下の粗い白色粒を含み、雲母片も見られる。淡黄褐色を呈すが、外面は火を受けたためか橙色がかり、煤も付着している。

27は単純口縁の甕である。口径13.5cm、器高17.8cm、胴部最大径16.2cmを測る。口縁は胴部から鈍角に折れて、外反しながら立ち上がる。口縁端部は丸くおさめている。胴部はやや長めの倒卵状で、底部は平底を残すが口縁と平行ではない。外面は細かいハケメ、内面はヘラケズリを施す。3mm以下の粗い白色粒を含み、雲母も見られる。黄褐色を呈す。28は単純口縁甕である。口縁は胴部から鈍角に折れて、外反しながら立ち上がる。端部付近の内面は強くなれたためかやや外方に折れ、先

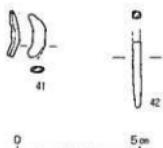
端は丸くおさめる。口縁の長さが3.2cmと比較的長い。胴部は丸みの強い倒卵形で、底部は尖底気味の丸底である。外面にはタタキとも思えるような粗いハケメが見られ、頸部下方は横方向にヘラ状の工具でなでているようである。内面上半は斜め方向の暗文状に施文が見られるが、ヘラケズリを模したものだろうか。内面下半はヘラケズリ後ナデ、底部付近には指頭圧痕が見られる。2mm以下の砂粒を多く含み、黄褐色を呈す。29は単純口縁の甕であろうか。復元口径11.0cmと口頸部が小さい。口縁部は外反して開いて立ち上がり、端部は丸くおさめる。胴部はよく張り、内面には接合痕らしきラインが見られる。淡黄褐色を呈す。30は底部に穿孔のある鉢であるが、甕の下半部の可能性も否定できない。

31は小形の台付き鉢である。復元口径10.6cm、器高8.0cmを測る。尖底気味の体部に平底の脚部がつく形で、体部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。内外面ともに丁寧になでている。火を受けたらしく、全体に赤味を帯びて一部表面が剥落している部分もあり、煤も付着する。32は小形の鉢である。口径9.1cm、器高6.4cm、底部は径1.5cmの小さな平底を持つ。体部は内湾して立ち上がり、口縁付近で外方に折れて端部は丸くおさめる。内面はヘラケズリ後ナデ、外面は不明瞭だが同様であろう。全体に赤味を帯びており、火を受けている可能性が高い。33は32と同様の形態の鉢だが、底部は尖底気味の丸底で内外面ともケズリ放しである。表面は灰褐色、断面は黄褐色を呈す。34は手づくりのミニチュア台付き鉢もしくは高杯である。口径2.9cm前後、器高3.8cm前後、底径3.9cm前後で、脚部には小孔が8ヶ所に開けられている。

35は高杯である。口径16.5cm、器高11.4cm、底径10.2cmで脚部の高さと杯部の高さがほぼ等しいプロポーションを呈す。杯部は中央よりやや下側に段を設け、その上方は大きく開き、端部は丸くおさめる。段付近の外面にはヘラミガキが、内面にはハケメが見られる。脚部は裾に向かって次第に開いていく形態で、上方には粘土がつまり、杯部底面との間には3.1cmの厚みがある。それ以下も器壁は概して厚手である。2mm以下の白色、褐色砂粒を含み淡褐色を呈す。

36は高杯の杯部であろうか。復元口径23.2cmとかなり大型で、中途に段を設け、そこから口縁に向かって外反して開く。器壁は3.5mm~4.5mmと薄い。2mm以下の白色砂粒を含み、黒色砂も見られる。37は高杯の脚部である。外湾しながら裾に向かって開く形態で端部は丸くおさめる。上端は杯部にかかっているように見えるが、底部はなく円盤充填式の可能性もある。脚柱部内面が横方向のヘラケズリであることとあわせて地元の高杯と技術的に類似している。3mm以下の粗い砂粒を含み、黒色、小豆色の砂粒も見られる。38は高杯脚部である。脚部は裾に向かって外湾しながら開いていく形態で、底径14.6cmを測る。内面上方と杯部底面の間は粘土が詰まり、復元すると3cm近い厚みとなる。39も38と同様の高杯であろう。3mm以下の粗い砂粒を含み、黒色、小豆色砂粒も見られる。

40は胴部最大径が42.1cmにもなる大形の甕もしくは鉢である。口縁は複合口縁状で、稜は横方向に突出する。口縁は風化で不明瞭だが、わずかに伸びておさまるようで、外面に凹線状のくぼみを設ける。頸部は丸みを持って胴部に移行し、胴部の厚さは7mm前後と、その大きさの割には薄い。1mm以下の細かい砂粒を含み、外表面は赤みがかった淡褐色、内面は淡黄褐色を呈す。



第373図 階段状造構出土遺物  
実測図(6) S = 1 / 2

第373図は鉄製品である。41は現状で長さ1.8cm、幅5mm、厚さ2mm程度の小形の鉄製品である。湾曲しているが、用途等は不明である。42は片

側が欠損しているが、現状で長さ2.7cmの針状の鉄製品である。断面は3mm×2.5mm程度の長方形である。

**階段状遺構出土の土器の特徴** さて階段状遺構出土の土器にはいくらかの特徴が認められる。ひとつは通常地元では見られない土器が認められることである。外来系と呼んでいる土器で、全体の比率は地元の土器とはほぼ匹敵する量といえる。器種は壺、甕、鉢、高環などで、大部分は近畿地方の土器の特徴を持つ。ただ細かな特徴や胎土などから、近畿地方から直接搬入されたものとは考えがたい<sup>17)</sup>。ただ大部分の土器が地元の通常の土器とも全く異なる胎土をしており、胎土も含めて近畿地方の土器を模して作られたものと考えられる。甕に見られる粗いハケメや胎土に含まれる黒色砂粒などが、いわゆるそのものではないが、オリジナルに似せようとした部分ではないかと思われる要素である。

地元の土器に関していえば、大部分が甕で、この時期のセットとして通例の高環や器台が含まれていない。こうした意図的と思われる器種の選択が何を意味するのか注目される所である。地元の土器から見て、時期は塩津編年5期と考えられる。

こうした土器の集中的な配置（もしくは投棄）が何を意味するであろう。前述したような外米系土器の多さや器種の選択性から、単なる土器の廃棄場所とは考えにくい。短絡的ではあるが、何らかの祭祀に伴う土器の使用と考えるのが妥当であろう。現有の資料で祭祀の性格にまで言及するのは難しいが、造構が道の可能性が高いことは示唆的である。土器の時期が、この塩津丘陵遺跡群の当該期集落の最終期（5期）であることと考え合わせると、集落の廃絶に伴う祭祀の可能性を考えたい。土器そのものは煤がついたり火を受けたものが多く、供献土器等のようなそのためにしつらえられた新品の土器ではないことも注目される。

さらに言及すれば、外米系の土器の割合が高いこと、地元の土器の中に祭祀の中心的な器種と考えられる高環、器台、低脚杯がほとんど含まれないことは、この祭祀の中心的主体者が本来この集落の住民ではなく、新来の人々であった可能性をも想起させる。

#### 加工段51（第366図）

柳遺跡東斜面北半の谷部、標高約20m付近で検出された加工段で、前述の階段状遺構に切られている。北側の壁の一部は検出されたが、西側のコーナー部分は階段状遺構と重なるうえ、コーナーから南に伸びていたと考えられる壁は、後世の造成の壁で切られてしまい、不明である。よって遺構の全体像は全くつかめないのが実状だが、階段状遺構がこの加工段の壁の角度に規制されていることから、遺構の存在は間違いない。

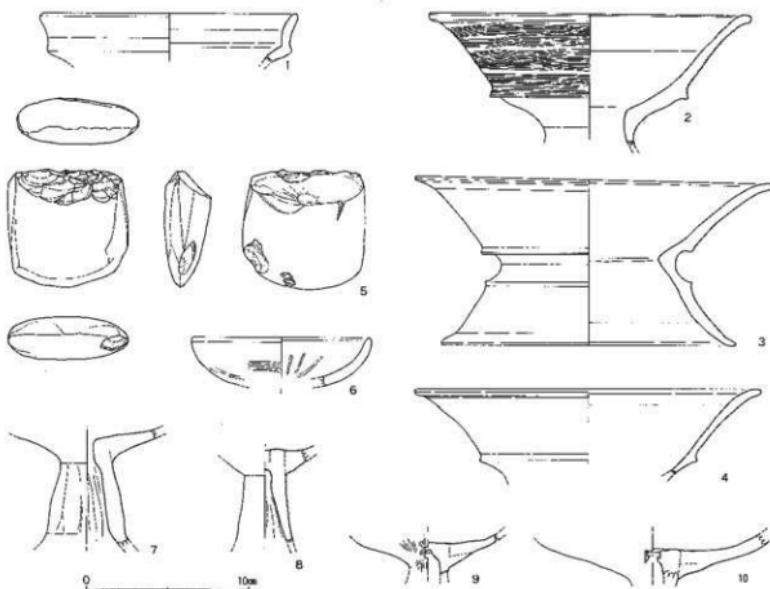
**加工段51出土遺物（第374図）** 1～5が加工段51の覆土から出土した遺物である。1は径の復元が不正確だが、口径16cm前後の複合口縁型である。口縁はほぼ直立して立ち上がった後、中途で外方に折れ曲がって開く。立ち上がりの高さが2.4cmと比較的低く、口縁端は丸くおさめている。2は復元口径20.0cmを測る鼓形器台であるが、風化で調整が不明瞭なため天地は逆転する可能性がある。受け部と筒部の間の稜は外方に突出し、受け部は口縁に向かって開く。外面には少なくとも4単位にわたる擬円線を施し、口縁端は丸くおさめている。筒部は径4.9cmとかなりすぼまっている。淡橙褐色を呈す。3はほぼ完形の鼓形器台である。口径22.2cm、器高11.2cm、底径18.2cm、筒部径10.8cmと、径の割りに高さが低く筒部径の大きいタイプである。受け部、脚部とともに大きく開いて、端部

近くでさらに折れ気味に開いた後、端部は丸くおさめている。淡褐色を呈す。4は復元口径21.4cmを測る鼓形器台の受け部である。器壁が3mm~5mmと薄いつくりで、端部付近は水平に近く折れて、先端は丸くおさめる。

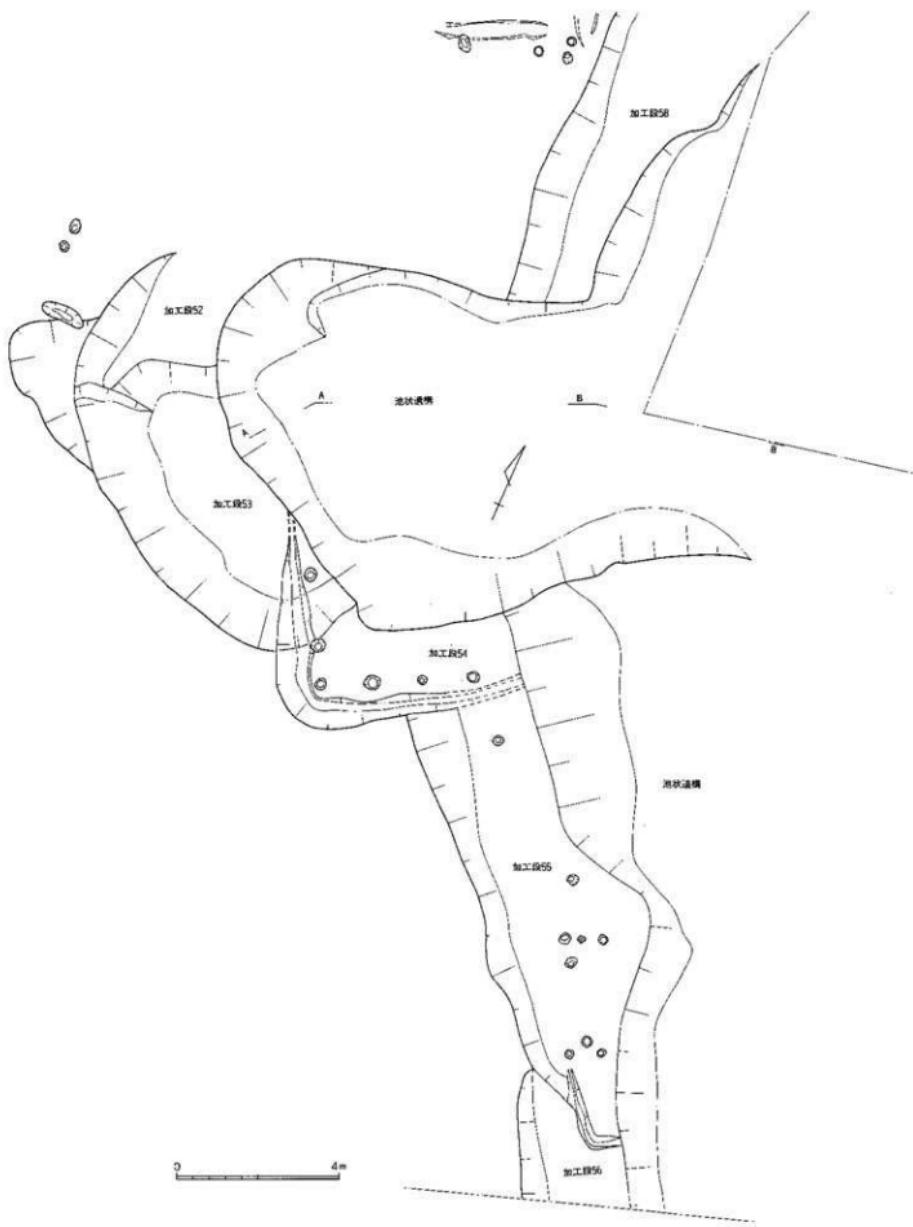
5は磨製石斧である。刃幅が6.6cm、厚さが現状で2.9cmと比較的幅広で薄手である。基部側が破損しているが、その破損面から2次的に加工が加えられており、2次的に何らかの用途に転用されたものと考えられる。

6~10は加工段51の下方付近から出土した土器である。6は復元口径11.2cmを測る土師器杯である。底部は欠損しているが、ポール状を呈すと考えられ、内面にはヘラミガキが一部見られる。橙褐色を呈す。7~10は土師器高杯である。7は脚柱部から杯部にかけてで、両者の接続は差し込み方による。底には穴が貫通しており、脚柱部内面にはシボリ痕が見られる。淡橙褐色を呈す。8は接合部付近の径が2.5cmと、脚柱部の細い個体である。接合は差し込み法で、底には貫通した穴を埋めたと推測される跡が見られる。内面にはシボリ痕が見られる。淡黄褐色地に白色の縞が層状に入る胎土である。9は接合部付近で、杯部の底下面には小孔が見られる。外面にはハケメが見られ、淡橙褐色地に白色の縞が層状に入る胎土である。10は全体的に分厚で大振りな高杯である。接合は差し込み法で、杯部底の下面には小孔が開けられる。淡橙褐色地に白色の縞が層状に入っている。

加工段51周辺出土の遺物には大きく3時期のものがある。ひとつは塩津2期から3期にかけてのもので1、2が対応する。もうひとつは塩津5期の遺物で3、4が対応する。最後は古墳時代中期



第374図 横遺跡加工段51・加工段51下方出土遺物実測図  
S=1/3 (1~5…加工段51覆土出土、6~10…加工段51下方出土)



第375図 柳遺跡加工段52・加工段53・加工段54・加工段55・加工段56配置図 S=1/120

の遺物で6~10である。古墳時代中期の遺物は加工段51でも下方に限られており、検出されてはいないが、当該期の遺構がその辺りに存在していた可能性がある。前2者のうち塩津5期は、切っている階段状遺構と同時期で、加工段51より新しい遺物である可能性が高い。加工段51の北西側の一帯高い面から当該期の遺物が若干出土しており、それに関わるものかも知れない。よって加工段51の時期は塩津2期~3期あたりと推測される。

#### 東斜面最下方検出の遺構の配置（第375図）

柳造跡東斜面の最下方谷底には、後述するように黒色の粘質土が溜まっており、流れのない水面があった可能性が高い。ここを池状遺構と呼んでいる。この池状遺構をとりまくように6ヶ所の加工段が検出された。池状遺構は調査区中央あたりで西側に入り込んでおり、その上方には加工段52と加工段53、加工段54が検出された。各々はとなりあって切り合った関係が認められ、加工段53が両側のそれぞれの遺構より古いことがわかっている。

南半の急斜面側の池上方には、かなり長い加工段である加工段55が検出された。その南側は加工段56が続くが大半は未調査区で詳細は不明である。また調査区北端では加工段57、58が上下2段に検出されている。

#### 加工段52（第375図）

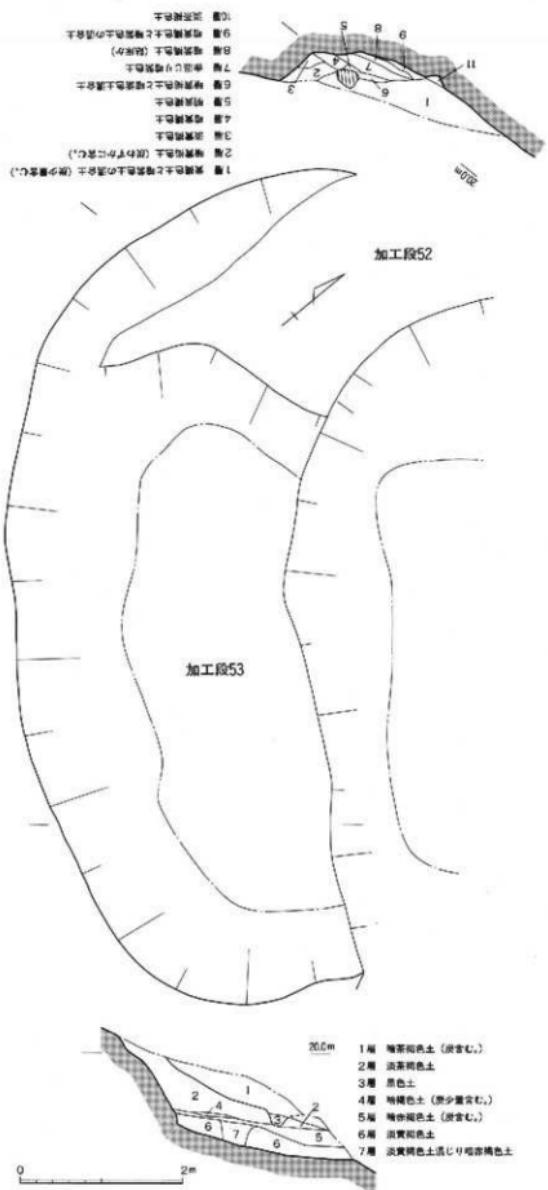
柳造跡東斜面の南半急斜面から北半谷部のやや緩やかな部分に移行する辺り、標高約19.5m付近で検出された加工段である。加工段49の下方で、加工段51や階段状遺構の南側にあたる。

加工段52は南側は加工段53と切り合って、平面的な広がりを確認することが出来ず、北側は自然の流出で失われている。さらに東側は池状遺構で切られているため全体の形態や規模は全くおさえることは出来ない。検出時の残存長は3.5m、残存幅は2mを測る。ただ、土層断面を見ると、平面的には全く検出できなかったが、本来存在していた加工段の礫土を切って別の加工段が形成されており、壁際の溝も存在していたことがわかる。つまり新古2つの加工段が重なり合っているわけで、見かけの規模や形態も必ずしも本来の遺構のあり方とは異なることになる。

南側で切り合う加工段53との前後関係は、調査中に加工段53の覆土の上に加工段52の床面らしき土層が続いているのが認められており、少なくとも加工段52の新段階の遺構は加工段53より新しいと考えられる。

加工段52出土遺物（第377図8、第378図1） 第378図1は加工段52の下方付近で出土した甕で、加工段52から流出した遺物と推測される。胴部上半部破片で、球形に近い胴部が推測される。外面にはハケメが見られ、頸部下付近にヨコナデによる稜線がはしる。第377図8も加工段52の下方から出土した遺物で、白色透明のメノウ製の剝片である。表面を大きく残すが、少なくとも2ヶ所に2次加工が認められる。7.1cm×2.8cm×3.2cmの不定形の塊状で、何らかの毛作に関わる遺物の可能性が高い。

出土した土師器甕（1）は、古墳時代中期以降と考えられる。よって加工段52の少なくとも新段階の以降は古墳時代中期に下る可能性が高い。新しい加工段に切られた古段階の遺構の時期は推測の手がかりもないが、近い時期と考えるのが自然であろう。



第376図 標準加工段52・加工段53実測図 S = 1 / 60

加工段53

柳跡遺跡東斜面の南半急斜面から北半谷部のやや緩やかな部分に移行する辺り、標高約19m付近で検出された加工段である。北側は加工段52と切り合い、南東側は加工段54と切り合っているが、いずれの加工段よりも床面が低い位置にあるため、床面の長さは確認できる。調査時に平面的に床面を検出できずにやや掘りすぎたため、正確な数字は表示できないが長さ約6mを測る。幅は下方側を池状遺構によって切られているが、検出時の残存幅1.9mを測る。

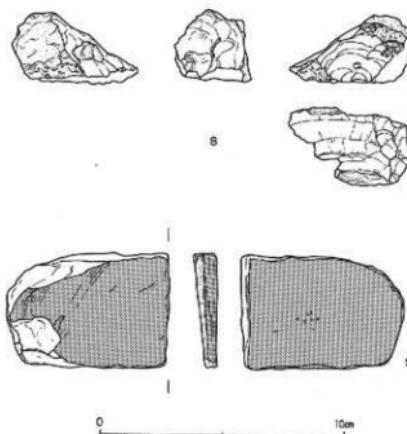
床面は、地山の上に15~30cmの盛土をして形成したようだ。第376図下方断面図の5層上面が床面と推測される。

加工段53出土遺物(第379)

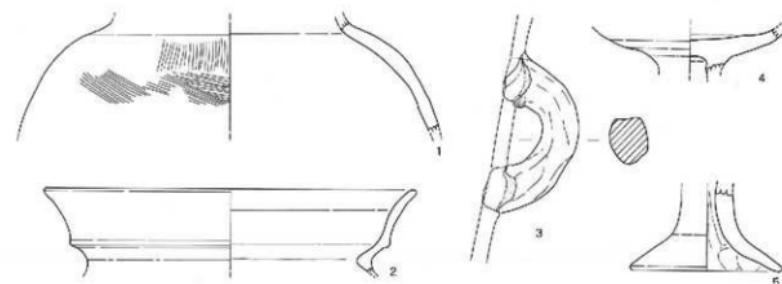
図) 1~5が床面と考えられる層から出土した遺物である。1は復元口径19.0cmを測る甕である。複合口縁部の稜は横方向に引き出し、その直上に稜を際だたせるためか1条の沈線を入れている。口縁はわずかに外反気味に立ち上がり、端部はわずかに外方にアクセントを付けている。胴部内面はヘラケズリを施し、砂は右に動いている。2は口

径15.7cmを測る甌である。複合口縁部の稜は、その上部を強くなることによって横方向を強調し、口縁は外方にまっすぐ立ち上がって、端部は外面をわずかに膨らませている。胴部内面は図上で砂が右に動くへラケズリで、白っぽい淡褐色を呈す。

3は復元口径20.0cmを測る壺である。複合口縁部の稜部分は横方向に引き出し、その直上には凹線を1条引く。口縁は内傾して立ち上がり、端部は外方に折り返すように曲げて、先端は丸くおさめる。白っぽい淡褐色を呈す。4は口径16.4cmを測る壺である。複合口縁部の稜は横に引き出し、その直上には稜の突出の強調のためか回線を1条引いている。口縁は内傾して立ち上がり、端部は外方に折り返して、先端を丸くおさめる。胴部内面はヘラケズリを施し、砂は図上で右に動いている。淡橙褐色を呈す。5はスタンプにより加飾された壺である。複合口縁部の稜は横方向や下向きに鋭く引きだされ、口縁は上半が欠損しているが外方に立ち上がるようである。頸部は緩やかに「ハ」字状に開き、頸部下付近には突帯が付けられていたらしく、1.2cm程の幅で剥落痕がめぐる。頸部には3重の同心円のスタンプがめぐり、その下段と口縁外面には横倒しの「W」字状の文様



第377図 加工段52・加工段55出土遺物実測図  
S=1/2 (3…加工段52出土、9…加工段55出土)



第378図 條道跡加工段52・加工段55・加工段58出土遺物実測図 S=1/3  
(1…加工段52出土、2~5…加工段55出土、6, 7加工段58出土)

をめぐらせており、この原体は文様の奥に筋が見えることから、鋸い木の小口状のものの組み合せと推測される。頸部以下、ちょうど突堤の下から以下には縦方向のハケメが施されている。胴部内面は図上で砂が右に動くヘラケズリを施している。橙褐色を呈す。

6～21は複土出土の遺物である。6は径の復元が不正確だが、復元口径19.4cmを測る複合口縁甕である。口縁は外方に向けてまっすぐ立ち上がり、外面は強くなれてくぼんでいる。口縁端部はわずかながら外方に引き出し気味である。白っぽい淡褐色を呈す。7～10は口縁外面に擬凹線を施す甕である。7は復元口径18.0cmを測る甕である。複合口縁の稜部分は斜め下方に突出し、口縁外面には擬凹線を施して外溝する。頸部付近は器壁1.2cmと分厚で口縁端部付近で細くなる。茶褐色を呈す。8は径の復元は不正確だが、口径19cm前後の複合口縁甕である。口縁は外反して立ち上がり、端部は丸くおさめる。9は復元口径20.0cmの複合口縁甕である。口縁は折れ曲がり気味に外反して立ち上がり、端部は丸くおさめている。10は復元口径16.4cmを測る複合口縁甕である。口縁外面には擬凹線を施して外溝する。頸部は分厚で、口縁端部は丸くおさめる。11は復元口径23.4cmの甕である。複合口縁部の稜部分は若干下方に垂下し、口縁は外方に立ち上がる。口縁端部は膨らんで丸くおさめている。口径に比して口縁の立ち上がりが低い個体である。

12は復元口径18.0cmを測る壺である。全体に薄手のつくりで、特に胴部や頸部は3mm～4mmと薄い。複合口縁部の稜の直上をなでてくぼませることによって稜を強調し、口縁はやや外方に立ち上がる。口縁端部は外方にわずかにアクセントを付けて丸くおさめる。頸部は緩やかに湾曲して胴部にいたり、胴部内面は図上で砂が右に動くヘラケズリを施している。13は復元口径15.6cmを測る壺である。複合口縁部の稜は横方向に突き出し、口縁はかなり内傾して立ち上がる。口縁端部は外方に折り返して、先端は丸くおさめる。14は直口壺であろう。口頸部は外方にまっすぐ立ち上がり、端部は先細りとなって、先端はわずかに外方に折れて丸くおさめる。淡橙褐色を呈す。

15は鼓形器台である。器壁が1cm～1.6cmと分厚で、筒部は比較的長く伸びるようである。脚台部外面には擬凹線を施している。16は脚台部外面に擬凹線を施す鼓形器台である。筒部の径が小さく比較的長く伸びるタイプである。17は裾がよく開いた脚台部で、低脚環もしくは台付き壺であろう。18は低脚環の脚部で、底径5.2cmを測る。

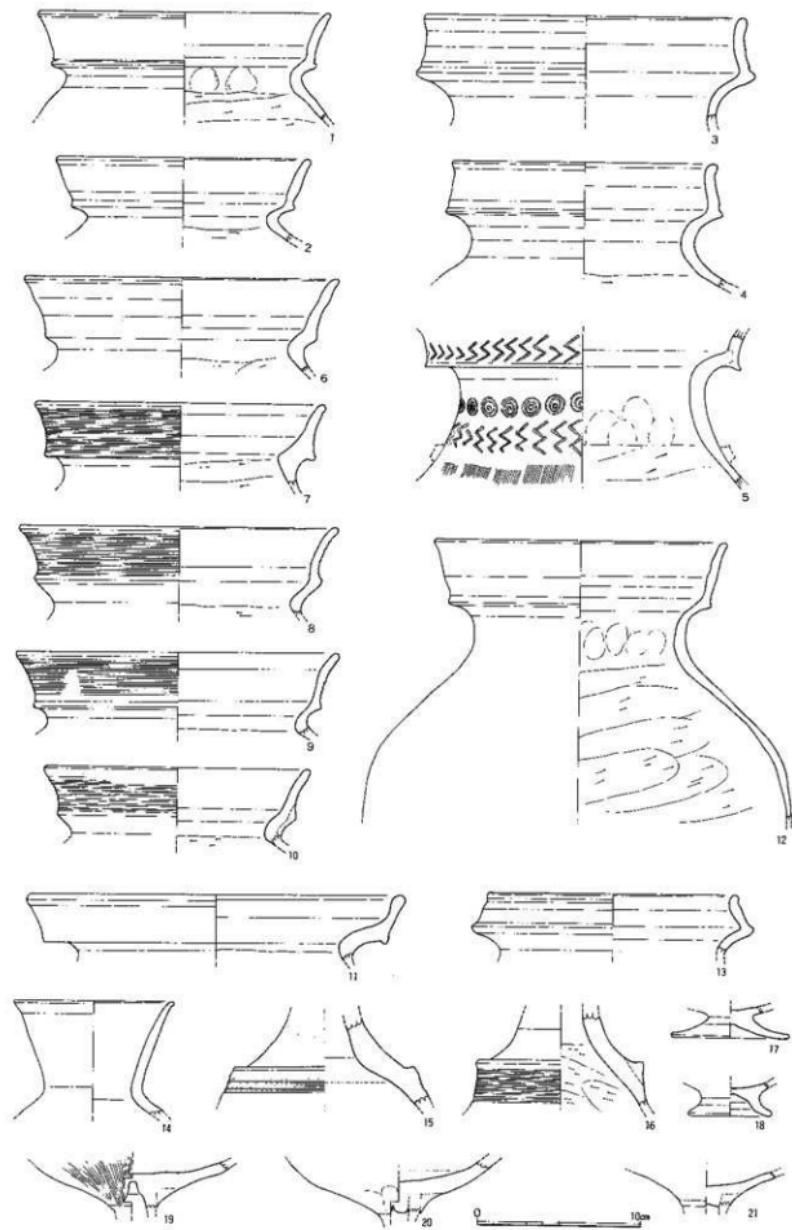
19～21は土師器高环である。19は接合部付近で、脚部と环部の接合は差し込み法による。环部底の下面には小孔がみられ、外面にはハケメを施す。20も同様の高环接合部付近で、底部下面には小孔が見られる。

加工段53の時期は、床面出土の遺物の特徴から埴津5期と考えられる。

#### 加工段54（第380図）

柳跡東斜面の南半急斜面から北半谷部のやや緩やかな部分に移行する辺り、標高約19m強付近で検出された加工段である。北側は加工段53と切り合ひ、南側は加工段55と切り合っている。双方とも加工段54が切っており、加工段54が新しい。

造構の3方を池状造構によって切られているため、全容は不明だが、まっすぐに切り込まれた壁がほぼ直角にまわり込むのが確認されており、ほぼ長方形の加工段であったと考えられる。検出時の残存する規模は、東西辺3m、南北辺4.5mを測る。壁際には底面の幅15cm～35cm、深さ10cm～15cmの溝が走っている。



第379図 柳遺跡加工段53出土遺物実測図 S = 1 / 3 (1~5…床面、6~21…覆土)

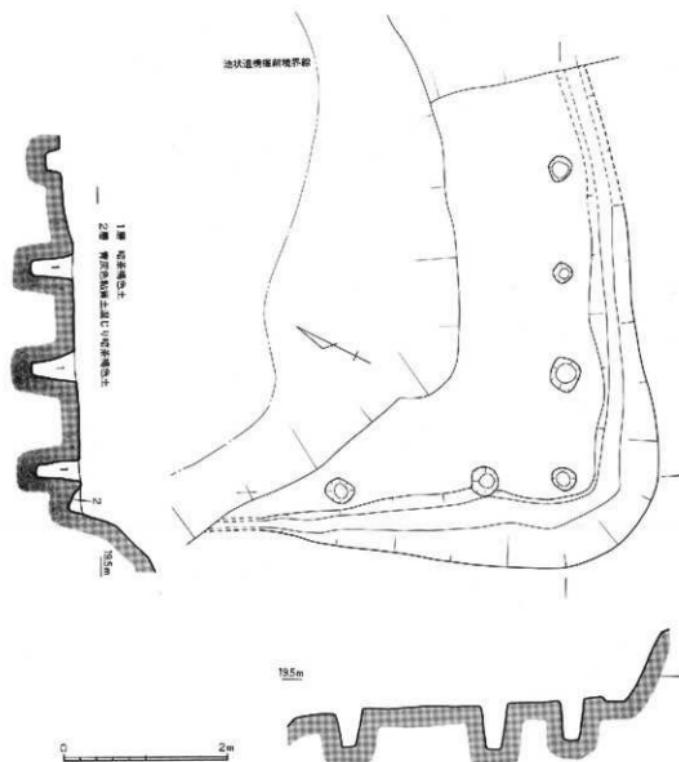
床面には壁に沿って柱穴が6穴検出された。これらは直角に交わって並ぶことから、掘立柱建物が建っていたものと考えられる。東西方向の柱列は、柱間が1.3mの等間隔に並び、南北は0.95mと1.9m間隔で、間の柱穴を1穴検出していない可能性がある。

この加工段からは図化できる遺物が出土していないため、時期は不明である。ただ建っていたと考えられる掘立柱建物が他の弥生時代後期のそれと比べて規模が大きく、弥生後期を下る時期、例えば造構が検出されている古墳時代中期の可能性を考えたい。

#### 加工段55（第381図）

柳遺跡東斜面南半の急斜面、標高約19m付近で検出された加工段である。北西側は加工段54によつて切られており、加工段55の方が占い。南東側は約30cm程の幅の溝で開まれた造構に切られているが、壁が斜面下方側にまわり込んでおり、この辺りで収束していたものと考えられる。

背後の壁はほぼまっすぐ掘り込まれており、検出時の残存長が9.8mとかなり長大な長方形の加工



第380図 柳遺跡加工段54実測図 S=1/60

段であったと考えられる。斜面下方側は池状造構によって切られているが、残りがよい部分では幅が3.5mを測る。床面からは9穴の柱穴状ビットが検出されているが、掘立柱建物を構成するよう並びは全く組めない。ただビットは深いものは65cmもの深さがあり、概してしっかりとしている。なんらかの柱建ちの施設が存在していた可能性は高いだろう。

加工段55出土遺物(第378図2~5、第377図9) いずれも覆土内から出土した遺物である。2は復元口径23.0cmを測る弥生土器複合口縁甕である。口縁は器壁が4.5mm~5mmと薄手で、外反して立ち上がり、端部は丸くおさめる。3はコシキ形上器の把手であろう。長さ9.5cm、器壁に穴を開けて差し込んだ様子をうかがうことが出来る。4は須恵器高环である。器壁が6mm~11mmと厚手で、脚柱部の径は4cm前後である。5は土師器高环の脚部である。全体に厚いつくりで、淡橙褐色地に白色の縞が層状に入る胎土である。

第377図9は、やや緑色がかった黄灰色の細粒凝灰岩の板状素材である。長さ6.5cm、幅4.7cm、厚さ0.4cm~0.9cmを測る。両面はよく研磨されて平滑で、少なくとも1側面は擦り切りで切断されている。玉を製作するための素材である可能性が高い。

加工段55の時期は、覆土出土の遺物で考えるしかないが、遺物には時期差がある。2、3は弥生時代後期末葉のもの、4は7世紀以降と考えられ、この跡では他に類例のない時期である。5は古墳時代中期であろう。これらのうちどの時期が造構に対応するかは不明だが、一般的に考えて後2者の時期ならばしっかりととした掘立柱建物が建つ場合が多いと思われ、弥生時代後期末とすれば本遺跡で検出されている他の加工段のあり方と矛盾しない。よって塩津4期の可能性が高いと考えたい。

#### 第56加工段 (第381図)

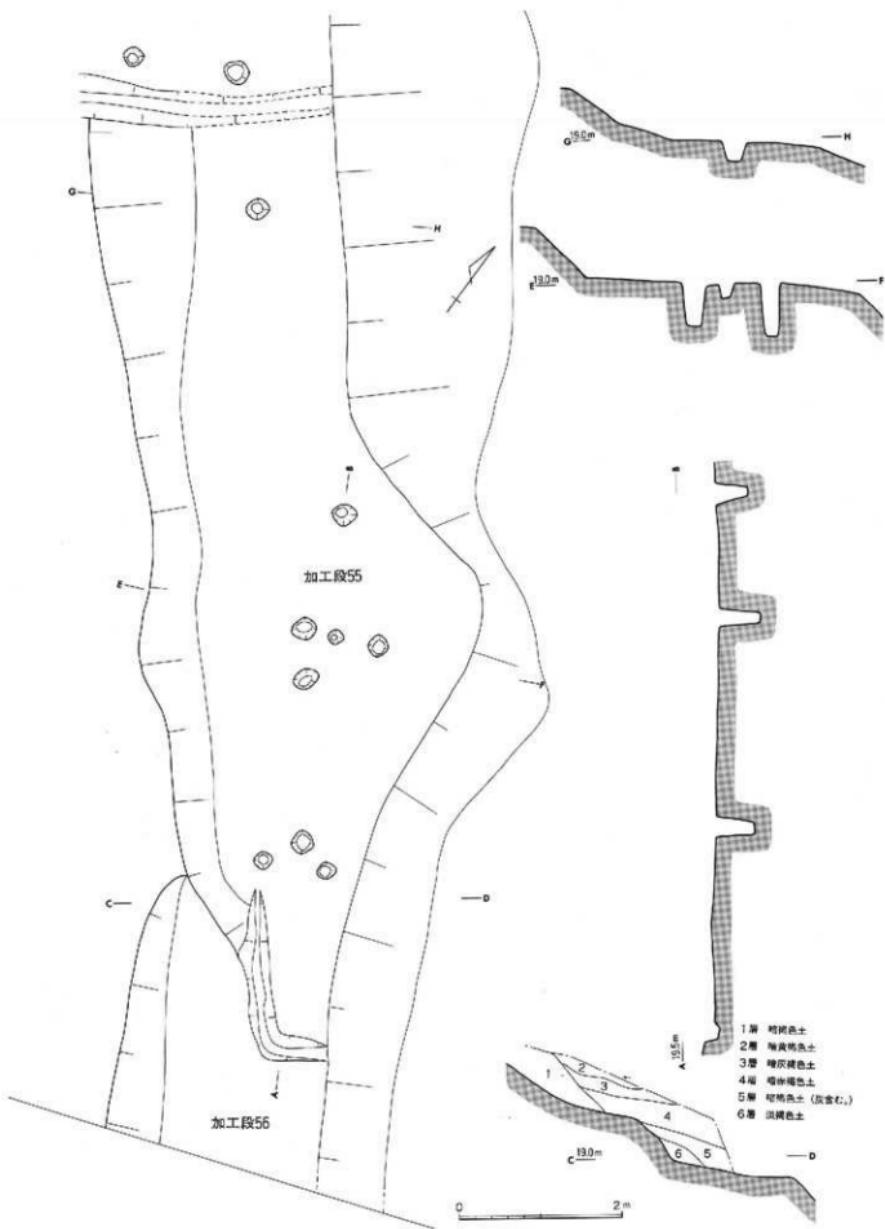
柳遺跡東斜面南半の急斜面、調査区南端の標高約19.5m付近で検出された加工段である。北側を加工段55と切り合い、南側は未調査区になって、その内容はほとんどつかむことは出来ない。ただ七層の観察により、加工段55よりは新しいことは明らかになった。遺物は出土しておらず、時期も不明である。

#### 第57加工段 (第382図)

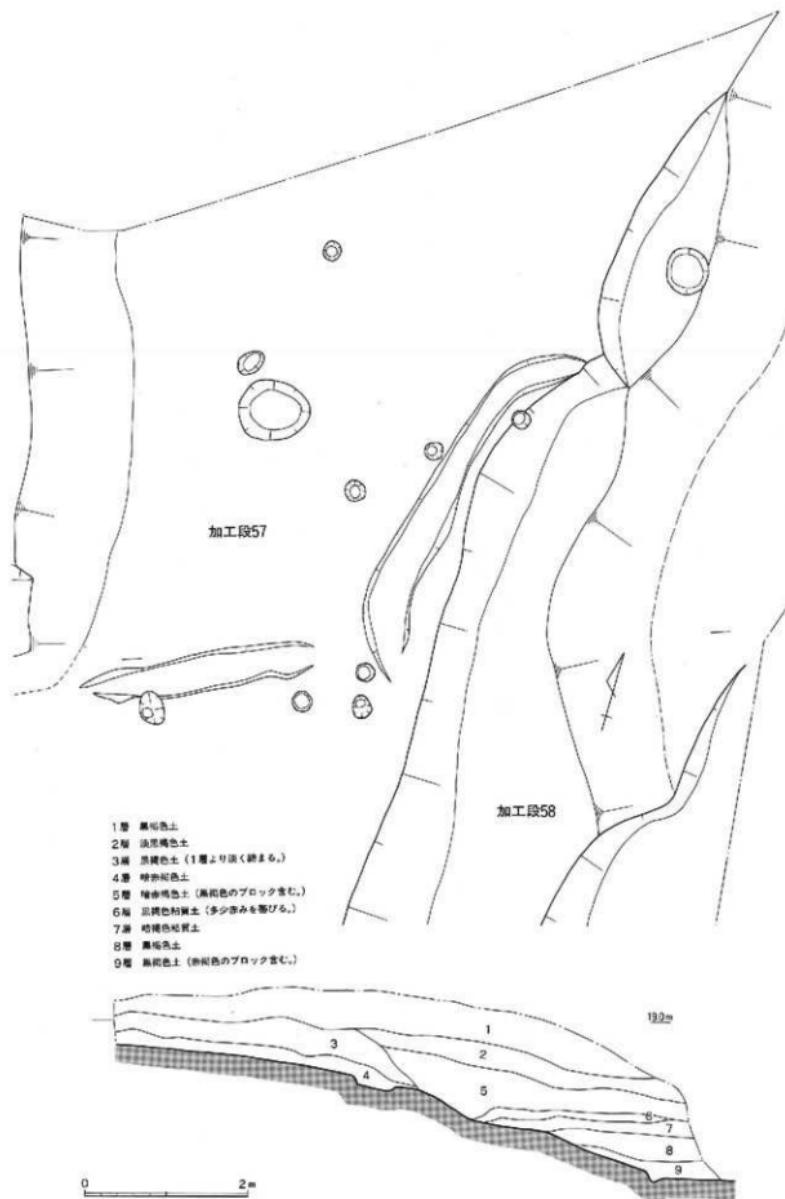
柳遺跡東斜面北半の谷部、標高約18.5m付近の平坦面を加工段57とした。加工段51や階段状造構のすぐ下方にある。加工段としてはいるが、背後の壁は表土から観察できた新しい時期の造成の壁で、壁や溝によって開まれた明瞭な加工段ではない。ただいくらかの造構と遺物が検出されたため、暫定的にこう呼んでいる。この平坦面にはビットが10穴と溝が2条検出されている。ビットは掘立柱建物となるような規則的な並びは観察できない。溝のうち東側のものは長さ4mほどで両側が曲がってきており、なんらかの区画の溝であろう。削平のためか圓化出来る遺物は出土しておらず、時期も不明である。

#### 第58加工段 (第378図・第382図)

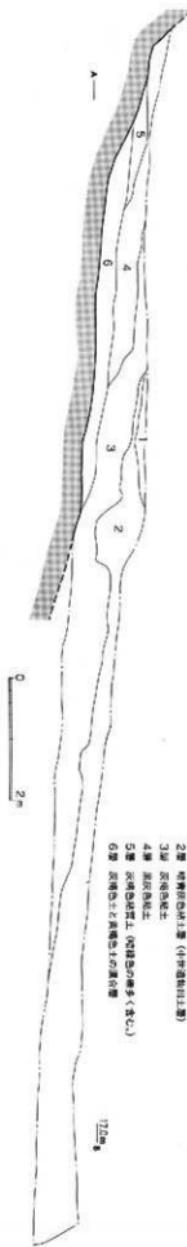
柳遺跡東斜面北半の谷部、標高約18m付近で検出された加工段で、加工段57のすぐ下方にあたる。南側は池状造構によって切られているため、全容は不明だが、検出時の残存長が10mをこえる長大な



第381図 柳遺跡加工段55・加工段56実測図 S = 1 / 60



第382図 柳遺跡加工段57・加工段58実測図 S=1/60



加工段である。背後の壁はほぼまっすぐ伸びており、北端は緩やかにまわり込んでいるので、コーナーが丸みのある長方形に掘り込まれた加工段であろう。床面から柱穴等は検出されていない。加工段58の下方にも加工段があつたらしく、その上に土砂を盛って加工段58の床面を形成しているのが土層の堆積状況からわかる。

加工段58の北側にも3.6mの長さで加工段が残存している。径50cmのピットが1穴検出されているが、詳細は不明である。

加工段58出土遺物（第378図6、7） いずれも覆土出土の遺物である。6は径の復元は不正確だが、口径28cm前後の大形の複合口縁甕である。口縁はほぼ直立し、端部付近で外方に折れ、先端は丸くおさめている。淡褐色を呈す。7は器台であろうか。器壁が3.5mm～4mmと薄手で、受け部の稜部分は下方に突出している。

加工段58の時期は、覆土出土遺物で判断する限り塙津4期～5期の範囲で捉えられる。

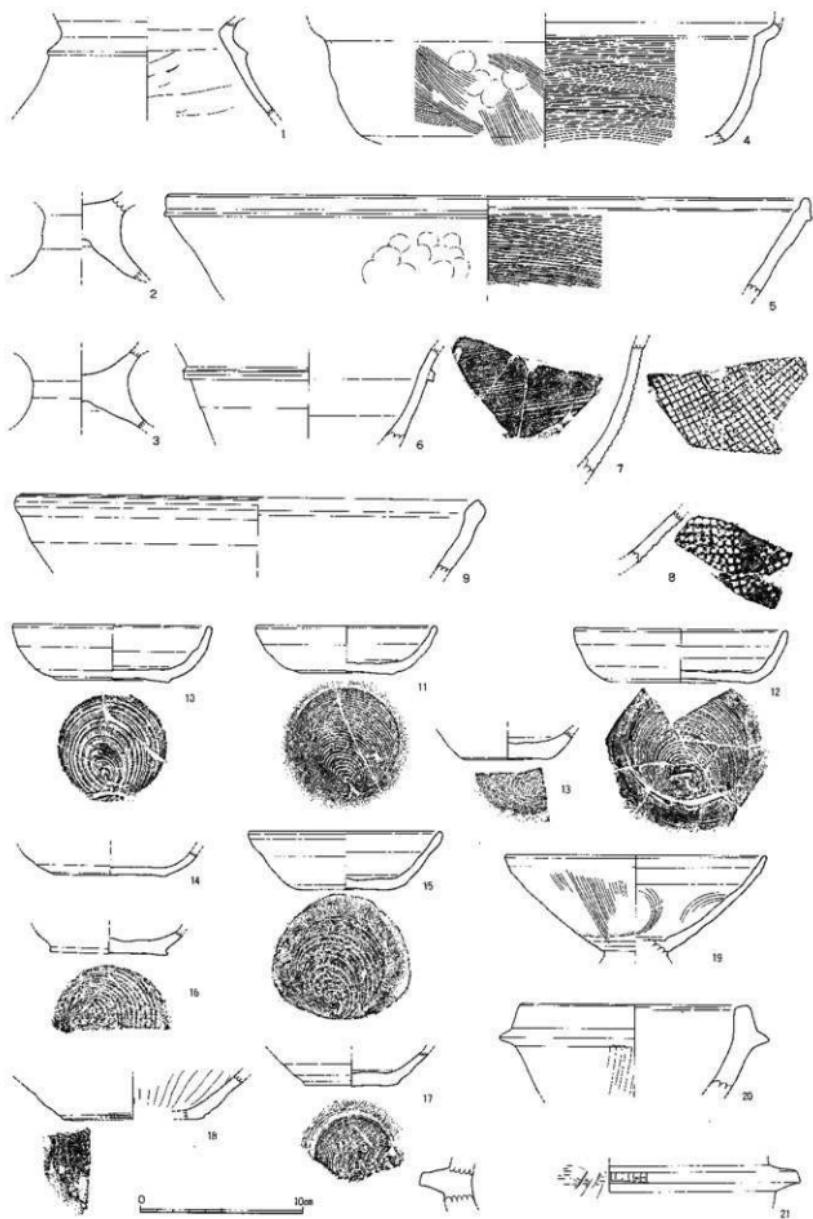
#### 池状遺構（第187図、第375図、第383図）

柳跡東斜面の最下方谷底の上半部には、黒色の粘土が堆積しているのが確認され、流れのない水面が存在した可能性が高いと考えて池状遺構と名づけた。池状遺構は一部西側に嵌入して検出され、下方の境は調査の都合上明確には出来なかった。前述したように、この谷底には現在でも湧水地があり、水量は豊富で堤を形成するには適した場所といえる。

池状遺構出土遺物（第384図） 遺物は黒色粘土の上方に堆積した暗青灰色粘土層を中心に出土している。1～3は弥生土器である。塙津5期に併行するもので、上方の遺構から転落して混入したものだろう。4は土師質土器の鍋であろう。口縁端部は欠損しているが、口径は30cm前後になるものと考えられる。外面はハケメが見られるが、指頭圧痕によりかなり凹凸がある。名面は横方向のハケメを丁寧に施している。暗褐色を呈し、外面には煤が付着している。5は土師質土器もしくは須恵器の鉢であろうか。小片で口径の復元は不正確だが、かなり大きな口径で、外面は指頭圧痕が見られ凹凸が目立つ。内面は横方向のハケメを施している。還元状態で焼成は良く、灰白色を呈す。

6は須恵器の壺もしくは壺である。底部に近い部分でおよその底径は11cm前後になるものと推測される。器面には断面台形でコーナーにアクセントを付ける突帯を貼り付けている。細砂粒を含み、淡青灰色を呈す。7は須恵器の甕である。外面は4mm前後の単位の整然とした格子タタキが見られ、内面はハケメを施す。表面が黒灰色、断面は灰白色を呈す。いわゆる亀山焼の類だろう。8は土師質土器の甕であろ

第383図 柳跡池状遺構土層断面実測図 S=1/80



第384図 柳遺跡池状造構出土遺物実測図 S=1/2

うか。焼きが甘く、白っぽい淡褐色を呈す。外面には1単位3mm程のネガティブな格子状タタキが見られる。内面は不明瞭だが、なでであろうか。9は非常に良く焼き縮まつたわゆる炻器の類で、鉢であろうか。表面はやや紫色がかった暗褐色、断面は灰白色でやや大粒の白色砂粒を含む。

10~17は土師質土器の坏である。いずれも底部は回転糸切痕が見られ、白っぽい淡褐色もしくは灰白色を呈す。10~12は底部が比較的広く、体部は内溝して立ち上がり、高さが比較的低い特徴を持つ。13はやや厚手で、色も白っぽくない。15は体部がほぼまっすぐ外方に立ち上がっている。16はわずかに円盤状に突出する底部である。10世紀~11世紀のものと考えられ、12世紀に下るものもあるかも知れない。

18は黒色土器の擂鉢であろうか。内面が擦り減りもしくは風化で不明瞭だが、朱線が入っているように見える。底部は残存部が少ないが、糸切り痕状の線を観察できる。表面が黒色、断面は灰白色を呈す。

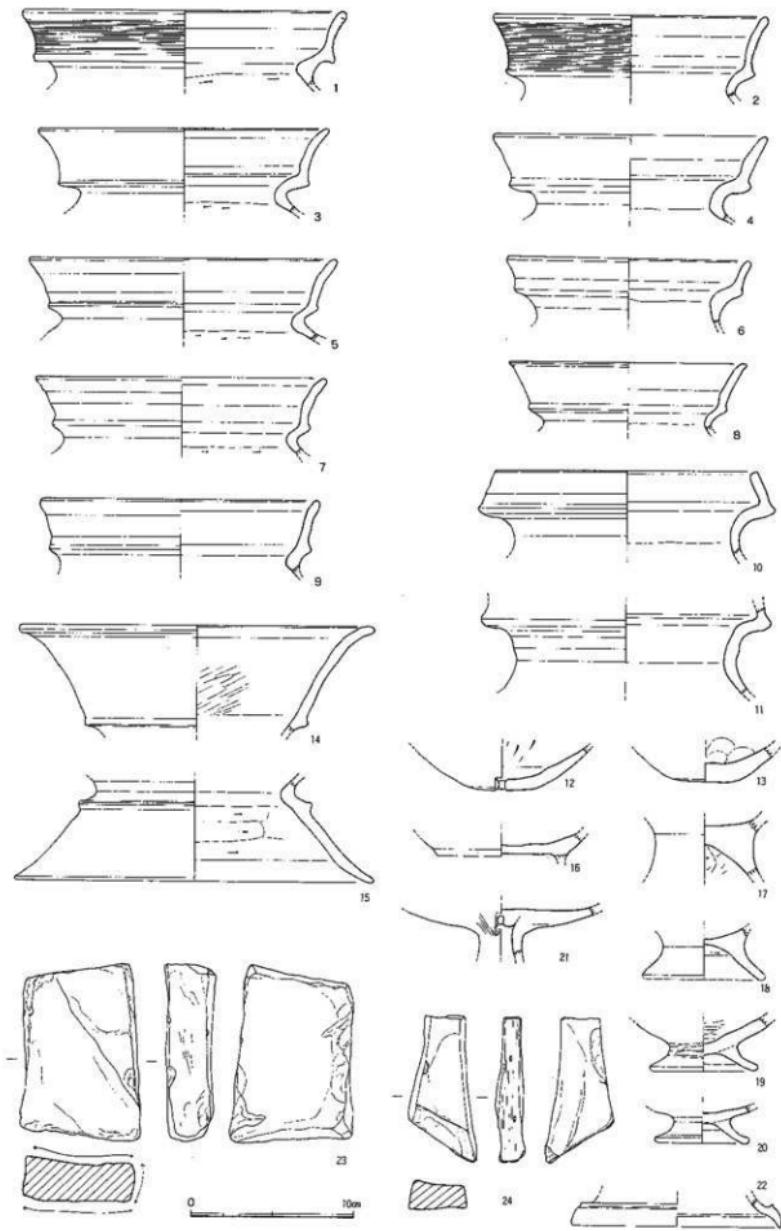
19は同安窯系青磁碗<sup>(1)</sup>である。復元口径16.2cmで高台は削り出しているようだ。釉はやや緑かかった薄い黄土色で、高台の上方あたりまでかかっている。外面には横で斜め方向に細かな朱線をいれ、内面は外面より粗い横で弧状の文様を描いている。胎土は若干すが入り、乳白色を呈す。12世紀後半台であろう。

20、21は滑石製石鍋である<sup>(2)</sup>。径の復元は不正確だが、口径14cm前後と小形である。口縁部直下に断面三角形の鋲を削り出している。鋲の下方には縦方向の加工痕が見られ、煤が付着して黒くなっている。21は長く張り出した台形の鋲を削り出したものである。鋲の部分の復元径が23cm前後と20に比べて大型である。鋲には横ないし斜め方向の加工痕がよく観察できる。破面の1面には斜め方向の平行な筋が観察され、破損後再加工をしたものと考えられる。あるいは鋸状のもので断ち切ったものかも知れない。12世紀台のものであろう。

以上の遺物は、1~3を除けば、若干の時期幅はあるものの、およそ平安時代の範疇におさまるものと考えられる<sup>(3)</sup>。

## 注

- (1) 川越哲志 1993『弥生時代の鉄器文化』
- (2) 高橋照彦 1995『縁釉陶器』『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会
- (3) 渡辺忠世氏のご教示による。
- (4) 穴澤義功氏のご教示による。
- (5) 穴澤義功氏から黒っぽい鍛造剝片を中心とする鍛冶炉は、一般的に5世紀の前半辺りまでとのご教示を頂いた。
- (6) 大谷晃二 1994『出雲地域の須恵器の編年と地域色』『島根考古学会誌』第11集
- (7) 桜井市教育委員会 橋本輝彦氏のご教示を得た。
- (8) 山本信大 1995『中世前期の貿易陶磁器』『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編
- (9) 木戸雅寿 1995『石鍋』『概説 中世の上器・陶磁器』 中世土器研究会編
- (10) 年代観については島根県埋蔵文化財調査センター 林健亮氏のご教示を得た。



第385図 柳遺跡東斜面部 造構に伴わない遺物実測図 S=1/3



## 6. 龜ノ尾古墳



## 6. 亀ノ尾古墳

### 第1節 調査の概要

亀ノ古墳は安来市日白町字亀ノ尾に位置し、中海より約1km南へはいった標高45m前後の丘陵頂部に立地する。

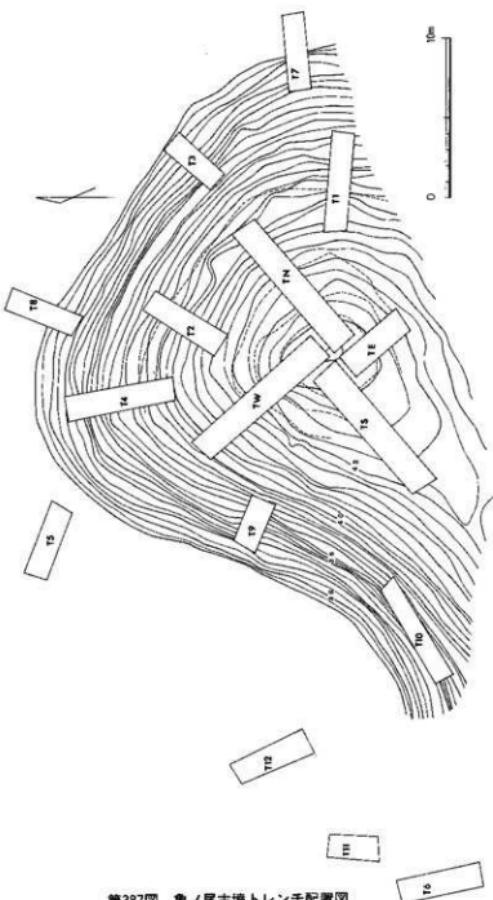
当遺跡は安来道路建設予定地内の分布調査において発見された遺跡で、調査前は一辺約10m、高さ約50cmの不整形なマウンド状を呈していた。立地条件やマウンド状の高まりなどからみて前～中期の 小規模な方墳である可能性が想定されたため、本調査に備えて試掘調査を行うこととなった。

### 第2節 調査の結果

調査は古墳と想定された丘陵頂部の高まりに任意の十字形に4ヶ所のトレンチを設定して掘り下



第386図 亀ノ尾古墳位置図



第387図 龜ノ尾古墳トレンチ配置図

### 第3節 まとめ

亀ノ尾古墳は、当初小規模なマウンドを持つ古墳の存在を想定して調査を実施したが、調査の結果古墳であるという確証を得ることはできなかった。ただし丘陵頂部において近世以降の陶磁器・土器が若干出土していることから、近世以降の一時期、何らかの形でこの地が利用されたことは間違いないことと思われる。

げ、遺構検出に努めた。また丘陵北及び西側斜面においても横穴墓等の存在を想定してトレンチを12ヶ所設定し、調査を実施した。

丘陵頂部の4ヶ所のトレンチにおいては、表土は極めて浅く、約10cm前後の腐食土を取り除くとすぐ地山岩盤に達するような状況であった。これらのトレンチからは、当初想定していたような古墳の主体部と考えられる遺構や古墳の盛土等は認められず、また墳丘を区画するような溝等も検出されなかった。

ただ、丘陵頂部北トレンチにおいて若干の陶磁器・土器を検出した。これらの遺物はその特徴から近世以降のものと判断される。

丘陵北及び西側斜面に設定したトレンチにおいては、各トレンチとも表土（腐食土）10cm前後、流土（暗黄褐色粘質土）20~30cm前後をはさんで地山に達しており、遺構・遺物等は検出されなかった。

## 7. 自然科学的分析



# 柳遺跡出土の玉材剝片の産地分析

森田哲男

(京都大学原子炉実験所)

## はじめに

遺跡から出土する大珠、勾玉、管玉の産地分析というは、玉類の製品が何處の玉造遺跡で加工されたということを調査するのではなくて、何ヶ所かあるヒスイの原産地うち、どこの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法<sup>1)</sup>および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光X線分析で行う元素比法<sup>2)</sup>が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析で系統的に行った研究は蛍光X線分析法と電子スピントーチ法を併用し産地分析より正確に行なった例<sup>3)</sup>が報告されている。石器など石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。(1)石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。(2)玉類は古代人が生きるために必ずしもいるものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリーとして、精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになる玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圈を現わしているかもしれない。お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行なった遺物は、安来市、柳遺跡の東斜面加工段32から1995年9月8日に出土した弥生時代終末期(3世紀前半)の玉材剝片(Y-1)で分析結果が得られたので報告する。

## 非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組合せ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行なえる方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している“非破壊で分析を行なう蛍光X線法”を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行なった。玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類はESR法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含

有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、产地分析に利用した<sup>6</sup>。

### 碧玉原石の蛍光X線分析

碧玉の蛍光X線スペクトルの例として鳥取県、花仙山産原石を図1に示す。猿八産、玉谷産の原石から検出される蛍光X線ピークも異同はあるものの図1で示されるピークは観測される。土岐、興部の産地の碧玉は鉄の含有量が他の産地のものに比べて大きいのが特徴である。产地分析に用いる元素比組成は、Al/Si、K/Si、Ca/K、Ti/K、K/Fe、Rb/Fe、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zrである。Mn/Fe、Ti/Fe、Nb/Zrの元素比は非常に小さく、小さい試料の場合測定誤差が大きくなるので定量的な判定の指標とはせず、判定のときに、Ba、La、Ceのピーク高さとともに、定性的に原产地を判定する指標として用いる。

### 碧玉の原産地と原石の分析結果

分析した碧玉の原石の原産地を図4に示す。佐渡猿八原産地は、①新潟県佐渡郡朝日町猿八地区で、産出する原石は地元で青玉と呼ばれている緑色系の石で、良質なものは割れ面がガラス光沢を示し、質の良くないものは光沢の少ないグリーンタフ的なものである。産出量は豊富であつたらしく採石跡が何ヶ所か見られ、分析した原石は猿八の各地点から表採したものおよび地元で提供された原石などで、提供されたものの中には露頭から得られたものがありグリーンタフ層の間に約7cm幅の良質の碧玉層が挟まれた原石であった。分析した原石の比重と個数は、比重が2.6~2.5の間のものは31個、2.5~2.4の間は5個の合計36個で、この中には、茶色の碧玉も2個含まれている。原石の比重が2.6~2.3の範囲で違っても、碧玉の色が茶色、緑色、また、茶系色と緑系色の縞があるなど、多少色の違いがあっても組成上には反映されていない。出雲の花仙山は近世まで採掘が行われ

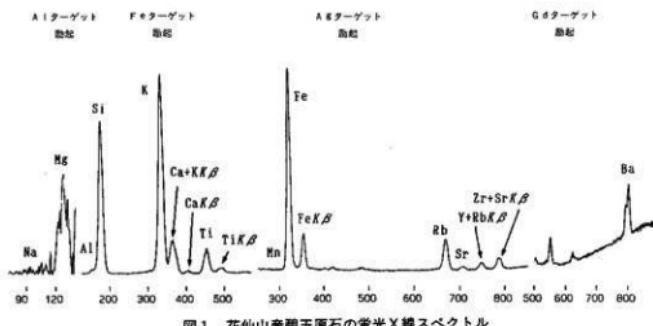


図1 花仙山産碧玉原石の蛍光X線スペクトル

た原産地で、所在地は②島根県八束郡玉湯町下造温泉地域である。産出する原石は濃緑色から緑色の緻密で、剝離面が光沢をもつ良質の碧玉から淡緑色から淡白色などいろいろで、硬度が低そうなグリーンタフの様な原石も見られる。良質な原石の比重は2.5以上あり、質が悪くなるにしたがって比重は連続的に2.2まで低くなる。分析した原石は、比重が2.619～2.600の間のものは10個、2.599～2.500は18個、2.499～2.400は7個、2.399～2.300は11個、2.299～2.200は11個、2.199～2.104は3個の合計60個である。比重から考えると碧玉からグリーンタフまでの領域が分析されている。花仙山産原石は色の違い、比重の違いによる組成の差はみられなかった。玉谷原産地は、③兵庫県豊岡市辻、八代谷、日高町玉谷地域で、産出する碧玉の色、石質などは肉眼では花仙山産の原石と全く区別がつかない。また、原石の中には緑系色に茶系色が混じるものもみられ、これは佐渡猿八産原石の同質のものに非常によく似ている。比重も2.6以上あり、質は花仙山産、佐渡猿八産原石より優れた感じのものもみられる。この様な良質の碧玉の採取は、産出量も少ないことから長時間をかけて注意深く行う必要がある。分析した原石は、比重が2.644～2.600は23個、2.599～2.589は4個の合計27個で、玉谷産原石は色の違いによる分析組成の差はみられなかった。また、玉谷原石と一致する組成の原石は日高町八代谷、石井、アンラクなどで採取できる。二俣原産地は、④石川県金沢市二俣町地城で、原石は二俣川の河原で採取できる。二俣川の源流は医王山であることから、露頭は医王山に存在する可能性がある。河原で見られる碧玉原石は、大部分がグリーンタフ中に層状、レンズ状に非常に緻密な部分として見られる。分析した4個の原石の中で、3個は同一塊から3分割したもので、1個は別の塊からのもので、前者の3個の比重は2.42で後者は2.34である。元素組成は他の産地の組成と異なり区別できる。この4個が二俣原産地から産出する碧玉原石の特徴を代表しているかどうか、さらに分析数を増やす必要がある。細入村の産地は、⑤富山県婦負郡細入村割山定座岩地区のグリーンタフの岩脈に塊として緻密な濃緑の碧玉質の部分が見られる。肉眼では、他の産地の碧玉と区別できず、また、出上する碧玉製の玉類とも非常に似た石質である。しかし、比重が非常に軽く、分析した8個は2.25～2.12で、この比重の値で他の原産地と区別できる場合が多い。土岐原産地は、⑥愛知県土岐市地域で、赤色、黄色、緑色などが混じり合った原石が産出し、このうち緻密な光沢のよい濃緑で比重が2.62～2.60の原石を碧玉として11個分析を行った。この原石は鉄の含有量が非常に大きく、カリウム含有量が小さいという特徴を持ち、この元素比の値で他の原産地と区別できる。奥部産地、⑦北海道紋別郡西興部村の碧玉原石には鉄の含有量が非常に高く、他の原産地と区別する指標になっている。また、比重が2.6以下のものはなく遺物の産地を特定する指標として重要である。石戸の産地、⑧兵庫県氷上郡山南町地区の安山岩に脈岩として採取されるが産出量は非常に少ない。元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。⑨北海道富良野市の空知川流域から採取される碧玉は濃い緑色で比重が2.6以上が4個、2.62.5が5個、2.52.4が5個である。碧玉の露頭は不明で河原の疊から採取するため、短時間で良質のもの碧玉を多数収集することは困難である。元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。⑩北海道上磯郡上磯町の茂辺地川の川原で採取される碧玉で不均一な色の物が多く、管玉に使用できる色の均一な部分を大きく取り出せる原石は少ない。これら原石を原産地ごとに統計処理を行い、元素比の平均値と標準偏差値をもとめて母集団を作り表1に示す。各母集団に原産地名を付けて、その産地の原石群、例えば花仙山群と呼ぶ。花仙山群は比重によって2個の群に分けて表に示したが比重は異なっても組成に大きな違いはみられない。したがって、統計処理は一緒にして行い、花仙山群として取り扱った。原石群と

表1 各碧玉の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原石 群名	分析 個数	Al/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K	K/Fc
		$\bar{X} \pm \sigma$				
奥部	31	0.011±0.003	0.580±0.320	0.123±0.137	0.061±0.049	0.022±0.006
空知A1	10	0.049±0.017	1.044±0.299	2.308±0.556	0.484±0.096	0.052±0.012
空知A2	3	0.019±0.009	0.675±0.377	0.623±0.203	0.172±0.031	0.040±0.007
空知B	2	0.066±0.001	3.927±0.267	0.088±0.004	0.089±0.003	0.283±0.034
猿八	36	0.046±0.007	3.691±0.548	0.049±0.038	0.058±0.011	0.370±0.205
土岐	11	0.010±0.001	0.404±0.229	0.090±0.074	0.057±0.035	0.027±0.007
玉谷	27	0.025±0.009	0.625±0.297	0.110±0.052	0.476±0.104	0.045±0.014
花仙山1	27	0.019±0.004	0.909±0.437	0.171±0.108	0.222±0.098	0.059±0.019
花仙山2	33	0.023±0.003	1.178±0.324	0.157±0.180	0.229±0.139	0.055±0.015
細入	8	0.019±0.003	0.534±0.284	0.991±0.386	0.372±0.125	0.031±0.008
二俣	4	0.043±0.001	2.644±0.183	0.337±0.079	0.158±0.009	0.312±0.069
石戸	4	0.019±0.004	0.601±0.196	0.075±0.022	0.086±0.038	0.154±0.072
茂辺地川	4	0.031±0.002	1.847±0.246	0.077±0.024	0.222±0.032	0.092±0.021
女代南B	68	0.045±0.016	3.115±0.445	0.042±0.024	0.107±0.036	0.283±0.099
未定C	58	0.030±0.028	4.416±0.618	0.013±0.013	0.207±0.034	0.589±0.130
原石 群名	分析 個数	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr
		$\bar{X} \pm \sigma$				
奥部	31	0.070±0.021	174.08±124.9	16.990±13.44	0.668±0.435	1.801±1.434
空知A1	10	0.108±0.042	4.658±2.044	0.438±0.089	15.676±4.311	0.054±0.041
空知A2	3	0.037±0.010	27.651±10.97	1.132±0.759	5.930±3.179	0.349±0.251
空知B	2	0.455±0.010	2.281±0.278	1.035±0.104	0.235±0.084	0.129±0.022
猿八	36	0.384±0.153	1.860±1.070	0.590±0.185	0.139±0.127	0.165±0.138
土岐	11	0.091±0.029	47.549±31.76	4.074±2.784	0.271±0.323	0.269±0.265
玉谷	27	0.151±0.020	6.190±1.059	0.940±0.205	0.192±0.170	0.158±0.075
花仙山1	27	0.225±0.028	10.633±3.616	2.345±0.693	0.476±0.192	0.098±0.052
花仙山2	33	0.219±0.028	12.677±2.988	2.723±0.519	0.472±0.164	0.132±0.071
細入	8	0.073±0.020	12.884±3.752	0.882±0.201	1.879±0.650	0.026±0.032
二俣	4	0.338±0.039	1.495±0.734	0.481±0.176	0.697±0.051	0.088±0.015
石戸	4	0.170±0.079	7.242±1.597	1.142±0.315	0.649±0.158	0.247±0.092
茂辺地川	4	0.190±0.052	5.566±1.549	0.980±0.044	0.360±0.032	0.171±0.051
女代南B	68	0.267±0.063	2.374±0.676	0.595±0.065	0.214±0.097	0.171±0.047
未定C	58	0.650±0.113	0.583±0.110	0.369±0.035	0.090±0.030	0.070±0.026
原石 群名	分析 個数	Mn/Fc	Ti/Fe	Nb/Zr	比重	
		$\bar{X} \pm \sigma$	$\bar{X} \pm \sigma$	$\bar{X} \pm \sigma$	$\bar{X} \pm \sigma$	
奥部	31	0.004±0.003	0.001±0.001	0.455±0.855	2.626±0.032	
空知A1	10	0.078±0.152	0.019±0.005	0.003±0.007	2.495±0.039	
空知A2	3	0.009±0.003	0.006±0.002	0.118±0.167	2.632±0.012	
空知B	2	0.015±0.002	0.022±0.004	0.123±0.010	2.607±0.001	
猿八	36	0.003±0.001	0.018±0.010	0.032±0.014	2.543±0.049	
土岐	11	0.001±0.001	0.001±0.001	0.261±0.242	2.607±0.009	
玉谷	27	0.006±0.003	0.015±0.003	0.054±0.021	2.619±0.014	
花仙山1	27	0.001±0.001	0.009±0.002	0.042±0.034	2.570±0.044	
花仙山2	33	0.001±0.001	0.009±0.004	0.035±0.025	2.308±0.079	
細入	8	0.003±0.002	0.008±0.002	0.021±0.344	2.169±0.039	
二俣	4	0.007±0.002	0.043±0.010	0.043±0.023	2.440±0.091	
石戸	4	0.007±0.001	0.009±0.002	0.227±0.089	2.598±0.008	
茂辺地川	4	0.003±0.008	0.016±0.001	0.132±0.069	2.536±0.033	
女代南B	68	0.011±0.004	0.026±0.009	0.034±0.016	2.554±0.019	
未定C	58	0.002±0.001	0.101±0.019	0.019±0.016	2.646±0.023	

X: 平均値、σ: 標準偏差値

女代南B: 女代南遺跡(豊岡市)で使用されている原石産地不明の玉原材料で作った群

未定C: 宇木汲田遺跡(唐津市)で使用されている原石産地不明の管玉で作った群

は異なるが、豊岡市女代南遺跡で主体的に使用されている原石産地不明の碧玉製の玉の原材料で、玉作り行程途中の遺物が多数出土している。当初、原石産地を探索すると言う目的で、これら玉、玉材遺物で作った女代南B(女代(B))群であるが、同質の材料で作られた可能性がある玉類は最近の分析結果で日本全土に分布していることが明らかになってきた。また、宇木汲田遺跡の管玉に産地未発見の原石を使用した同質の材料で作られた管玉で作った未定C(未定(C))群をそれぞれ原石群と同じように使用する。この他、鳥取県の福部村多賀池、鳥取市防己尾崎などの自然露頭からの原石を4個分析した。比重は2.6以上あり元素比組成は、興部、玉谷、土岐石に似るが、他の原産地の原石とは組成で区別される。また、縁系の原石ではない。

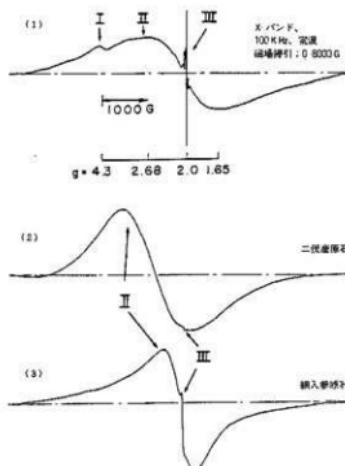
#### 柳遺跡出土の玉材剝片と国内産碧玉原材との比較

遺跡から出土した玉材は表面の泥を超音波洗浄器で水洗するだけの完全な非破壊分析で行っている。遺物の原産地の同定をするために、(1) 蛍光X線法で求めた原石群と碧玉製造物の分析結果を数理統計の手法を用いて比較をする定量的な判定法で行なう。(2) また、ESR分析法により各産地の原石の信号と遺物のそれを比較して、似た信号の原石の産地の原材であると推測する方法も応用した。

#### 蛍光X線法による産地分析

これら玉材の蛍光X線分析のスペクトルを図5に示し、比重および玉類の蛍光X線分析から原材の元素組成比を求めて結果を表2に示す。碧玉と分類した遺物は、緻密で、蛍光X線分析でRb, Sr, Y, Zrの各元素が容易に観測できるなどを条件に分類した。また、グリーンタフ製は比重が2.5に達しない管玉が多い。これら遺物の元素組成比の結果を碧玉原石群(表1)の結果と比較してみる。分析個数が少なくて統計処理ができる群が作れなかった産地については、原石の元素組成比を今回分析した遺物と比較したが一致するものは見られなかった。原石の数が多く分析された原産地については、数理統計のマハラノビスの距離を求めて行うホテリングT<sup>2</sup>検定<sup>1)</sup>により同定を行ったところ、興部、女代B、未定C、猿八の各群に一致するせず、花仙山群に同定され、また玉谷群には0.001%の確率で同定され玉谷産の可能性が高いと言ふ結果が得られ表3に示した。より正確に産地を特定するためにESR分析を併用して産地分析を行う必要がある。

図2 碧玉原石のESRスペクトル  
(花仙山、玉谷、猿八、土岐)



### ESR法による産地分析

ESR分析は碧玉原石に含有されているイオンとか、碧玉が自然界からの放射線を受けてできた色中心などの常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。ESRの測定は、完全な非破壊分析で、直徑が11mm以下の管玉なら分析は可能で、小さい物は胡麻粒大で分析ができる場合がある。図2-1のESRのスペクトルは、幅広く磁場掃引したときに得られた信号スペクトルで、g値が4.3の小さな信号(Ⅰ)は鉄イオンによる信号で、g値が2付近の幅の広い信号(Ⅱ)と何本かの幅の狭いピーク群からなる信号(Ⅲ)で構成されている。図2-(1)では、信号(Ⅱ)より信号(Ⅲ)の信号の高さが高く、図2-(2)、-(3)の二俣、細入原石ではこの高さが逆になっているため、原石産地の判定の指標に利用できる。今回分析した下類の中で信号(Ⅱ)が信号(Ⅲ)より小さい場合は、二俣、細入産でないといえる。各原石の信号(Ⅲ)の信号の形は産地ごとに異同があり産地分析の指標となる。図3-(1)に花仙山、猿八、玉谷、土岐を図3-(2)に奥部、石戸、八代谷-4、女代(B)遺物群、八代谷および図3-(3)に富良野市空知川の空知(A)、(B)、北海道今金町花石および茂辺地川の各

表2 柳遺跡出土玉材刺片の分析結果

遺物番号	分析番号	元素比							
		Al/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K	K/Fe	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr
Y-1	49173	0.024	1.480	0.038	0.124	0.087	0.169	11.905	2.014
JG-1*		0.074	3.751	0.755	0.223	0.113	0.269	3.707	0.997

遺跡番号	分析番号	元素比					重量gr	比重	備考
		Sr/Zr	Y/Zr	Mn/Fe	Ti/Fe	Nb/Zr			
Y-1	49173	0.185	0.162	0.001	0.010	0.087	2,5921	2.407	
JG-1*		1.345	0.240	0.022	0.023	0.092			

a) 標準試料、Ando,A., Kurasawa,H., Ohmori,T., & Takeda,E., (1974).  
1974 compilation of data on the GJS geochemical reference  
samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt.  
Geochemical Journal, Vol. 8 175-192.

表3 柳遺跡出土玉材鈎片の原石産地分析結果

遺物番号	分析番号	碧玉製玉材蛍光X線分析法による帰属確率					ESR	総合判定
		興部群	玉谷群	花仙山群	猿八群	女代(B)群未定(C)群		
Y-1	49173	1×10 <sup>-8%</sup>	0.001%	2%	<10 <sup>-10%</sup>	<10 <sup>-10%</sup>	<10 <sup>-10%</sup>	試料過大 花仙山産

図3-(1)碧玉原石の信号IIIのE S Rスペクトル

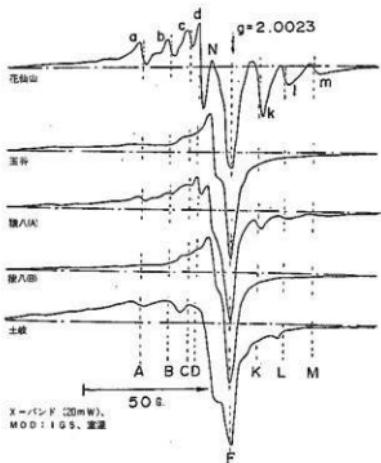


図3-(3)碧玉原石の信号IIIのE S Rスペクトル

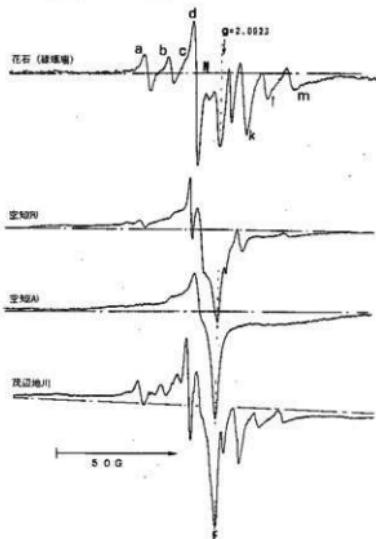


図3-(2)碧玉原石の信号IIIのE S Rスペクトル

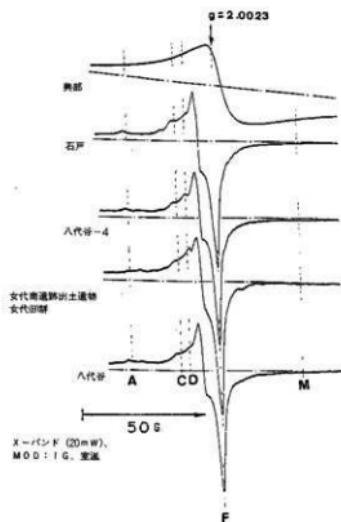
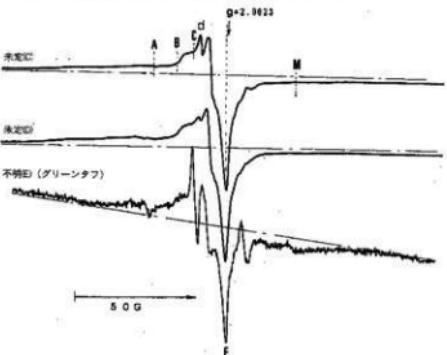


図3-(4)碧玉原石の信号IIIのE S Rスペクトル

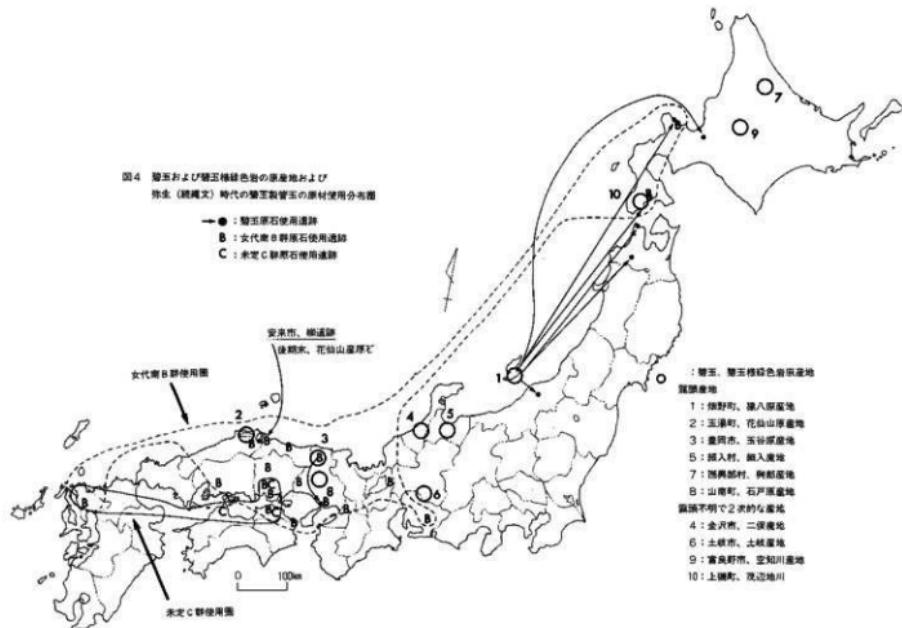


原石の代表的な信号（III）のスペクトルを示す。図3-（4）には宇木汲田遺跡の管玉で作った未定C形と未定D形およびグリーンタフ製管玉によく見られる不明E形を示した。ESR分析では分析した管玉のESR信号の形が、それぞれ似た信号を示す原石の産地の可能性が大きいことを示唆している。今回分析した玉材剥片は11mmより大きくESR分析はできなかった。

### 結論

今回分析を行ったY-1の玉材剥片は11mm以上の大型でESR分析ができなかつたため蛍光X線分析の結果のみで判定を試みた。Y-1の比重は2.407でグリーンタフに近く玉谷産碧玉の2.6より軽く玉谷産碧玉とは言えないが花仙山産原石の質の悪い部分では比重が2.4以下の原石が見られ、Y-1は良質な層とグリーンタフ的な層が重なりこのグリーンタフ様な層が比重を低くしている。分析は良質な部分を選んで分析を行った。玉材剥片は大きくて元素組成が精度よく分析された。蛍光X線分析のみで原石産地を同定する場合、花仙山産原石群と玉谷産原石群の結果が重ならない範囲でのみ花仙山産か玉谷産原石か産地が特定できる。Y-1玉材剥片は花仙山原石群に判定の信頼限界の0.1%以上の確率で同定され、次に玉谷群へ0.001%の低い確率で同定されたことから花仙山産原石と判定したがこれは良質な部分のESR信号を分析すればより確実な結果が得られたと推測できる。弥生時代に花仙山産原石が使用された例は本遺跡が始めてで、広範囲に使用された碧玉は産地未発見の女代南B群で弥生時代を中心に使用された原石である。豊岡市の女代南遺跡の中期の土作り過程の石片、滋賀県の筑摩印、立花遺跡出土の玉材、神戸市の玉津田中遺跡の中期の石片、管玉には玉谷産と共に使用されていた。東海地方では新城市大宮の大ノ木遺跡の弥生時代の管玉に、また中国地方では、作用町の長尾・沖田遺跡の中期末の管玉、総社市の南溝手遺跡出土の弥生中期中葉の管玉片、前期末～中期初頭の玉材、岡山市の百間川原尾島遺跡出土の管玉、岡山県川上村下郷原和田遺跡の管玉、鳥取県羽合町の長瀬高浜遺跡の中期中葉の管玉、米子市の御建山遺跡尾高19号墳第2主体部出土の管玉、東広島市の西本6号遺跡の管玉に使用されている。四国地方では徳島県板野町の蓮華谷古墳群II、2号墳、3世紀末の管玉、香川県善通寺市の彼ノ宗遺跡の木期の管玉に使用され、九州地方では、多久市牟田辻遺跡の中期の管玉に使用されていた。女代南B群の原石は糸魚川産ヒスイに匹敵する広い分布圏を示している。一方、唐津市の宇木汲田遺跡の管玉で作った未定C群は、総社市の南溝手遺跡では弥生中期前葉の管玉片に使用され、坂出市の龍川・五条遺跡の管玉、今治市の持田町3丁目遺跡の前期の管玉、大和町の尼寺一本松遺跡の管玉、多久市牟田辻遺跡の中期の管玉、吉野ヶ里遺跡の南西サブトレ出土の管玉に使用されていたに過ぎない。また、玉谷産原石は地元玉作り遺跡の女代南遺跡から剥片として出土し、神戸市の居住小山、玉津田中、新方遺跡出土管玉に伝播していることが確認されている。猿八座原石が弥生時代に使用されている遺跡は、北海道余市町の大川遺跡および茂別遺跡の統繩文時代では女代南B群原石の管玉と共に使用され、江別市の大麻22遺跡出土の統繩文（後北C1式）の管玉に、七飯町の大中山13遺跡（統繩文）出土の管玉に使用され、佐渡島以北で主に使用されていることが明らかになっている。これら佐渡産碧玉、女代南B群の剥片出土遺跡は、豊岡市、米原町、福井県など日本海側で、これら玉類が日本海の玉材原産地地方で作られ、これら玉類の使用圏からみて、日本海を交易ルートとし遠距離に伝播したと推測され、伝播には遺跡をリレー式に伝わる場合、また、産地から遠距離の遺跡に直接到達する場合などが考えられる。一方、未定C群の管玉は佐賀県内で多く出土し、他の遺跡では、

愛媛県、香川県で使用が確認されていたに過ぎず、また、玉作りの行程を示す石片、剥片が発見された遺跡が確認されていないため、推測は空論になるが、未定C群の管玉が韓国で作られ、西北九州地方および瀬戸内海ルートを通じて愛媛県、香川県地方、岡山県南溝手遺跡へ流入したと推測しても産地分析の結果と矛盾しない(図4)。未定C群と女代B群の管玉が使用された時期は南溝手遺跡では中期前葉に未定C群の玉が使用され、中期中葉に女代B群の管玉が使用されている。しかし、宇本汲田遺跡では同じ墓から未定C群と女代B群の管玉が同時に出土する場合も見られる。これら玉類の伝播には当時の社会情勢が反映されている可能性があり、玉類の産地分析の結果は考古学分野に貴重な資料を提供するであろう。玉類の産地分析の困難さは原石の入手で、産地同定を定量的に行う場合、統計処理の母集団(原石群)を作り、原石群の組成の変動を評価するため多数の原石が必要で、今後、花仙山原石の伝播および花仙山原石を使用した管玉の範囲を明らかにし、また佐渡島猿八産原石が佐渡島以南に本当に伝播していないかを調査し、女代南B群、未定C群、不明の管玉などの原石産地を明らかにし、これら不明の原石群を作ること、また、玉類に使用されている産地の原石が多い方が、その産地地方との文化交流が強いと推測できることから、日本各地の遺跡から出土する貴重な管玉を数多く分析することが重要で、今回行った産地分析は完全な非破壊である。碧玉産地に関する小さな情報であっても御提供頂ければ研究はさらに前進すると思われます。



### 参考文献

- 茅原一也 (1964)、長者が原遺跡産のヒスイ (翡翠) について (概報)。長者ヶ原、新潟県糸魚川市教育委員会: 63-73
- 薦科哲男・東村武信 (1987)、ヒスイの产地分析。富山市考古資料館紀要6:1-18
- 薦科哲男・東村武信 (1983)、石器原材の产地分析。考古学と自然科学, 16: 59-89
- Tetsuo Warashina (1992)、Allocation of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19:357-373
- 東村武信 (1976)、产地推定における統計的手法。考古学と自然科学, 9:77-90

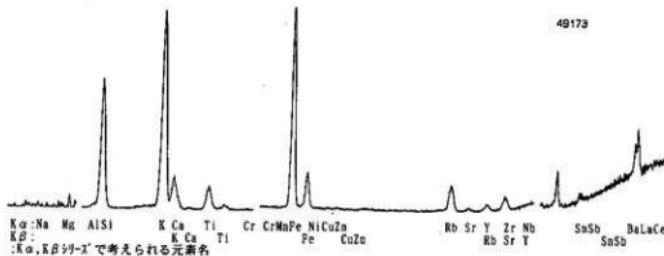


図5 柳遺跡出土玉材朝片、Y—(49173)の螢光X線スペクトル

# 柳遺跡出土椀形鍛治滓の金属学的調査

大澤 正己

## 概要

弥生時代終末期に推定される鍛冶遺構から出土した鉄滓を調査して次のことが明らかになった。出土鉄滓は鉱石系鉄素材の折り返し曲げ鍛接の高温作業で排出された鍛錬鍛治滓に分類される。この鉄滓は鍛冶炉の炉底に堆積形成された椀形鍛治滓であった。

## 1. いきさつ

柳遺跡は島根県安来市荒島町に所在する。立地は平野に面した丘陵斜面に位置して、弥生時代終末期の拠点的集落である。隣接する竹ヶ崎遺跡と合わせて100軒以上の建物跡が検出された。その中の加工段41と呼ばれる斜面の上方をカットして造成した小規模な平坦面が存在し、そのほぼ中央に小形の土壙がある。壁面は弱く焼け、内面には炭、灰が詰まった中に椀形滓は出土した。<sup>1)</sup>また、土壙内の土を持ち帰り、選別したところ粒状滓や鍛造剝片などが発見された。それらは現在調査中で、後日報告を予定している。

## 2. 調査方法

### 2-1 供試材Table

Table 1 に供試材の履歴と調査項目を示す。

Table. 1 供試材の履歴と調査項目

符 号	資 料	出 土 位 置	計 測 値		調 査 項 目		
			大きさ (mm)	重量 (g)	顕微鏡 組成	ピッカース 断面硬度	化学組 成分析
YNG-1	椀形鍛治滓	加工段41焼土内951013	60×45×25	85.5	○	○	○

### 2-2 調査項目

- ①肉眼観察、②顕微鏡組織、③ピッカース断面硬度、④化学組成

## 3. 調査結果

① 肉眼観察：平面が歪な円形の椀形鍛治滓である。表面の側面寄り周縁は小気泡を多発し木炭模などで荒れるが、中央は中空みでこの部分は滑らか肌である。裏面には椀形状突起が大きく、炉底粘土との反応痕をもち、青灰色粘土を少量付着する。なお底部側面の一部に工具痕らしき凹みをもち、滓は炉底から高温のままでかき出された可能性をもつ。

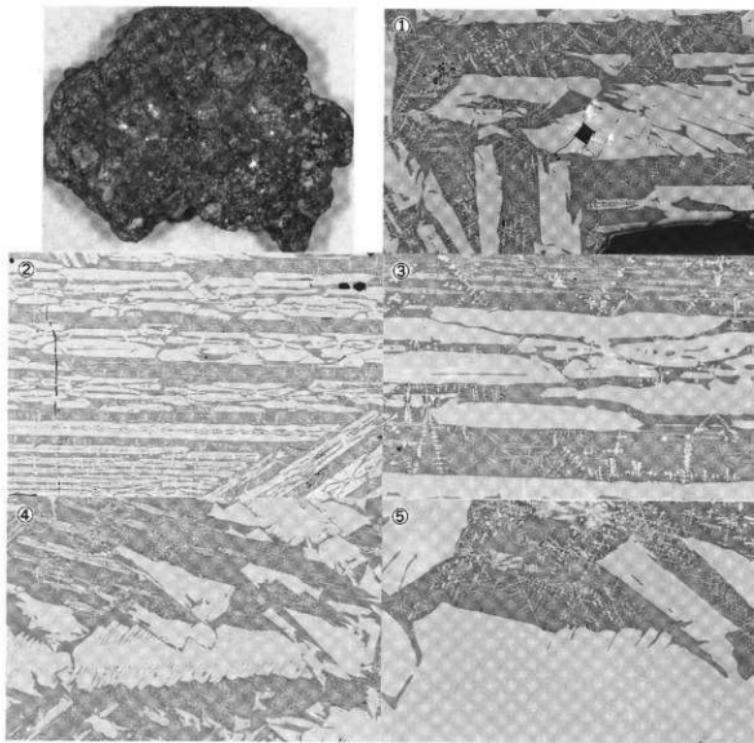
② 顕微鏡組織：Photo 1 の①～⑤に示す。鉱物組成は淡灰色長柱状結晶のファイヤライト (Fayalite : 2 FeO · SiO<sub>2</sub>) と微小白色粒状結晶のウースタイト (Wüstite : FeO) の極く少量が基地の暗黒色ガラス質スラグ中に品出する。赤熱鉄材の酸化防止に塗布された場合にできた鍛錬鍛冶滓に分類される。

③ ピッカース断面硬度：Photo 1 の①に淡灰色木ずれ状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は 711 Hv であった。ファイヤライトの文献硬度値が 600 ～ 700 Hv であり<sup>(2)</sup>、この上限を若干越えるがファイヤライトに同定される。

④ 化学組成分析：Table 2 に示す。全鉄分 (Total Fe) が 39.32%、ガラス質成分 (SiO<sub>2</sub> + Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> + CaO + MgO + K<sub>2</sub>O + Na<sub>2</sub>O) は 46.4% と高く、このうちの塩基性成分 (CaO + MgO) も 3.52% が多い。これは赤熱鉄材の酸化防止に粘土汁が塗布されて、これの影響が現れたと考えられる。二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) 0.06%、バナジウム (V) 0.01% は低値であり、鍛冶に供された鉄素材は鉱石系に想定される。銅 (Cu) も 0.002% と少なかった。

#### 注

- (1) 遺跡概要是調査担当者の丹羽野 栄氏のご教示。
- (2) 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』(1968)



柳邊跡加工段41km土内出土 鋼鐵鉱治済  
 ①×200 硬度圧痕 ファイヤライト: 711HV200g ②, ④×100 ③, ⑤×400 ファイヤライト晶出 外観写真1.0

Table. 2 供試材の化学組成

符号	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	二酸化硅素 (SiO <sub>2</sub> )	酸化アルミニウム (Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K <sub>2</sub> O)	酸化ナトリウム (Na <sub>2</sub> O)
YNG-1	39.32	0.27	46.30	4.38	32.49	8.29	2.51	1.01	1.28	0.32

酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO <sub>2</sub> )	酸化クロム (Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	硫黄 (S)	五酸化磷 (P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> )	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造津成分	造津成分 Total Fe	造津成分 Total Fe
0.19	0.45	0.02	0.04	0.21	0.10	0.01	0.002	46.40	1.180	0.011



# 塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡出土炭・炭化物 の<sup>14</sup>C年代の測定

財団法人 九州環境管理協会

## はじめに

本報告は、島根県教育委員会教育長の委託を受けて、財団法人九州環境管理協会が「一般国道9号（安来道路）建設予定地内遺跡年代測定業務」についてとりまとめたものである。

## 1. 分析資料

分析資料を表1に示す。

表1 <sup>14</sup>C年代測定資料一覧表

No	試料No	遺跡名	採取年月日	採取者	出土遺構	時期
1	No.7	柳遺跡	1995年9月13日	島根県埋文化センター 月羽野裕	東斜面SK02内	弥生後期末から 古墳中期
2	No.8	竹ヶ崎遺跡	1995年8月23日	島根県埋文化センター ト部吉博		弥生後期末
3	No.9	塩津山遺跡	1994年8月4日	島根県埋文化財調査センター 守岡利栄	加工段1	弥生時代後期末
4	No.10		1994年11月15日		S X10 №478	
5	No.11		1994年11月28日		S X13 番外	
6	No.12		1994年11月14日		S K03	
7	No.13	竹ヶ崎遺跡	1995年8月2日	島根県埋文化財調査センター ト部吉博	S I03	弥生時代後期末
8	No.14		1995年12月19日		S I09中央P周辺	
9	No.15		1995年11月17日		加工段15	
10	No.16		1995年12月21日		S I16 床面東側	
11	No.17		1995年12月13日		S I17	
12	No.18		1996年1月12日		S I16柱穴	

## 2. 分析方法

<sup>14</sup>C年代測定は、液体シンチレーション計測法で測定した。

### 3. 測定結果

<sup>14</sup>C 年代測定の結果を表2に示す

表2 <sup>14</sup>C 年代測定結果

No.	試料記号	試料名	遺構等の記号・番号	<sup>14</sup> C 年代/ years BP
1	No.7	炭化米	柳遺跡 SK02内	1490±100 (1530±110)
2	No.8	炭	竹ヶ崎遺跡	1730±80 (1780±90)
3	No.9	炭化部材	塙津山遺跡 加工段1	1680±150 (1760±150)
4	No.10	炭化炭	塙津山遺跡 SX10 No.478	1710±90 (1760±90)
5	No.11	炭化木片	塙津山遺跡 SX13 番外	1960±60 (2020±70)
6	No.12	炭化材	塙津山遺跡 SK03	1640±120 (1690±130)
7	No.13	炭	竹ヶ崎遺跡 SI03	1880±100 (1940±110)
8	No.14	炭	竹ヶ崎遺跡 SI09 中央ピット周辺	1750±80 (1800±80)
9	No.15	炭	加工段15	390±80 (400±80)
10	No.16	炭	竹ヶ崎遺跡 SI16床面東側	1860±80 (1910±80)
11	No.17	炭	竹ヶ崎遺跡 SI17	1830±120 (1880±120)
12	No.18	炭	竹ヶ崎遺跡 SI16柱穴	2020±100 (2080±100)

## 8 まとめ



# 第1章 塩津丘陵遺跡群出土の 弥生時代後期後半の土器編年

## 1. はじめに

塩津丘陵遺跡群を構成する塩津山遺跡、竹ヶ崎遺跡、柳遺跡の発掘調査では、40棟近い竪穴住居跡、60をこえる加工段、30棟以上の掘立柱建物など100を有にこえる弥生時代後期後半から後期末頃にかけての遺構が検出された。またこれらの遺構からは数多くの土器を始めとする遺物が出土した。これらの遺構や遺物は、從来鳥根県内で検出されてきた弥生時代の集落関連遺跡のどこよりも多く、また内容も豊富といえる。こうした遺構、遺物を整理し、評価していく作業を行うためには、まずは土器の編年軸を明らかにすることが不可欠である。そこでまず本章では、塩津丘陵遺跡群の3遺跡で出土した土器を元に、土器の編年を試みる。

ところで、当地での弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器編年は、数多くの研究者によって手がけられてきた<sup>1)</sup>。こうした先学の業績によって積み上げられてきた編年の枠組みは現状において充分に有効と考えるし、ましてや当該期とは専門がかけ離れ、また不勉強の限りである筆者が批判をしようという気はさらさらない。ただ、現状の編年の枠組みにおける時期区分が、そのまま個別の遺跡、つまり塩津丘陵遺跡群の時期的変遷を考える上で有効であるかはまた別問題であろう。ここで試みようとする編年は、塩津丘陵遺跡群の各遺構の時期を決定していく、集落としての変遷を追うこと目的としている。基本は本遺跡群における一括資料や切り合いにおいていることは言うまでもない。よって本編年輪は從来の当地の編年の枠組みをその基本に置きながらも、時期区分の仕方は必ずしも從来の枠組みにはこだわっていない。逆に言えば、この編年はあくまで個別遺跡における変遷觀に過ぎず、出雲東部、ましてや山陰という広い範囲での汎用的編年ではないことをまずお断りしておきたい。

## 2. 塩津1期～5期の設定

塩津丘陵遺跡群の中で調査された3遺跡で出土した土器のうち、遺構に伴って検出され、かつある程度時間的に連続していると考えられる土器を5期に区分することにする。從来の編年觀に合わせると、およそ弥生時代後期中葉から後期末<sup>2)</sup>にかけての比較的短い時間幅の間となろう。

### 塩津1期

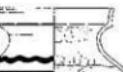
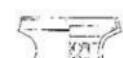
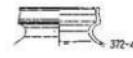
竹ヶ崎遺跡S I 18、S I 21出土土器を標識とする。壺は複合口縁で口縁部は外方にやや開くが、径に比して口縁の立ち上がりが緩めで2期に顕著な口縁外面の外湾は明瞭ではない。口縁外面の擬凹線は間隔が広めの個体がある。他の器種は不明瞭だが、器台は受け部、脚台部とともに高さが低く、筒部が細長い。壺は一括資料がないため、柳遺跡包含層出土のものを入れているが、肩部付近に貝殻腹縁で刺突を入れている。竹ヶ崎遺跡加工段11とS I 24の覆土出土の台付き装飾壺はこの時期に併行するものだろう<sup>3)</sup>。

### 塩津2期

柳遺跡頂上高所平坦面東側の盛土内出土の土器、同加工段29出土遺物を標識とする。壺は複合口縁で、口縁外面が擬凹線を施して外湾している。口縁端部は膨らんでいる。口縁に擬凹線の見られ

	壺	中・大型壺	小型壺
塩津1期			
塩津2期			
塩津3期			
塩津4期			
新相			
塩津5期			

第388図 塩津丘陵遺跡群出土土器 編年表(1) S=1/10

壺	高坏	低脚坏	器台
			 11500
			 219-161
			 225-142
			 292-25
			 231-10
			
			
			
			 258-13
			
			 253-31
			 260-16
			 260-17
			 260-31
			 225-1
			 225-2
			
			 11250

第389図 塩津丘陵遺跡群出土土器 繁年表(2) S = 1/10

ない粗製の土器も含まれる。器台は受け部、脚部外面に擬凹線を施している。筒部は1期に比べて太く短くなると推測されるが、比較的長めの筒部に当期特有の羽状の刺突を施すものがあり、これも2期に含めている。

#### 塩津3期

柳遺跡加工段21、加工段2、加工段30出土の上器を標識とする。当期設定の最も大きなメルクマールは、2期まで一般的であった口縁外面に擬凹線を施す甕と、同様の器形でありながらヨコナデだけの甕の両者が近い割合で共存するところにある。甕の形態は、口縁が全体的によく外反し、端部はどちらかと言えば先細り気味でほとんど膨らむことはない。口縁が中途で折れて大きく広がる個体もよく見られる。口縁部の立ち上がりの長さが比較的長いのもこの期の特徴であろう。口縁の端部のみが外方に折れるくせのある一群（柳遺跡加工段30）がこの期でもやや古相を呈するものと思われる。器台は個体数が少なく不明瞭だが、プロポーションは2期と大差ないものの、擬凹線を施すものは見られなくなるようだ。その他の器種は断片的で、特徴を明記しがたい。というよりはその他の器種の割合が少ないことが、2期を含めて当期の特徴といえるかも知れない。

従来当地の上器編年では、口縁外面の擬凹線の有無が大きな標識とされてきたくらいがある。ところが柳遺跡では、明らかに同一の造構で擬凹線のある個体、ない個体が共存する。さらに口縁の細部の特徴を見ると、擬凹線の有無に関わらず2期よりも新相の特徴を有しているのである。このことは擬凹線の有無が単純に時期区分の指標にはなり得ないことを示している。さらに言えば口縁外面への擬凹線の施文は、いわゆるナデ消しも含めて塩津5期まで残存している。

#### 塩津4期

柳遺跡S I 05、加工段12、加工段13出土の土器を標識とする。口縁外面の擬凹線はほとんど見られなくなるが、複合口縁部の稜の直上付近に1～2条残存する個体がまだかなり見受けられる。口縁の立ち上がりの外反度は弱まり、概して立ち上がりの長さが3期より短めとなって、全体的に薄めになってくる。口縁が中途で折れ曲がる個体も余り見られない。底部はだいぶ小さくなるがまだ平底を残している。器台は3期と比べて筒部の径が大きくなり、長さが短くなってくる。その他の器種の割合が少ないので3期までと同様である。

さて第386図の編年表において、意識的に下方にずらして配置した一群がある。柳遺跡S I 06、S I 08出土の土器を標識とするもので、塩津4期新相としてまとめたい。甕は口縁部の外反度がいつも弱まり、より薄手となっている。口縁端は薄くなって丸くおさめるものが多い。複合口縁部の稜は横に引き出すものが目立ってくる。さらにこの時期の大きな特徴は新たな器種が出現していくことである。口縁が内傾する壺と、口縁がほぼ直立する壺である。ともに比較的薄手で、頭部下方には細い櫛状工具で波状文と平行沈線を施している。口縁内傾壺は、複合口縁部の稜が横方向によく伸び、内面の稜線も明瞭で口縁端部は丸くおさめており、後出する同様の壺よりは古相を呈す。また壺部の底に円盤を充填する高壺も少量ながら見られるが、壺部底の下面を丁寧になでており、次の時期から一般的となる下面中心の小孔は見られない。鼓形器台は大きな差はないが、若干筒部が短くなるようだ。かえって5期との差が不分明の感があるが、両者を分けた理由は次に詳述したい。4期から5期へ大きく土器が変換していく過渡的な時期と認識している。

#### 塩津5期

塩津山遺跡加工段1、竹ヶ崎遺跡加工段04～06、S I 05・06、S I 17、S I 24、柳遺跡階段状造構、

S I 03出土の土器などを標識とする。いわゆる薄甕の出現期である。甕の口縁は外反するものがほとんどの見られなくなり、多くがほぼまっすぐ立ち上がる。複合口縁部の稜は薄く横に引き出されるものが多い。口縁端部にはなんらかの調整が施されるようになり、上端に面を持つものも現れ、それは大形の甕により顕著である。それに対応してか、底部内面には指頭圧痕が見られ、底部は痕跡的な平底となる。

さらに4期以前との違いは、土器の組成に顕著に現れる。第390図は、各時期の代表的な遺構出土の土器の組成をグラフ化したものである<sup>16)</sup>。これを見れば一目瞭然であるが、塙津4期以前は甕が圧倒的に大きな割合を占めているのが、5期になると他器種の割合が一気に高まる。特に高环、器台、低脚环類の増加は目を見張るほどである。前項で保留した4期新相と5期との違いは、4期新相においては、新たな器種が登場しているものの器種間比率はまだ前段階とあまり変化がないことが、最も重要な要素である。また極めて印象的な問題であるが、5期になると土器が全体的に白っぽくなる。それに比べて4期新相の土器は概して橙色がかった色合いのものが多い。4期新相ではまだ甕の口縁端部への調整も顕著ではない。

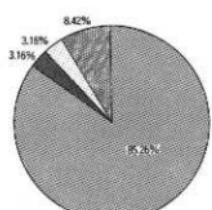
個別の特徴の説明に戻りたい。甕は口縁が内傾する個体と、外方に立ち上がる個体の2種が見られる。内傾する口縁の甕は、複合口縁部の稜の鋸さがややにふくなり、端部を外方に折り返すものが現れる。外方に立ち上がる甕は、端部に面を持つものが多くなる。

高环は環部の底に円盤を充填し、その下面の中心に小孔が見られるものが一般的となる。低脚环は浅いボルト状を呈すものが増え、口径が広く浅い蓋状の個体や、台付き鉢状の深い個体が現れる。器台は概して高さが低くなり、筒部径が大きくなる傾向だが、4期から大きな変化は見られない。またコシキ形土器が増加している印象を持つ。4期以前にもコシキ形土器は一定程度含まれるが、径を復元して図示できるのは5期に限られている。コシキ形土器の型式変化を時期を追ってたどることは出来ないが、5期において口縁部下方にタガ状の突帯が付くものと付かないものが併存している（第391図）。

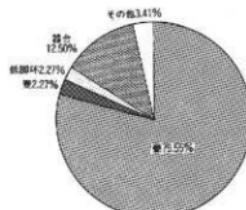
外来系の土器群が出土し始めるのもこの時期である。大部分が畿内系と考えられるものであるが、畿内中枢部そのものの土器ではないようだ<sup>17)</sup>。当地で模倣されたものか、あるいは畿内の外縁地域で

表1 竹ヶ崎遺跡・柳遺跡 遺構出土土器破片数量一覧表

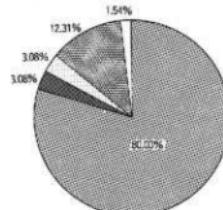
遺構名	甕	壺	低脚环	器台	高环	コシキ	鉢	脚付壺	その他	時期
柳S I 05	127	2	9	16			1	1	注口1	4
柳S I 06	45	10	11	13	10	3	1	1		4新
柳S I 08	152	4	12	10	3	2		1		4新
柳25加工段	70	2	2	11	3					3
柳29～30加工段	81	3		8						2～3
柳37加工段	52	2		8			1			3
柳22加工段	49	2	6	9	1?		1	1?	注口2	2～4
竹ヶ崎S I 17	26	17	14	27	13	1			注口1	5
竹ヶ崎S I 22	14	7	9	5	12					5
竹ヶ崎S I 24	30	21	12	32	14	1	1		注口1	5
竹ヶ崎段04～06	807	203	112	358	240	1	12		注口1	5
竹ヶ崎段09～17	65	51	24	65	26	1			注口2	5



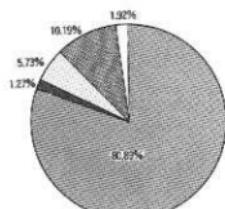
柳加工段29.30（塩津2～3期）



柳加工段25（塩津3期）



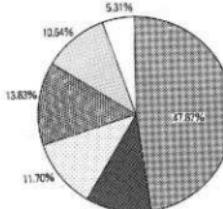
柳加工段37（塩津3期）



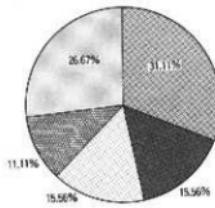
柳S 105（塩津4期）



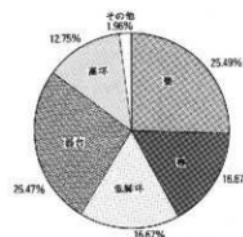
柳S 108（塩津4新）



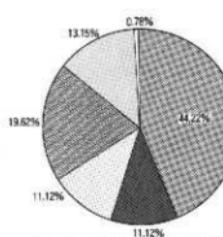
柳S 106（塩津4新）



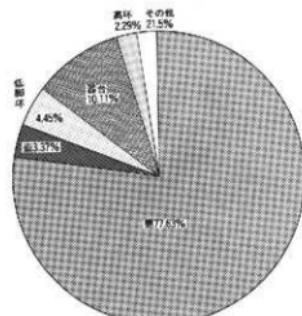
竹ヶ崎S 22（塩津5期）



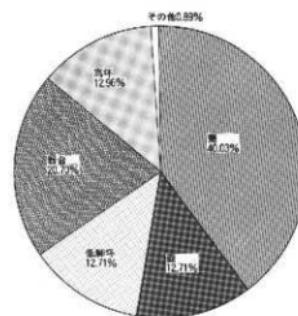
竹ヶ崎S 1（塩津5期）



竹ヶ崎加工段04～06（塩津5期）



塩津2～4期累計



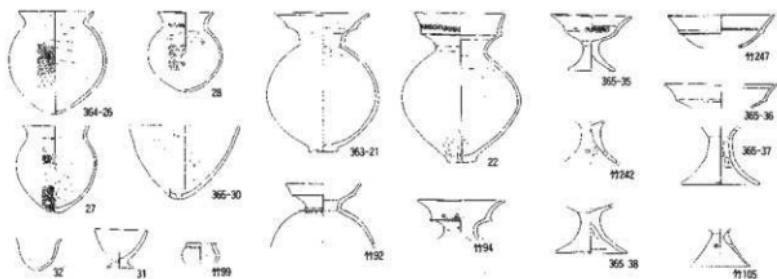
塩津5期累計

第390図 塩津丘陵遺跡群 時期別、遺構別出土土器の組成グラフ

製作されたものと考えられるが、前者の可能性が高い。蓋、張、鉢、高環、器台とひととおりの器種が揃っている。ただ、出土状況を見ると、外來系の上器がまとまって出土しているのは柳道跡階段状造構と竹ヶ崎道跡加工段04~06だけで、他の住居跡などではほとんどが覆土内からの断片的出土に限られている。外來系土器が多い2つの造構については後述するが、前者の土器は道の廃絶時の祭祀に伴う可能性があり、後者は土器の集中廃棄もしくはなんらかの祭祀に伴う遺物と考えられる。いずれにしても特殊な使われ方に限られており、どちらかと言えば集落の廃絶期に近い時期、つまり5期でもより新しい時期に入ってくるのではないだろうか。

### 3. 併行関係

前にも記したように、この塩津編年案は塩津丘陵道跡群の3道跡で検出された造構の変遷を明らかにするための前提操作として行ったものである。よって従来の編年とのすり合わせ作業は行っていないし、また無理に区切りを合わせようとなれば、必ずしも造構の動きとの整合性がとれなくなる恐れもある。特に塩津3期以降は、各編年との区分設定の数が異なったり、また従来の編年でも資料の制約などによって区分の根拠が曖昧な点があつたりして<sup>10</sup>、併行関係の呈示は困難な面がある。しかしながら、本道跡群を評価していくにあたっては、従来の編年的枠組みの中にある程度は



組み込んでいかないと、一般化できないのはいうまでもない。そこで、塩津編年の中期区分を全て従来の編年軸に対応させるのは困難であるので、編年区分の最初と最後の時期を中心にして筆者が考えるおよその対応関係を示しておきたい。

塩津1期については、全体的に資料が少ないうに幸いして、およその対応を示しうる。基本的に塩津1期は筒部の細長い器台の形態などから九重式<sup>⑨</sup>、草田2期<sup>⑩</sup>には対応すると考えられる。塩津2期は、口縁外面に擬回線が施されて外湾する特徴から、的場式、草田3期<sup>⑪</sup>には対応すると考えているものの、従来の編年観では塩津3期資料の一部も的場式、草田3期に入りうるものかも知れない。

一方最後の塩津5期についてであるが、薄壁の出現や複合口縁部の稜の突出、壺、高壺の一般化などの特徴から草田5期<sup>⑫</sup>におおよそは対応すると考えている。ただ塩津5期と草田5期が完全に一致するかと言えば、言葉を濁さざるを得ないところがある。同一編年であっても研究者による編年区分の境界線の認識の違いも存する感もあるし、何よりも筆者の力不足のために特に草田5期と6期の境界線の認識に自信が持てないところがある。具体的にいうと、塩津5期の資料中には草田6期に下らせて考えても差し支えないような資料も入っているように見える。例えば編年表では、竹73の甕の肩部や竹117の器台のプロポーション、柳372-5のスタンプ施設壺などはより新しい特徴と考えてもいいのかも知れない。また口縁が外傾する壺や大振りの低脚壺などの特徴は、草田編年では6期とされている。

しかしながら翻って塩津5期の資料を大局的に見たときに、口縁が全体的に薄手で立ち上がりの長さがまだ短くないなどの大きな特徴を見て取ることが出来る。これらの特徴は基本的に草田5期の特徴と認識しており、結論的には塩津5期は草田5期を大きく逸脱することはないと考えたい。

以上のようなことから残された塩津3期、4期は、草田4期を結果的に細分する形になる。ただ前述したように、塩津3期の資料の一部は草田3期に上るものも含まれると思われ、塩津4期新段階の遺物はあるいは草田5期に下げる意見も出るかも知れない。いずれにしても細かな編年同士の併行関係の比定は本旨ではないため保留させていただきたい。

さて5期の遺物とともに出土した畿内系土器の編年観であるが、畿内の土器そのものでないだけに限定が難しいところである。ただおよそ纏向III式新段階<sup>⑬</sup>の特徴を持つものが含まれているとの教示を得ている<sup>⑭</sup>。塩津5期の最新期あたりが畿内纏向III式新段階に併行する可能性があることを示しておく。



竹ヶ崎遺跡・柳遺跡出土のコシキ形土器

## 第2章 塩津山遺跡、竹ヶ崎遺跡、柳遺跡 検出の弥生時代後期の遺構について

### 1. 積穴住居跡

塩津山遺跡、竹ヶ崎遺跡、柳遺跡では、弥生時代後期後半～後期末の積穴住居跡が40棟検出された。内訳は表2にまとめたとおりで、塩津山遺跡で6、竹ヶ崎遺跡で24、柳遺跡で10棟検出されている。ここでは、これらの積穴住居跡について大雑把ながら特徴をまとめてみたい。

時期的な変遷については後項で述べるが、塩津5期のものが圧倒的に多いという特徴がある。特に積穴住居跡の密度の高い塩津山遺跡から竹ヶ崎遺跡かけて検出された住居跡は、大部分が塩津5期併行期である。

積穴住居跡の平面形を見ると、隅丸方形と隅丸多角形の双方が見られ、方形を呈すのは竹ヶ崎遺跡S101のみである。隅丸方形と隅丸多角形ともに、各時期に存在しており時期的な差異を表すものではないことは確かである。この2種の平面形の差異は、住居跡の規模に対応していることは都出北呂志氏が指摘<sup>(10)</sup>するとおりで、当地では青木遺跡の報告<sup>(11)</sup>においてもデータとして提示されていたことである。本遺跡群では、隅丸方形と隅丸多角形を区分する規模の境界線は、5.5m前後にあると考えられる。

### 2. 加工段

斜面の上方側を掘り込んで平坦面を作り出した遺構を加工段と呼んでいる。おそらく斜面の下方側には削って生じた土砂を盛って平坦面を伸ばしていたのであろうが、大部分は流出してしまっている。塩津山遺跡、竹ヶ崎遺跡、柳遺跡では70をこえる弥生時代後期後半～後期末の加工段が検出された。この数も細かな重なりはカウントしていないため、実数はさらに増えるであろう。特に柳遺跡の東斜面では、急峻な斜面にも関わらず50をこえる弥生時代後期の加工段が検出された。本項では柳遺跡を中心にこの加工段についての分析を行ってみたい。

まず削り出された平坦面における柱穴の有無やあり方で加工段の分類を行ってみたい。

I類・・・整った柱穴の配列が認められ、掘立柱建物が建っていたと推測されるもの。加工段6、加工段7、加工段22、加工段25、加工段37などが対応する。さらに細分すると、1間×2間もしくは1間×1間の建物が建つものと梁間2間以上の建物が建つもの(加工段25)に分けることが出来る。

II類・・・柱穴など建物の存在を類推させる遺構が見られるものの、整然とした並びが認められないもの。加工段11のように杭と推測される小穴が並ぶものも含める。加工段14、加工段21、加工段23、加工段28、加工段29、加工段30、加工段32、加工段34、加工段39などで、このタイプが最も多い。

III類・・・柱穴等がほとんど認められないもの。加工段2、加工段4、加工段5、加工段9、加工段13、加工段40、加工段41、加工段42などが対応する。加工段41は鍛冶を行っていたと考えられる。

それでは加工段の性格を類推するために、各類型ごとに特徴が現れていないかを検討してみたい。

表2 塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡検出の堅穴住居跡一覧表

遺構名	長さ(m)	幅(m)	形態	出土遺物	時期	備考
塩津山S I 0 1	5.0	5.0	隅丸方形		塩津5期	
塩津山S I 0 2	4.2		隅丸方形		塩津5期	
塩津山S I 0 3	6.0?		隅丸多角形		塩津5期	S I 02より新しい
塩津山S I 0 4					塩津2~3	
塩津山S I 0 5	4.8		隅丸方形		塩津5期	
塩津山S I 0 6					塩津5期?	
竹ヶ崎S I 0 1	6.0		方形	土鍬、鉄斧?	塩津5期	
竹ヶ崎S I 0 2	7.0		隅丸多角形	鉄器	塩津1期	
竹ヶ崎S I 0 3	5.0+		隅丸多角形?	鉄斧、砥石、鉄片	塩津5期	
竹ヶ崎S I 0 4	6.5		隅丸方形	鉄鏃、刀子?、砥石	塩津5期	
竹ヶ崎S I 0 5	4.0+		隅丸多角形	鉈?	塩津5期	
竹ヶ崎S I 0 6	4.0		隅丸方形	叩石	塩津5期	S I 05より新しい
竹ヶ崎S I 0 7	4.5	4.5	隅丸方形	土玉	塩津5期	
竹ヶ崎S I 0 8					塩津5期?	
竹ヶ崎S I 0 9	5.0		隅丸方形	鉄片	塩津5期	
竹ヶ崎S I 1 0	5.0+					
竹ヶ崎S I 1 1	3.0+			碧玉	塩津4期	
竹ヶ崎S I 1 2	5.0	5.0	隅丸方形	砥石、叩石、鉈	塩津5期	S I 13より新しい
竹ヶ崎S I 1 3	4.0	3.8	不整円形	緑色凝灰岩片	塩津5期	2本柱
竹ヶ崎S I 1 4	4.8		隅丸方形	鉈、鉄斧	塩津5期	S I 15寄り新しい
竹ヶ崎S I 1 5	7.0		隅丸六角形	砥石、鉄鏃、碧玉	塩津5期	
竹ヶ崎S I 1 6						S I 15、16より古
竹ヶ崎S I 1 7	6.5		隅丸六角形	砥石、鉄器、叩石	塩津5期	
竹ヶ崎S I 1 8	7.0		隅丸多角形	石鍬	塩津1期	
竹ヶ崎S I 1 9	6.0		隅丸方形		塩津5期	
竹ヶ崎S I 2 0	3.0+		隅丸方形?			
竹ヶ崎S I 2 1	4.5		隅丸方形		塩津1期	
竹ヶ崎S I 2 2	4.5		隅丸方形		塩津5期	S I 23より古
竹ヶ崎S I 2 3	3.5		隅丸方形		塩津5期	
竹ヶ崎S I 2 4	6.0		隅丸方形		塩津5期	
竹ヶ崎S I 2 5	5.0		隅丸方形		塩津5期	
柳S I 0 1	5.4		隅丸方形	大型コシキ、鉄器	塩津5期	
柳S I 0 2	3.8		隅丸方形		塩津5期	
柳S I 0 3	3.0		不整隅丸方形	砥石	塩津5期	
柳S I 0 4	6.4	6.0	隅丸五角形	叩石	塩津5期	
柳S I 0 5	5.85		不整隅丸五角形	鉄鏃	塩津4期	
柳S I 0 6	5.25		隅丸方形		塩津4新	
柳S I 0 7	6.0		隅丸多角形		塩津3~4	
柳S I 0 8新	5.1	4.9	隅丸方形	玉状石、碧玉	塩津4新	
柳S I 0 8古	6.5		隅丸多角形		塩津4新	
柳S I 0 9						S I 08より古い
柳S I 1 0			隅丸方形		塩津5期	
柳S I 1 1	4.15		方形		古墳中期	
柳S I 1 2			方形		古墳中期	

表3 塩津丘陵遺跡群検出加工段一覧表（時期は塩津縄年）

造構名	長さ	出土遺物	時期	類型	造構名	長さ	出土遺物	時期	類型
塩津山段1	37.2	鉄鏃2	5	III	柳段21下	4.3		3	II
段2	14.8	叩石2	5	II	柳段21中	5.7		3	II
段3	3.0以上		5	III	柳段21上	6.8		3	II
竹ヶ崎段01					柳段22	14.0	鎌？	2~4	I、II
竹ヶ崎段02			5?	II	柳段23	11.0	砥石2、鉄斧	4	II
竹ヶ崎段03	3.5以上		5	II	柳段24	4.3以上		2~3	III?
竹ヶ崎段04	11.0以上	鉄鏃・鍬・鎌	5	II	柳段25	11.5	擦切刃、鉄	3	I
竹ヶ崎段05	6.0		5	I	柳段26	5.5以上	砥石	2~4	III?
竹ヶ崎段06	14.5		5		柳段27	5.0以上			III?
竹ヶ崎段07	10	鉄器、水晶、針？			柳段28	5.0前後	石斧	1~2	II
竹ヶ崎段08	6.0以上		5		柳段29	11.5		2	II
竹ヶ崎段09	15.0		5	III	柳段30	6.5		3	II
竹ヶ崎段10	7.0以上		5	III	柳段31	9.7		3	III
竹ヶ崎段11	10以上		5		柳段32	7.8以上	碧玉	2~3	II
竹ヶ崎段12	4.0以上		5	II	柳段32-2	4.2以上		2~3	II
竹ヶ崎段13	4.5以上		5	II	柳段33	2.7以上			古墳
竹ヶ崎段14	11.0以上		5	III	柳段33-2	3.5以上			
竹ヶ崎段15	7.0以上		5	II	柳段34	6.6以上	銛	1~2	II
竹ヶ崎段16	18.0以上		5	III	柳段35-1	4.8以上	叩石	5	II
竹ヶ崎段17	11.0以上		5	III	柳段35-2				古墳
竹ヶ崎段18	5.0以上		5	III?	柳段36	4.2以上	叩石、砥石	3	II
竹ヶ崎段19	6.5以上	鉄器	5		柳段36-2	2.2		3	II
竹ヶ崎段20	5.0以上		5	II	柳段37	6.4		3	I
竹ヶ崎段21	3.0以上		5	II	柳段38古	4.0		5	II
竹ヶ崎段22	5.0以上		5	III	柳段38新	6.3	銛	5	III
柳段1	3.9以上		5	II	柳段39	10.1			II
柳段2	5.7以上	鉄器	5	III	柳段40	3.5	砥石		III
柳段3	4.0以上		5	III	柳段41	4.8	鍛冶関連		III
柳段4	5.3以上		5	III?	柳段42	7.3以上	玉状石	2~3	III
柳段5	3.5前後		5		柳段43	4.2			古墳
柳段6	4.0強		5	II	柳段44				古墳
柳段7	10.3				柳段45	7.5		5	III
柳段8	8.0前後	鉄片	古墳		柳段46				III
柳段9	8.0以上				柳段47	4.1		5	III
柳段10	8.0		3	III	柳段48				古墳
柳段11	5.3				柳段49	4.5以上		5	III
柳段12	8.7		5	III	柳段50				古墳
柳段13	7.5	砥石		III?	柳段51		石斧	2~3	III
柳段14	5.5		2~3	1	柳段52	3.5以上	めのう		古墳
柳段15	5.7		3	I	柳段53	6.0		5	III
柳段16	3.9		4	I	柳段54	5.3以上			古墳
柳段17	5.0		2~3		柳段55	9.8以上	板状石	4	II
柳段18	2.4以上		4	III?	柳段56				
柳段19			4	III?	柳段57				
柳段20					柳段58	10.0以上		4~5	

**立地** 第390図は各類型の、柳遺跡の中での分布を表したものである。類型判断の不確実な加工段は除いているので厳密な議論は出来ないが、大雑把な傾向は見て取れる。まずⅠ類は東斜面の上方にしか存在しない。特に斜面が急峻で建物が建てにくいと思われる南半部の標高の高い位置に集中しているのが注目される。また梁間の長い建物が推測される加工段25は、後に竪穴住居が集中する箇所に近い比較的地形が緩やかな部分に立地する。

Ⅱ類はほぼまんべんなく分布している。ただよく見ると急峻な地形部分には作られず、比較的緩やかな部分を選んでいるのがわかる。特に北半部の中腹あたりが密な部分である。Ⅲ類は斜面の上方と下部の急傾斜部分に分かれて存する傾向がある。

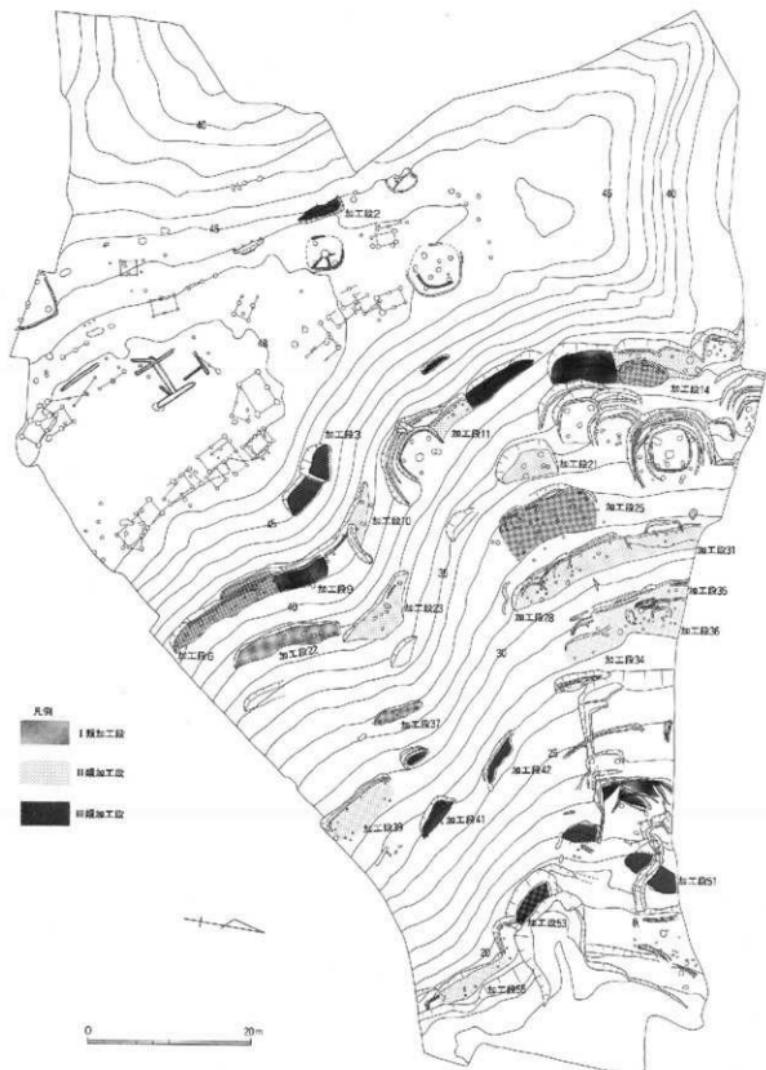
**形態・規模** 形態や規模については切り合いや流出によって全形をうかがうことのできない加工段も多いが、傾向はつかめるだろう。形態は背後の掘り込みの壁の形から推測するしかないが、基本的に壁が直線的に掘り込まれているものが多い。大部分は長方形に加工されたものと推測できる。規模は3.5m程度の小型の加工段から、塙津山遺跡加工段1のように全長37mにおよぶ長大なものまである。規模の大小を加工段の類型にあてはめても、そう都合よく対応関係は現れてはこない。それは、最小の加工段も最大の加工段とともにⅢ類であることに端的に現れている。

それでは各類型間の差異は規模とは無関係かというと、必ずしもそうとは言い切れない。規模の格差の最も大きいⅢ類は、小型の加工段が多い傾向は間違いなくうかがえる。逆に言えば、Ⅲ類は小規模なものと大規模なもの全く異なる2種の性格を内包しているのかも知れない。また概して大型のものはⅡ類に多いという傾向もうかがえる。

**出土品** 土器以外に遺構の機能を類推させるような石製品や鉄製品が出土している加工段が柳遺跡で17認められる。これだけの加工段を検出した遺跡の類例が少ないため、この17という数の評価は難しいが、柳遺跡の竪穴住居では石製品、鉄製品が出土したのが10棟中3棟（1つは鉄錐）であることを思えば多い数字と評価できるのではないだろうか。さてこれらの遺物は、工具（例えば鉄斧、ヤリガンナ、石斧軒用石製品、叩石、砥石など）や未製品（擦切石製品、研磨石製品など）、製品製造過程で生じる残片（鍛造剝片、鉄滓、鉄片、碧玉片など）など、なんらかの作業に伴うと考えられるものが多い。

こうした作業に関わる遺物を出土した加工段を類型別に見てみると、Ⅰ類2例、Ⅱ類7例、Ⅲ類6例となる。必ずしも類型によって出土の有無が分かれるわけではない。これらの中で注目されるのは、平坦面のほぼ中央に炉状のピットが検出され、その覆土から炉壁や鍛造剝片などが検出された加工段41である。加工段の性格をはっきりと示す例である。

**加工段の性格の類推** 以上のような状況から、加工段の性格について根拠薄弱ながら類推を試みてみたい。Ⅰ類は斜面の上半に限られるという立地上の特徴がある。特に南半の高い位置で検出された一群（加工段6、7、8、22、可能性として加工段10）は、掘立柱建物を建てるには不向きな急斜面である。悪条件でありながら敢えてこの場所に選地した理由は、これらの加工段の直上頂上平坦面で検出された後述する掘立柱建物群と無関係には考えられない。頂上平坦面の掘立柱建物群はある程度の方向性を持って林立したと考えられ、特に東斜面縁辺にその傾向が著しい。それらの直下に位置する加工段に建つ同様の建物は、建物の方向性も近いことも合わせて、頂上の建物群に付随するものと考えるのが合理的だろう。掘立柱建物群については後述するが、結論を先取りすればⅠ類加工段の一部は高床倉庫を建てるために作り出された遺構と考える。



第392図 柳遺跡検出加工段の類型別分布図 S = 1 / 600

同じ I 類でも加工段25は様相が異なる。柳遺跡東斜面部では最も安定した緩やかな斜面部にあって、梁間 2 間以上のやや大型の建物が建っていた可能性がある。おそらくは高床の建物ではなく、土間床の建物が想定されるが、柱間などが不整で、大型の居住用建物などには比定しにくいかもしれない。取えてその性格に踏み込めば、溝を切って擦り切りを行ったと考えられる板上の石材（なんらかの製品の加工途上品か）や工具の基部かと思われる鉄器が出土している（第309図）ことから、共同の作業場的性格を考えてみたい。

加工段 II 類は、掘立柱建物のように構造的にしっかりとしたものではないものの、なんらかの建物が存在したと推測できる加工段である。大きな重量を支える必要のない建物と考えられることから、例えば土間の物置・納屋の類、簡便な作業場といった機能が類推されよう。さらに加工段の中には、前者の物置・納屋の類の可能性を否定できるものがある。床面に焼上が認められるもので、加工段 21、28、29、31 などがそれにあたる。I 類の加工段 22 にも焼土が認められるが、これは掘立柱建物が存在した時期とそうではない建物が存在した時期の双方あると推定される。事実出土する土器の時期にはかなりの幅が認められる。これらは作業場としての機能を考えた方が自然であろう。そのほかの焼上等が認められない加工段についても、前述したようになんらかの作業を思わせる遺物が出土した加工段も日立つ。よって II 類加工段は作業場としての機能を持つもののがかなりあると推測できるのではないだろうか。

さて III 類加工段であるが、単純に考えれば露天状態の物置、広場や通路といった機能が想起するところである。長大な範囲に何等造構がない塩津川遺跡加工段 1 のような場合は、そうした性格付けも首肯できるが、そうとは思えない造構もある。柳遺跡加工段 41 は、中央の丸い形状のビット以外は柱穴など全く見られないが、鍛冶工房であったことは疑い得ない。常識的に考えれば、なんらかの上屋があった可能性も高いであろう。

確かに広い平坦面では何等造構としての痕跡が残らない方法で大井を架構することは困難であろうが、狭い範囲でかつ急な斜面であれば不可能ではない。例えば斜面の上方側に垂木の一端を固定し、斜面の下方側に柱を數本建てた上に梁を渡して垂木のもう一端を固定すれば、簡便な屋根がかけは可能と思われる。この場合は柱穴等の造構は流出してほとんど検出されないのであろう。また狭い範囲だけに、なるべく柱を少なくしようとするのも当然のことだろう。

そう考えると、柳遺跡東斜面下部の急斜面にまとまって見られる小規模な III 類加工段は、急勾配を逆に利用した簡便な建物が建っていたものもあると考えられよう。その機能までは推測する材料がほとんどないが、鍛冶という専門的職業の工房が認められる事実は大きい。これら的小規模な加工段からは上器の出土量が少なく、生活痕がありないのも工房的性格をうかがわせる消極的証拠である。それらの位置が目立たない場所のように見えて、集落の入り口と目される北に開く谷側から見ると正面にあたることも示唆的である。

以上のように、加工段の一つ一つの性格を突き詰めて限定していくのは難しいものの、ある程度の可能性のある仮説を提示することはできる。まとめると次のようになろう。

- ① I 類加工段のうち、柳東斜面上方で検出された 1 間 × 2 間、1 間 × 1 間の建物を作うものは、高床倉庫が建っていた可能性が高い。
- ② 梁行 2 間以上の建物が建つと推測される加工段 25 は、比較的大きな規模の建物が建っていたと考えられ、共同作業場等の可能性がある。

- ③ II類加工段の中には、作業場として使われたものがかなりあると考えられる。
- ④ III類加工段のうち、急斜面に作られた小規模なものは簡便な上層の存在が予想され、専門的職掌の工房も含まれる。
- ⑤ III類加工段のうち、塩津山遺跡加工段1のような長大なものは、広場や通路など、施設を設けない平坦面の可能性がある。

本項の最後に指摘しておかなければならぬのは、柳遺跡における加工段の割合の高さである。弥生時代後期後半と推定される加工段が50以上、豊穴住居跡は10棟でその割合は5:1である。時期によっては豊穴住居跡が検出されていない時期もある。集落域の全域を掘ったわけではないので、不確定な要素はあるが、常識的に考えれば居住用の建物の5倍もの他の施設の存在は異常といえるのではないだろうか。その意味については後章でまた触れたい。

### 3. 挖立柱建物跡・布堀建物跡

柳遺跡の頂上平坦面とその東側直下平坦面からは、掘立柱建物跡と布堀建物跡と考えられる造構が集中して検出された。調査区内ではそれ以外に竹ヶ崎遺跡加工段04~06に掘立柱建物の可能性がある1例の柱列と布堀建物の一辺の可能性のある溝(S D07)しか認められない。広い遺跡群の中で掘立柱建物類が一極集中して建てられている状況である。遺跡群中の最高所というその立地と合わせて弥生時代の集落としては異例のあり方といえよう。本項では、これらの建物群を時期ごとに整理する作業を行ったうえ、その性格について考えてみたい。

**掘立柱建物群の概要** まず柳遺跡頂上平坦面とその周辺の掘立柱建物群を概観してみたい。掘立柱建物群はその配置から大きく3群に分けることができる。ひとつは頂上部の最高所の広い平坦面で検出された建物群で、一見したところでも規則的な配列を見て取ることができる。二つ目はその高所平坦面の東側直下に形成された加工段に設けられた建物群。三つ目は高所平坦面の北側の一段低い平坦面に集中する建物群である。

高所平坦面からは掘立柱建物跡と布堀建物跡以外は何等造構は検出されず、その北側の低平部では3棟の豊穴住居跡が検出されたものの全てが最新期の塩津5期の造構である。また頂上平坦面の北端から約15m南に並ぶ柱列(頂上北端柱列)から外側には全く造構は検出されず、なんらかの区画が行われていた可能性が強い。つまりこれらの建物群は、塩津丘陵遺跡群中で最高所の最も目立つところに、なんらかの区画を設けたうえで、集中的にかつ規則正しく配列していたと考えられるのである。

ところで事が後先になるが、これらの建物群の時期についての検証は別途行わねばならない。詳細は本文中に記したが、もう一度これらの建物群が弥生時代後期後半~後期末のものと判断した根拠を提示しておく。通常の掘立柱建物と同様に遺物が直接出土した柱穴は少ない。よって、状況証拠を重ねて時期を推測することになる。

- ① わざかながら出土している柱穴内出土遺物を見ると、小片が多いが弥生後期の土器と限定できるものはあるとも、そうでないと判断できるものはないこと。
- ② 高所平坦面の東縁は盛土によって平坦部を広げられ、その上面にも柱穴が検出されているが、この盛土中から出土する土器は塩津2期と判断できること。
- ③ 高所平坦面の東側の斜面から出土した土器(頂上から流出したと考えられる土器)や建物跡の周辺から出土する土器が全て塩津2期~5期の範囲内におさまるものであったこと。

表4 柳遺跡 振立柱建物跡、布壙建物跡一覧表

造構名	長辺(m)	短辺(m)	面積(m <sup>2</sup> )	方 向	桁×梁	時 期	備 考
SB 0 1	5.7	4.7	26.79	N42° W	布壙	塙津3~4	
SB 0 2	5.5	4.7	25.85	N48° E	布壙		SB01より新
SB 0 3	4.3	2.35	10.11	N71° W	2間×1間		
SB 0 4	3.6	2.25	8.1	N46° W	2間×1間		
SB 0 5	3.1	1.9	5.89	N26° W	2間×1間	塙津2~4	
SB 0 6	2.0	1.7	3.4	N16° W	1間×1間	塙津3~4	
SB 0 7	3.1	1.9	5.89	N79° E	2間×1間		
SB 0 7'	(3.1)	1.9	(5.89)	N36° E	2間×1間	塙津4?	長辺柱穴揃わず
SB 0 8	3.2	2.05	6.56	N84° W	2間×1間		
SB 0 9	4.2	2.15	9.03	N44° W	2間×1間		
SB 1 0	2.45	2.3	5.63	N44° W	1間×1間		
SB 1 1	3.4	2.0	6.8	N48° W	2間×1間		
SB 1 2	4.5	2.5	11.25	N62° W	2間×1間		
SB 1 2'	(2.8)	(2.5)	7.0	N77° E	1間×1間		桁行不明瞭
SB 1 3	4.2	2.35	9.87	N48° W	2間×1間		
SB 1 3'	4.5	2.0	9.0	N42° E	2間×1間		
SB 1 4	1.85	1.65	3.05	N55° W	1間×1間		
SB 1 5	2.8	1.95	5.46	N42° W	2間×1間		
SB 1 6	2.8	1.95	5.46	N42° E	2間×1間		
SB 1 6'	(2.0)	2.0	(4.0)	N55° W	1間×1間	塙津5	桁行不明瞭
SB 1 7	3.6	2.05	7.38	N83° W	2間×1間		
SB 1 8	4.5	2.8	12.6	N48° E	2間×1間		
SB 1 9	3.8	1.85	7.03	N52° W	2間×1間		
SB 2 0	2.9	1.75	5.07	N52° W	2間×1間		
SB 2 1	3.3	1.75	5.77	N38° W	2間×1間	後期木	
SB 2 2	2.6	1.9	4.94	N54° E	2間×1間		
SB 2 3	3.2	1.95	6.24	N32° W	2間×1間	後期木	
SB 2 4	2.25	1.45	3.26	N24° W	1間×1間		
SB 2 5	2.8	1.5	4.2	N60° W	2間×1間	塙津3	
SB 2 6	4.8	2.5	12.0	N41° W	2間×1間	塙津3	
SB 2 7	2.8	1.15	3.22	N45° W	2間×1間		
SB 2 8	1.65	1.4	2.31	N23° W	1間×1間	塙津4	
SB 2 9	3.0	1.25	(3.75)	N4° W	2間×1問?	古墳時代	規模不明瞭
SB 3 0	5.7	3.5	19.95	N37° W	2間×2問?	塙津3	不明瞭
SB 3 1	6.8	3.8	25.84	N39° W	3間×2問?	塙津3	不明瞭

- ④ 復元できる掘立柱建物跡の全てが、弥生時代に大多数を占めたと考えられる1間×2間、もしくは1間×1間の建物であること。

- ⑤ 弥生時代後期のその他の遺構と決して重なっていないこと。

以上のような理由で、頂上平坦面とその周辺で検出された建物群は、他の遺構群と同様に塩津2期～5期の間に形成されたものと判断した。

**掘立柱建物、布壙建物の時期的分類** 掘立柱建物跡や布壙建物の多くは重なり合って検出されている。前述のようにこれらの建物群は一定の時期幅の間に形成されたものの可能性が高いだけに、建て替えが行われたことは至極当然であろう。よってこれらの重なりあった建物跡を時期別に抽出して、一時期の建物群の構成を明らかにする必要がある。ただ前項でも述べたように、直接的に時期を限定できる建物はまれであり、それはなかなか困難な作業である。しかしながらよく見るとこれらの建物群には一定の方向的な法則性がありそうである。そこで建物の軸方向を元に建物群の構成と変遷を探ってみたい。

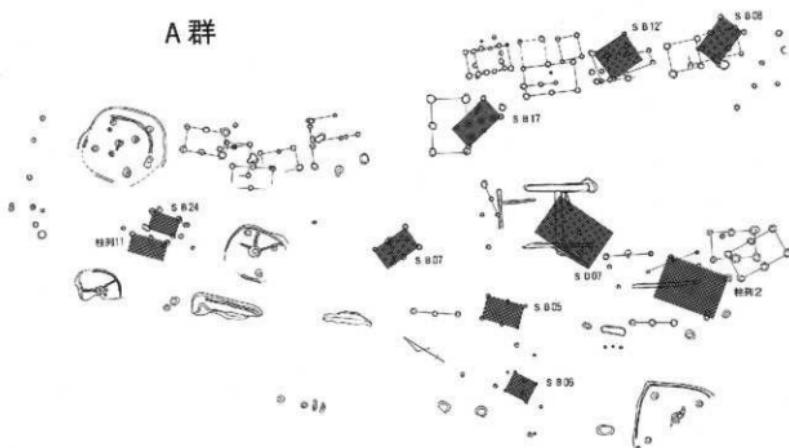
高所平坦面のほぼ中央で検出された布壙建物群は、建物群の構成と変遷を考えるうえで大いに参考となる。両辺の溝が検出されたS B01と、90°方向をずらしたS B02の他に、微妙に方向がずれた同様の溝が3本検出されており、これらは後世の改変が著しい部分のため全容は明かではないが、やはり布壙建物の一部である可能性が高い。つまり、高所平坦面中央の布壙建物は、ほぼその位置を固定して4度程度建て替えられたと考えられるのである。さらに注目されるのは、周囲の掘立柱建物は、布壙建物群のいずれかの方向におよそ近い方向を目指し示している。建物規模が明確なS B01は面積が26.8m<sup>2</sup>、S B02が25.85m<sup>2</sup>と他の掘立柱建物と比べて飛び抜けて規模大きく、その位置も含めてこれらの建物群の中心的建物であったことは疑いない。すなわち頂上平坦面周辺の建物群は、中心的建物である中央の布壙建物の建て替えに連動して変動している可能性があるといえる。そこで布壙建物を基準に据えて、建物群の分類を行ってみる。

まず尾根の中軸方向と平行に建てられたS B01とS B02は直角に交差しており、N42°W (S B02はN48°E) の方向を指す。これとはば同方向の建物は、まさにこの建物をとりまくようにして並んで分布している。そしてS B01とS B02と同様に、同方向の建物が重なっている例が何点か。例えばS B15とS B16は全く同規模でわずかに位臵をずらしただけで重なり合う。S B13は柱穴半分を共有する形で90°方向を変えて建て替えられたかのようだ。S B04・S D08 (布壙建物跡の一辺であろう。)と柱列4・柱列5の関係も、2時期に分けて考えれば合理的である。その観点で尾根中軸と同方向の建物を2つに分類したのが第394図B群と第395図C群である。もちろん、掘立柱建物個々の時期限定はできないので、各々の組み合わせは互いの距離等を勘案したうえでの任意の組み合わせである。また重なりがない建物は両時期に渡らせているものもある。この案でいけば、11～12棟の建物が頂上部だけで存在していたことになる。

次にS B02とわずかに方向をずらしたS D06 (N32°E) と同方向の建物は、わずかのプレを容認すれば11棟をあげることができる。第396図でD群としたものである。やはり中央の布壙建物をとりまくような配置が想定できる。

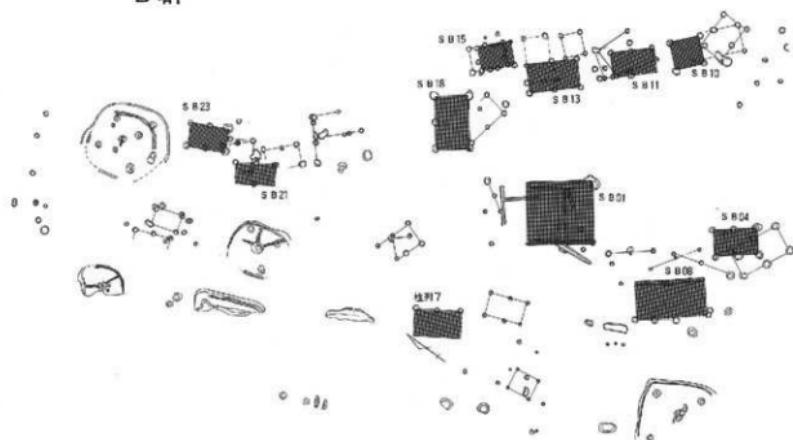
S B01と若干方向をずらしたS D07はN10°Wと、南北方向に近い長軸をとる。この方向に近似する建物は9棟あげができるが、前3者に比べてややばらつきがある。第393図のA群としているものである。

A群



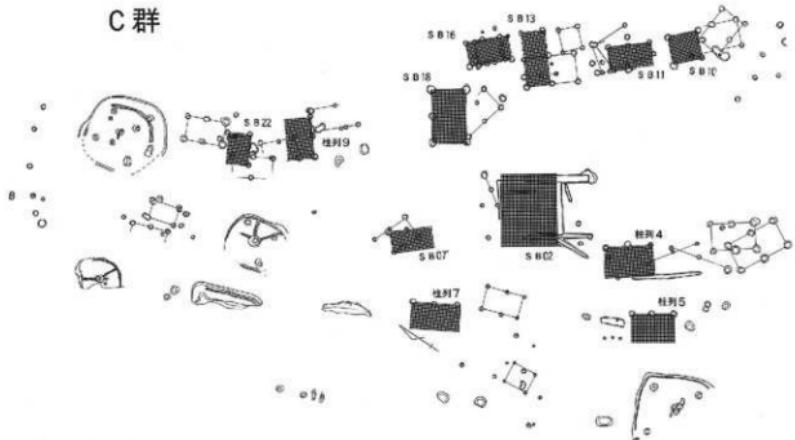
第393図 柳遺跡 頂上平坦面検出の建物群 時期別変遷図（1） S = 1 / 400

B群



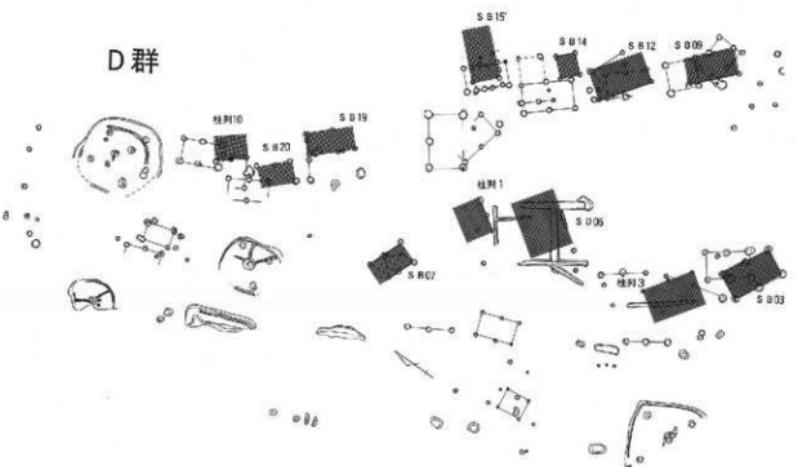
第394図 柳遺跡 頂上平坦面検出の建物群 時期別変遷図（2） S = 1 / 400

C群



第395図 柳遺跡 頂上平坦面検出の建物群 時期別変遷図（3） S = 1 / 400

D群



第396図 柳遺跡 頂上平坦面検出の建物群 時期別変遷図（4） S = 1 / 400

それでは、以上のように4つのグループに分けることの出来た建物群はどういう順序で変遷していったのであろうか。それはまず、布壙建物群の溝の切り合いである程度知ることができる。SB01はSB02に切られているので、SB01→SB02の順序が確認できる。またSB01は同時にSD06に切られているのでSB01→SD06の順序も確定する。さらにSB01とSB02は常識的に考えれば連続した変化の可能性が高く、また周囲の建物も連続した建て替えを想起させる配置である。よってSB01→SB02→SD06、つまりB群→C群→D群という変遷をたどる可能性が高い。ひとつ残されたA群は、SD07の他の布壙建物の溝との切り合いでつかめなかつたため、位置づけが不明である。ただ前3群の中で最も古い位置づけのSB01を構成する溝内から、塩津3期と考えられる上器が出土しており、前述したようにこの建物群のはじまりが2期に遡る可能性が高いことからするとより古い建物群が存在した可能性が高いことになる。消極的な根拠ではあるが、A群を最古の位置づけにしておきたい。

ちなみに柱穴出土の土器から直接時期決定ができる建物跡は、C群に入れたSB07が塩津4期、D群に入れたSB16'が5期で、前述した変遷観に矛盾しない。

**掘立柱建物、布壙建物の性格** さてこれらの建物の機能を考古学的に証明するのは困難であろう。ただそれでは議論が前に進まないので、本遺跡群で検出された他の遺構などを元に類推してみたい。加工段の項でも述べたが、掘立柱建物や布壙建物以外にもなんらかの建物が存在していたことは間違いない。ひとつはII類加工段で見られるように、規則正しい柱の配列は見られないが、ある程度の柱穴建ちの柱と、造構としては検出しにくいなんらかの構造で上屋を作ったと考えられる建物や杭を利用したと推定される建物。もうひとつは全く柱穴等がないIII類加工段の一部に存在が推測される簡便な上屋構造である。これらの機能としては、大きな重量を支える必要のない建物、例えば作業場、上間の物置・納屋の類などを想定した。

片方で以上のような建物が存在する以上、規則正しい柱配列によって構築される掘立柱建物や布壙建物は、簡便な建物ではなくかなりの重量を支える構造の建物であったと考えの方が自然であろう。居住用建物の可能性も皆無ではないが、それには面積が小さいであろう（布壙建物はその可能性を留保しておく必要がある）。やはり通説通り、高床倉庫と考えるのが妥当と思われる。

とすると高床倉庫が同時に10棟前後、市側の未調査区にも続いていると考えられることや直下斜面加工段の建物を加えるとさらに数は増えることは間違いない。これだけの高床倉庫が遺跡群中の最高所に集中して、しかも規則正しく配列する状況はどう評価すべきであろうか。この点は後章で詳しく述べるが、ここでも若干触れておきたい。

集落の中の一定の区画の中に高床倉庫が集中して配設される遺跡は、古墳時代以降ならまだしも弥生時代においては、集落の全体像が知れる遺跡が少ないと想定してか、あまり類例がないようと思われる<sup>10</sup>。少ない類例のひとつ、佐賀県吉野ヶ里遺跡では、弥生時代後期には外濠の外側の一部（南群倉、新聞報道によるとこの部分もさらに外側の濠に囲まれていたという。）と、内部に大型掘立柱建物を持つ北内郭と呼ばれる濠に囲まれた区域の外側（北群倉）に高床倉庫が集中して配置されているという<sup>11</sup>。首長ないし集団によって集中的に管理されたことを想起させるこうした倉庫のあり方と、柳遺跡のあり方はよく似ているとも言えるが、大きな違いが1点あるように思える。それは柳遺跡の場合、高床倉庫の配設において最も重要な要素が、最も「見え」の良い場所の選択、という点にあったと考えられることである。一般的に考えて、倉庫への搬入・搬出が最も困難な位

誤りであるうえ、発掘調査区内だけで判断する限りは居住区との有機的な関連を必ずしもうかがうことのできない。この場所の選択の理由は、最もよく見え、最も目立つという点であったと思われるを得ないのである。この点に関しては、遺構の時期的変遷を踏まえて後章でまた触れたい。なお柳遺跡のあり方に比較的近いあり方と思われる遺跡として、時期は遡るが米子市背木遺跡F・J区<sup>(10)</sup>、大山町、淀江町の妻木・晚田遺跡群<sup>(11)</sup>をあげることができる。あるいはこうした丘陵頂上部への集中的な倉庫の配置は、山陰地方の特徴としてあげられるかも知れない。

#### 4. 土器集中地点

本遺跡群においては、異例とも言える土器の出土量を示す遺構が2ヶ所検出された。柳遺跡階段状遺構と竹ヶ崎遺跡加工段04～06である。柳遺跡階段状遺構は、谷底から若干上方に上がった位置、竹ヶ崎遺跡加工段04～06は堅穴住居が集中する緩斜面の最奥部と対照的な位置関係にある。この2つの土器集中出土地点は、本遺跡群を考える上で重要な意味をはらんでいると思われる所以、検討してみたい。

柳遺跡階段状遺構は、塩津丘陵遺跡群が大きくとりまっている北に開いた谷の底あたりから、柳遺跡の中心地と目される東斜面上方に向かって蛇行しながら上っていく溝状の遺構である。その底部は急傾斜部と緩傾斜部を繰り返すステップ状を呈し、部分によっては幅を広げて踊り場状を呈すことなどから、谷底から上方に上っていく道であったと考えている遺構である（第359図）。その一角から土器が集中的に置かれた状態で出土した。上器は遺構の底面から浮いた状態で出土していることから、遺構が形成されてからある程度の時間の経過を経て置かれたことがうかがえる。上器は図示したものが40個体で、おそらく50をこえる土器が置かれたものと推測される。出土状況を見ると、全形を保持しているものも散見されることから、破碎等はされず、一定の意図を持って集中的に置かれた状況が想定される。こうした土器のあり方は、明らかに日常的な上器の使用や保存のあり方とはかけ離れており、なんらかの祭祀的な意味合いを考えざるを得ない。もし遺構の性格が想定通りに道であったならば、そこへの土器の集中配置は集落の公共的施設の役割の否定、ひいては集落の廃絶を象徴しているのではないかと想像したくなる。上器の時期は、塩津5期でこの集落の最新期であり矛盾はない。

さらには注目されるのは、出土した土器の組成である（第361図～365図）。図示できた40個体のうち半分の20個体が当地ではほとんど見かけない外米系と考えられる土器が占めているのである。しかも残り半分の地元の土器の組成には、当地の祭祀の定番である鼓形器台、高杯、低脚杯の3点セットが全く含まれていない。外米系の土器は甕、壺、鉢、高杯とバラエティに富んでいるとの対照的である。このことは、集落の廃絶に伴う祭祀の一端が地元の住人ではなく、外米の人あるいは外米系の人たちが主体となって行われたことを示すのではないだろうか。

一方竹ヶ崎遺跡加工段04～06は、塩津5期の居住域であった緩斜面の最奥部に検出された加工段である。この遺構からは大量の土器が層を以て検出された。土器は小片になっているものが多く丁寧に置かれた状況は考えにくい。図化できたものだけで174個体に上るが、実際の個体数はそれをはるかに上回るだろう。出土状況を見ると（第66図）、土器は加工段全体にまんべんなく出土しているのではない。よく見ると柱穴列が検出された部分を回避するように出土しているのがわかり、なんらかの建物をとりまくように土器が置かれた、もしくは投棄された状況が想定される。建物はその全容は不明だが、1間×2間の掘立柱建物の可能性が高い。その位置関係から見ると居住域の中

で象徴的な建物であった可能性もある。このあり方も、柳遺跡階段状造構と同様に集落の廃絶に関わる祭祀を想起させるものがある。

しかし土器組成は柳遺跡階段状造構と全く異なる。外来系の土器もある程度含まれるが、図化した174個体中その可能性があるものが14個体(8%)と客観的である。地元の土器の組成はこの時期に通常の甕、壺、高杯、器台、低脚杯、コシキ形土器などが集落の通常構成として矛盾ない比率で含まれている。まさに柳遺跡階段状造構と正反対と言っていいだろう。おそらくは階段状造構と同様に集落廃絶時の祭祀であろうが、その主体者はまさにこの集落の住人であった可能性が高いと言えよう。

以上のように、2つの土器集中出土地点のあり方は、塩津丘陵遺跡群の集落の廃絶が自然消滅的なあり方ではなく、なんらかの大きな動きの中で急激に引き起こされた可能性を示唆している。さらにその動きには、外的暴力が働いていたことを想起させるのである。

### 第3章 塩津丘陵遺跡群の性格について

前章までで、塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡で出土した土器の編年を行い、検出された造構についての検討を行ってきた。それらを踏まえた上で、本章では本造跡群の時期的な変遷を明らかにし、さらに遺跡群の性格について検討してみたい。

#### 1. 塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡の時期的変遷

本項では、第1章で行った塩津丘陵遺跡群の編年に従って、各期の造構の構成の変遷を追ってみたい(第397図～第399図)。

**塩津1期(第397図)** 弥生時代後期中葉にあたるこの時期は、竹ヶ崎遺跡の緩斜面中段あたりに2基の堅穴住居が作られているのみである。竹ヶ崎遺跡の谷の包含層や柳遺跡の包含層にも若干の当該期の遺物が認められるが、仮に検出できなかった造構があったとしてもわずかであったことは疑いない。塩津丘陵遺跡群の開始期というよりは、次期から展開する造構群とは直接的関係のない集落展開を考えるべきだろう。

**塩津2期(第398図左)** 塩津丘陵遺跡群の本格的な開始期といえる。柳遺跡頂上平坦面東縁辺部の盛土による造成が行われたのがこの時期と考えられ、必然的に頂上平坦面に集中して倉庫が建てられた始めた時期にあたる。頂上平坦面以外では、柳遺跡頂上直下の高床倉庫の建つ加工段と、柳遺跡東斜面中腹の加工段(作業場か)が当該期にあたる。柳遺跡以外では塩津山遺跡S I 04が1棟あるのみである。なんらかの施設が作られるのは柳遺跡の上半部には限られていると言って良いだろう。

**塩津3期(第398図右)** 基本的な造構の展開のあり方は2期と同様である。柳遺跡頂上平坦部と頂上直下の加工段には引き続き高床倉庫群が見られ、東斜面中腹以上の調査区北半付近にII類加工段が展開している。ただ2期に比べて加工段の数が増え、東斜面ではやや下方に造構の展開が広がっている。柳遺跡に初めて堅穴住居が1棟出現する(S I 07)。

**塩津4期(第399図左)** 基本的な構造は2期、3期と同様である。柳遺跡頂上平坦面と頂上直下の高床倉庫群は建て替えを経ながら引き続き建てられる。3期に東斜面中腹以上の調査区北半付近に展開したII類加工段は、より上方に位置を変えている。柳遺跡東斜面に堅穴住居跡が3棟見られ

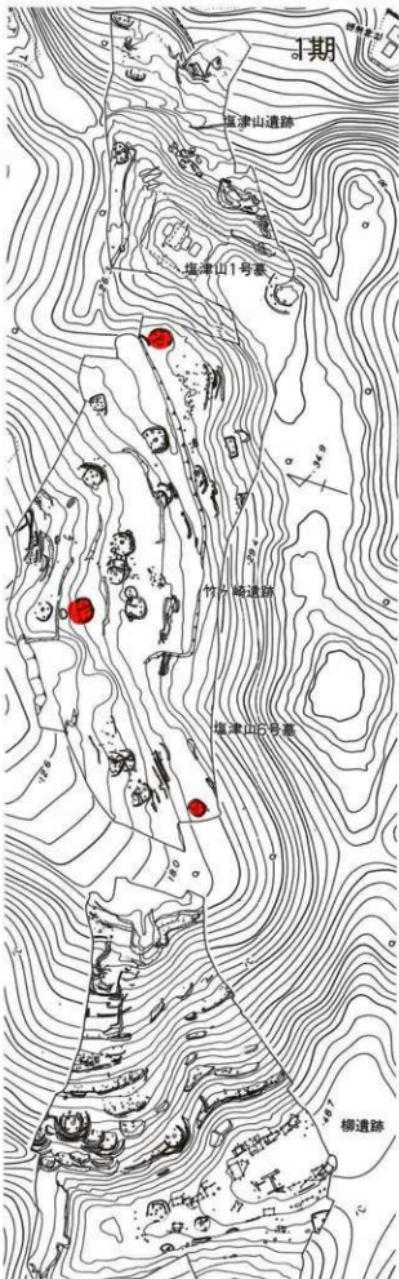
るが、このうち北側に隣接して存する2棟は4期新相とした新しい一群の土器を出すもので、どちらかと言えば次の5期に起きた居住域の大移動の先駆的性格と考えるべきかも知れない。

**塩津5期（第399図右）** それまでほとんど何の施設も見られなかった塩津山遺跡と竹ヶ崎遺跡に、突如多数の竪穴住居や加工段が出現する。同時に、高床倉庫以外の施設は決して作られることのなかった柳遺跡頂部にも竪穴住居跡4棟が現れる。それまで調査範囲外にあった居住域が、大変移動してきたとしか思えない竪穴住居の急増である。また2期から4期にかけて基本的に大きな変動のなかった柳遺跡の加工段のあり方も変化している。頂上の高床倉庫群は存続していたと考えられるが、東斜面の上方に展開していた加工段が減少し、斜面の下方に新たに加工段が現れている。

## 2. 塩津丘陵遺跡群の性格

本項ではこれまでに検討してきた様々な事象をまとめて、塩津丘陵遺跡群の消長の中で各画期毎の遺跡群のありようを検討していきたい。その前にまずこの遺跡群をとりまく特殊性について再確認しておく。

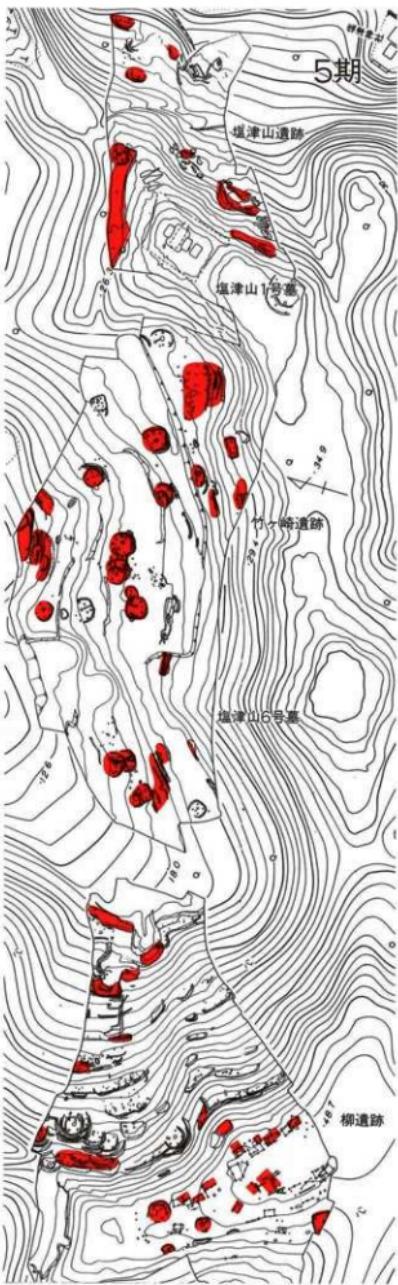
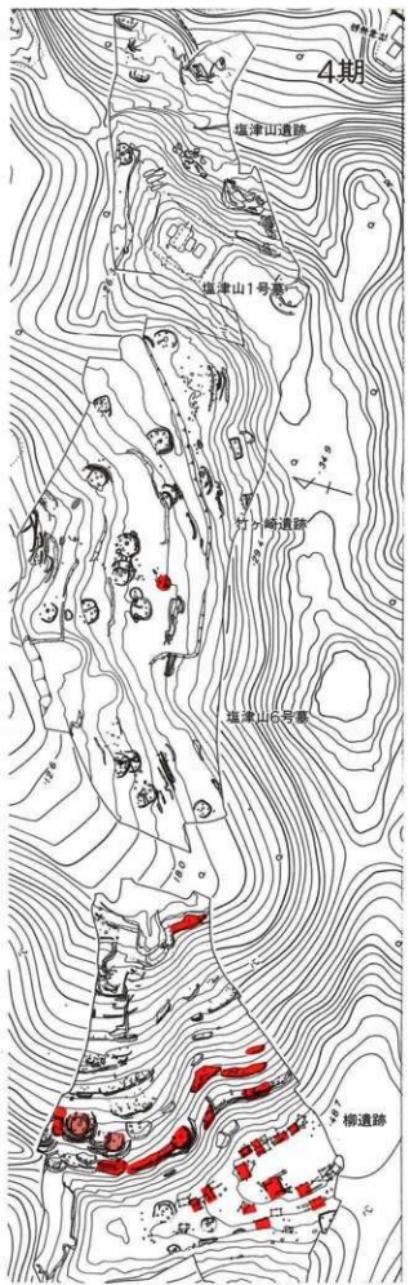
**立地の特殊性** 塩津丘陵遺跡群は、安来平野の西縁の丘陵に位置する。最高所の標高約50mの丘陵上という1点においても、日常生活には不便で、ましてや倉庫をその頂上に建てる必然性は日常の中には全く見いだすことはできないだろう。さらに平成8年に実施されたこの丘陵の北側の谷に存する岩屋遺跡の発掘調査は、立地の特殊性をさらに増す事實を明らかにした。弥生時代終わりから古墳時代初めにかけての波打ち際が検出され、少なくとも塩津丘陵遺跡群の北の谷は、当時は水面が入り込んでいたことがわかったのである<sup>10</sup>。この事実は、あるいは塩津丘陵遺跡群が湖面



第397図 塩津丘陵遺跡群 検出された遺構の時期別変遷図(1)  
塩津1期 S = 1/1500



第398図 塙津丘陵遺跡群 検出された遺構の時期別変遷図（2） 塙津2期、3期 S=1/1500



第399図 塩津丘陵遺跡群 検出された遺構の時期別変遷図（3） 塩津4期、5期 S=1/1500



現在の飯梨川下流から見た塩津丘陵遺跡群  
手前が塩津山1号墳、その上に柳遺跡の上半部がよく見える。



現在の田頬川下流から見た塩津丘陵遺跡群  
柳遺跡の東斜面を望む。

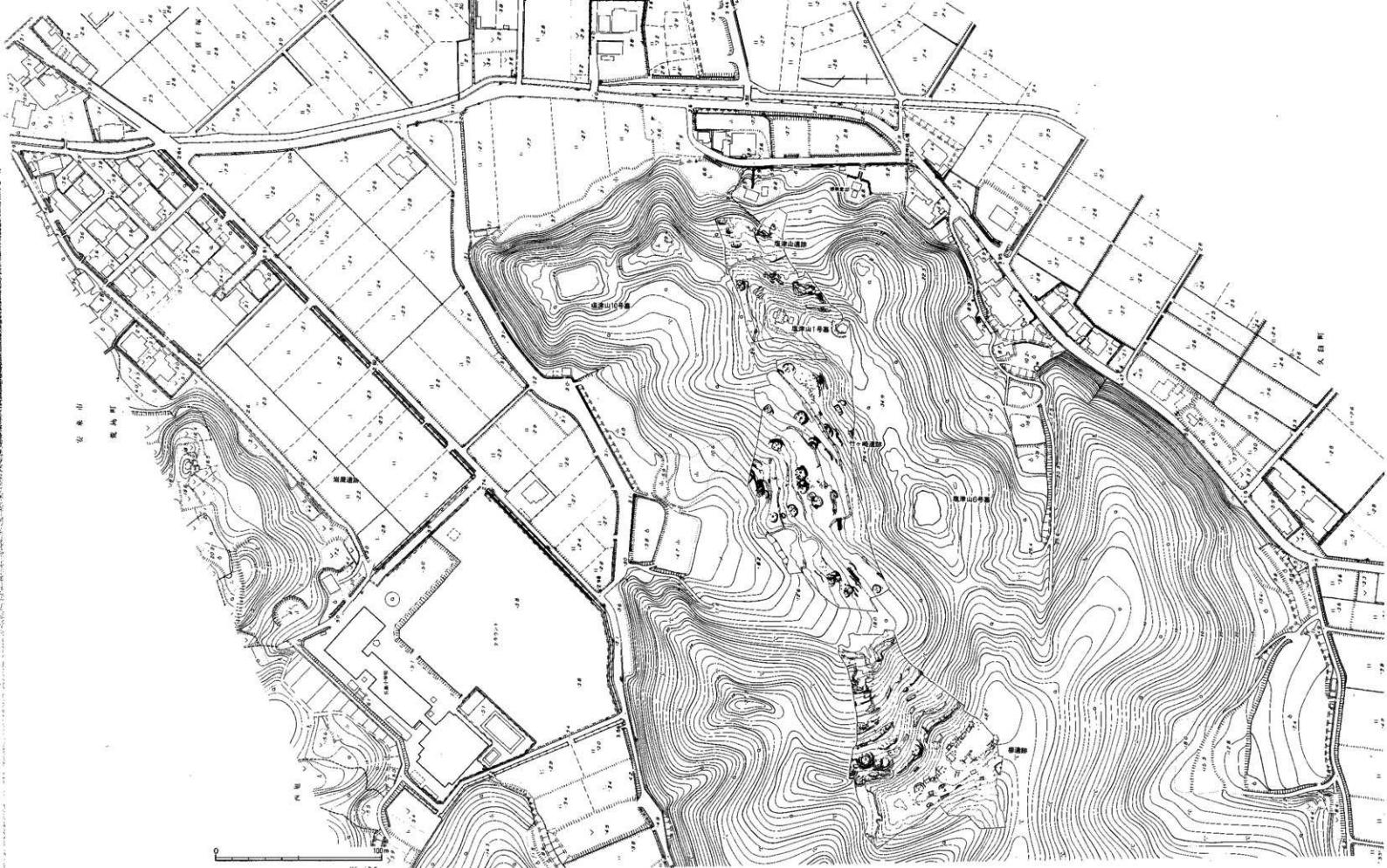
(もしくは海面)に岬状に突き出していた可能性をも想起させる。

ところで現在、国道9号線を東から西へ向かうと、飯梨川の手前あたりからこの塩津丘陵遺跡群が目に飛び込んでくる。この光景は、弥生時代当時は水面を舟で西へ向かうときに目にするものであったろう。現在の飯梨川あたりから見ると、塩津山墳墓群の上に突き出すようにそびえる柳遺跡の上半部を明確に視認できる。さらに西に進んで現在の田頬川あたりから望むと、北側に開いた谷の奥に柳遺跡の東斜面を真正面にとらえることになる。

こうした立地環境と、塩津2期から4期にかけての柳遺跡上半を中心建物を配置する遺跡構造は密接な関連があると思わざるを得ない。頂上部とその直下付近に林立する倉庫と他の建物類は、東方からこの荒島周辺にやってくる舟からの

「見え」を最重点に置いて選地されたのではないだろうか。そのことは次項で述べる墳墓との関連でいっそう明確になる。

**巨大墳丘墓との関連** 塩津丘陵遺跡群が存在する安来市荒島地区は、全国的に見ても有数の弥生墳丘墓が集中する地区である。その大部分は仲仙寺墳墓群に代表される四隅突出型墳丘墓であることはいうまでもない。それらの詳細は本書第1冊、位置と環境で述べているのでここでは触れないが、本遺跡群との関わりで重要なのはそれら四隅突出型墳丘墓が築造された時期である。現在荒島地区で確認できる最古の四隅突出型墳丘墓は仲仙寺9号墓、10号墓<sup>110</sup>で從來の的場式、本遺跡群の編年でいう塩津2期併行である。一方最新の四隅突出型墳丘墓は宮山4号墓<sup>111</sup>ないし安養寺墳墓群<sup>112</sup>と考えられ、塩津5期を前後する時期であろう。この四隅突出型墳丘墓が作られた時期幅は出雲地方



第400図 塩津丘陵遺跡群と周辺の地形測量図 S = 1/2000 (安来市教育委員会提供)

全域に広げてもほぼ同様といって良い<sup>17)</sup>。つまり、塩津丘陵遺跡群の集落は四隅突出型墳丘墓が築造された時期に重なって、というよりは軌を一にして展開しているといえる。

さらに重要なのは、塩津丘陵遺跡群には四隅突出型墳丘墓が同居していることである(第400図)。しかもそれらのうちの2基(塩津山6号墓、10号墓)は、長辺が40mをこえるこの地区最大の四隅突出型墳丘墓であると同時に全国的に見ても最大級の墳丘墓である。これらの巨大墳丘墓はいずれも未調査で、築造時期等は不明である。しかしながら前述したような出雲地方における四隅突出型墳丘墓の展開を見る限り、この遺跡群に同居する四隅突出型墳丘墓が集落が展開している時期の間に築造された可能性は極めて高い。隣接して同居する集落と墳丘墓の展開は同時平行と考えられるのである。

この巨大四隅突出型墳丘墓と「特殊」な集落の同時展開は偶然の一一致と考えられるものでは到底ない。前項で述べた「見え」を強く意識した計画的な配置であることは間違いないだろう。このことについては後項で時期を追ってまた述べることとする。

さて本旨から少しそはざれるが、ここで触れておきたいことがある。塩津山遺跡の丘陵尾根上、塩津山1号墳の南側には広い平坦面が広がっている。この部分は全面調査を行ったにもかかわらず、遺構が全く検出されていない空白地であった。周囲の遺構の密度に比べて余りに対照的である。この場所は2つの尾根筋が交差して周囲から若干高い位置にあたると同時に、二つの巨大四隅突出型墳丘墓の塩津山6号墓と10号墓のちょうど中間地点にあたる。想像をたくましくすれば、この遺構の空白地は2つの四隅突出型墳丘墓の次代の首長の墳墓域として確保されていた場所だったのでないだろうか。

**塩津丘陵遺跡群の成立と展開（塩津2期～4期の状況）**　今まで何度も述べてきたように、塩津丘陵遺跡群が本格的展開を開始するのは塩津2期である。柳遺跡の頂上を造成して平坦面を作り出し、頂上とその直下付近を中心に高床倉庫や建物を林立させた。その一方で墳墓はこの時期どういう状況だったのだろう。

前述したように塩津丘陵遺跡群の四隅突出型墳丘墓の時期は不明である。しかし塩津2期と言えば、出雲では西谷3号墓、4号墓などの巨大四隅突出型墳丘墓が突如築造され始める時期である<sup>18)</sup>。その動きは出雲だけにとどまるものではない。全国的に見ても吉備では桶築墳丘墓<sup>19)</sup>、北陸では小羽山30号墓<sup>20)</sup>などの巨大墳墓がしめしあわせたかのように築造される時期でもある。この時期に、西谷墳墓群と並んで出雲の四隅突出型墳丘墓築造の中心地であるこの荒島地区に巨大な四隅突出型墳丘墓が築かれたであろう事は想像に難くない。そうであるならば、2期の巨大四隅突出型墳丘墓の候補として名乗りをあげるのは現状では塩津山6号墓か塩津山10号墓しかない。

以上のようなことから、柳遺跡の上半で始まる特殊な集落の展開は、その隣の山に築かれた巨大四隅突出型墳丘墓の築造と連動したものと考えたい。そして両者の平面配置を見ると、塩津山6号墳と柳遺跡の頂上との間の鞍部辺りを境にして明瞭に区域が区切られていたことがうかがえる。東側の丘陵上は首長墓域、西側の丘陵（柳遺跡）上半は高床倉庫を初めとする建物域という区別である。そして西側丘陵には一般居住用施設である堅穴住居は全く見られない。性格を限定できない加工段も、工房等の機能を考えた方が自然だろう。つまり西側丘陵（柳遺跡）に配されたのは、一般の生活とは関わりの薄い、どちらかというと集団なり、首長なりのステータスを象徴的に表現できる建物であったと考える。いわば「聖域」的な部分を一般の集落から切り放して集中的にこの地に

配したのではないだろうか<sup>(33)</sup>。

塩津2期における塩津丘陵遺跡群の成立は、巨大墳丘墓域と特別な建物群域を統合させた今までに例のない空間の創出であったと考える。そしてそのプランニングのコンセプトは、中海からの「見え」であり、具体的に言えば湖上に突き出た丘陵上にそびえる巨大墳墓と、その頭越しに林立する高床倉庫や工房などの建物群という「景色」であったのではないかと思えるのである。そのシンボリックでヴィジュアルなプランニングは塩津3期、4期と次第に形を整えながら引き続いているのである。

**塩津丘陵遺跡群の変質（塩津5期の変動）** 塩津5期になって、塩津丘陵遺跡群は大きな変貌を遂げる。それまでほとんど何の施設も作られることのなかった塩津山遺跡と竹ヶ崎遺跡、つまり首長墓域の斜面に突如堅穴住居を中心に集落が展開するのである。検出された堅穴住居は25棟、短期間ながら切り合いで多く認められ、整理すると15棟前後の堅穴住居が同時に存在していた可能性がある。未調査区にも当然堅穴住居は存在したであろうから、4～5つの単位集団がこの塩津丘陵遺跡群の墓域斜面に居住域を移してきたことになる。同時期の加工段も20以上認められ、おそらくは堅穴住居とセットで移転してきたものだろう。

一方西側丘陵の建物域（柳遺跡）では、頂上平坦面の倉庫群は存続していると考えられるが、それまで決して倉庫以外の施設が建つことのなかった頂上部に堅穴住居跡が4棟建つ。東斜面においても施設の配置の中心が上方から下方へ移ってくる。

以上のような変化は、前段階まで維持されてきた空間プランニングのコンセプトが崩れたことを示している。あくまで想像だが、この段階で首長墓たる四隅突出型墳丘墓は塩津丘陵遺跡群の中に作られたかどうか疑問である。この期の首長墓と考えても遜色ない安養寺3号墓の存在があるだけにおおさらである。だからこそ首長墓域に集落が入り込んでくるのであり、また巨大墳丘墓が2基であることもうなづける。

それではこうした変動を引き起こした原因はどこにあるのだろう。おそらく様々な要因が複雑に絡んで変化を生み出しているのであろうが、その要因を推測させる材料が2つある。ひとつは、第1章の土器編年で述べたように、塩津5期で土器のあり方が大きく変わることがあげられる。この変化は単に土器の器形の変化だけにとどまるものではなく、生活様式の変化をもうかがわせる組成の変化、生産形態の変化をうかがわせる薄壁化や色の変化（極めて感覚的なものだが）を伴う大きな変動である。土器の組成の変化は、都出比呂志氏が指摘した「個人別食器」<sup>(34)</sup>が西日本各地で弥生時代後期に成立する現象の波及ととらえられるであろう<sup>(35)</sup>。また薄壁の成立は山陰だけではなく、広く西日本全体で見られる現象である<sup>(36)</sup>。5期における土器の変化は、外的刺激を強く受け、それまでの地域色の強い山陰の上器のあり方を大きく変えていくものであったと推測される。

もうひとつの材料は、当該期の周辺の集落のあり方に求めることができる。安来平野周辺では、塩津編年4期～5期を中心、高い丘陵上に集落が立地するようになる。各遺跡のあり方については、それぞれの遺跡の報告書で詳しく述べてきた<sup>(37)</sup>のでここでは触れないが、この期に安来平野周辺が緊張状態に置かれていたことは間違いない。

こうした塩津4期から5期における土器の変化や集落立地の特殊性は、この時期に強い外的な刺激や圧力を受けていたことを物語る。塩津丘陵遺跡群への居住域の移動が、防衛的な意味合いを含んでいたのかは明かではないが、それまでの明確な空間構成のコンセプトを崩したこの動きは、古

墳時代に向かう大きな変動期の中で、四隅突出型墳丘墓に表象される出雲東部の社会が弛緩していくことを示しているように感じられる。

塩津丘陵遺跡群の廃絶 塩津5期で大きな変動を迎えた塩津丘陵遺跡群の集落は、次の時期には全くきれいに姿を消してしまう。この廃絶が自然消滅的なものではなく、劇的に引き起こされた可能性が高いことは、集落の廃絶に伴う祭祀とおはしき造構の存在からうかがうことができる。しかも柳遺跡階段状造構での祭祀が外来の人たちを中心に行われた可能性が高いことは、この塩津山遺跡群の廃絶に外的な要因が大きく作用したことを示唆すると同時に、この遺跡群の持つ意味の大きさをも示しているように思えるのである。

やがて本来は巨大四隅突出型墳丘墓が作られるはずであった塩津山遺跡の丘陵上に、長大な竪穴式石室を持つ塩津山1号墳が築かれる<sup>39</sup>。おそらく全ての住居や施設がなくなってしまったこの地に、この古墳が築かれたのは極めて象徴的な出来事であったに違いない。そしてこれ以後、首長墓と目される大型古墳は、その造墓域を中海側の丘陵に移すのである。

以上、この遺跡群の意義について長々と書き連ねてきた。想像を加えた部分も多々あって、批判を受けるべき点が多いことは承知している。ただ現地調査の間、筆者の力不足のためにこの遺跡群の意義を充分に把握することができず、声高に遺跡の重要性を叫ぶことがなかったため、多くの方々に現地を見てもらう機会がないままに今日を迎えていた。そのことを反省し、少しでもこの遺跡群の意義を訴えたいという思いで書き進めたものである。幸いにも本遺跡群中の塩津山1号墳は工法の変更によって現地に保存されることになった。今後のこの遺跡群の残された部分の調査や整備が進められていくことを期待するとともに、この調査の成果が少しでもその助けとなることができれば幸いである。

本報告書をまとめるにあたっては例言に掲げた多くの方々のご教示やご協力を得た。とくに編年をまとめるにあたっては、日頃の池淵俊一氏との議論のなかで多くのご教示を得た。また本遺跡群の性格を考えていく上で、広瀬和雄氏から多くの有意義なご意見を頂いた。記して感謝したい。最後になったが、本報告書は梅木茂雄氏の献身的な努力があってはじめて刊行できたものである。氏に最大限の敬意を払って筆を置くことにする。

#### 注:

- (1) 出雲地方における弥生時代後期から古墳時代前期にかけての編年で、比較的近年に公表されたものとしては以下があげられよう。本編成案はこれらの先学があったうえに成り立つものであることは言うまでもない。

藤田憲司「山陰・越尾式」の再検討とその併行関係』『考古学雑誌』第64巻4号 1979

赤沢秀則「出雲地方古墳出現前後の土器編年私案」『松江考古』6 1985

花谷めぐむ「山陰古式土器器の型式学的研究—鳥根県内の資料を中心に―」『島根考古学会誌』第4号 1987

房宗寿雄「出雲地方における古墳出現期の上器編年について—最近の研究状況をめぐって—」『島根考古学会誌』第5巻 1988

赤沢秀則「I. 出土遺物・時期」『南詰武草田遺跡 講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書』1992 鹿島町教育委員会

松本岩雄「山陰・尾崎地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 1992 木耳社

中川寧「山陰の後期弥生土器における編年と地域間関係」『島根考古学会誌』第13巻 1996

- (2) 古墳時代の開始をどこにおくかという問題は、筆者にとっては極めて重い課題で、ここで詳述する能力も紙面もないが、筆者の拙陋な認識を示しておく。古墳時代のはじまりは巨大前方後円墳の出現をもって区切るべきと考えており、現状では苦藪古墳の出現から古墳時代と考えている。問題は苦藪古墳の出現が当地の土器編年でどこに併行するかであるが、筆者は公開された苦藪古墳築造期とされる土器群に含まれる山陰系の土器を

実見した。短時間で距離を離れての実見であったため不明瞭ではあるが、当地での草田6期の特徴を持つものとの感触を得た。大谷晃二氏も同様の印象を記している（『下記文献』）。

草田6期を古墳時代初頭と位置づけたとして、塩津丘陵遺跡群の集落関連遺跡から出土した土器が草田6期まで下るかどうかがまず問題となる。草田編年との併行関係は後述するので、それを参照いただきたいが、基本的には本集落跡は草田6期にまで下らないと考えておらず、よって塩津丘陵遺跡群の編年は弥生時代後期まで、という認識となる。

大谷晃二「1995年の鳥取県における考古学的動向 古墳時代」『島根考古学会誌』第13集 1996

- (3) 松井 渥「東の土器、南の上器—山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系上器の動態」『古代吉備』第19集 1997
- (4) 遺構出土の土器の組成を正確につかむのは難しい。本米は床面出土の資料を用いるべきであろうが、それでは逆に個体数が少なくてデータとして不確実になってしまう。そこで本書では、遺構の覆土を含めて破片数を数える方法を取った。よってその遺構の時期の上器が100%ではない。しかしながら遺構の時期以外の土器がある程度混ざり込んだとしても、大部分は当該期の上器と判断され、組成の大要をつかむには有効と考えたのである。これには、ひとつの遺構出土の上器を複数も含めて広げると、明らかに違う時期の混入と考えられる土器は少なく、大略はまとまりがあると判断できた経験がバックボーンにある。
- 破片の数え方は、器種が判別できる部位（例えば口縁部や脚部など）だけを取り出して、全ての破片数を数えている。よって数字は個体数を反映するものでは決してない。あくまでも時期による組成の変化をつかむことを目的としているかぎりは、同一の基準でカウントすれば大差はつかめると判断したところである。
- (5) 松井市教育委員会、橋本源氏、萩原義典氏、鳥取県教育委員会、岩橋幸典氏のご教示による。
- (6) この点を具体的に説明すると、まず時期区分の日盛りの数があるが、塩津編年は從来の編年案の大部分に比べて一つ時期を多く設定している。これは、現編年はもっと細分されるべきという意図ではなく、何度も述べるように遺構の変遷を追うための益姫の実態に合わせた区分である。従来の編年案のなかでは中川編年（注1文献）がおおよそ同様の区分数となると思われるが、区分の根拠が異なり必ずしも一致しないと思われる。
- 一方、現在当地でよく使われ、本書でも援用している平田遺跡の編年（注1赤沢1992文献）は、時期によつては必ずしも良好な資料に恵まれておらず、時期区分の厳密な認識が難しい部分がある。

(7) 山本清「山陰の土師器」「山陰古墳文化の研究」所収 1971

(8) 注1 赤沢1992文献

(9) 石野博信・岡川尚功ほか「難向」1976 横原考古学研究所

(10) 郡出比己志「堅穴住居の平面形」「日本農耕社会の成立過程」1989

(11) 青木遺跡調査団「青木遺跡発掘調査報告書」三 1978

(12) 埋蔵文化財研究会編「弥生時代の掘立柱建物」1991

(13) 高島忠吉「吉野ヶ里遺跡環濠聚落の成立・発展・解体」「吉野ヶ里」1994 佐賀県教育委員会

(14) 大山町教育委員会・大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団「斐木・晚出遺跡群現地説明会資料」1997

(15) 1997安来市教育委員会によって発掘調査され、筆者は現地を実見した。また同市教委の水口昌郎氏と大塚光氏に多くの教示を受けた。

(16) 安来市教育委員会「仲仙寺古墳群」1972

(17) 安来市教育委員会「史跡 仲仙寺古墳群」1977

出雲考古学研究会「岸島墳墓群 古代の出雲を考える4」1985

(18) 丹羽野裕「四隅突出型埴丘墓の世界」「古代出雲文化遺跡図録」1997

(19) 渡邉貞幸編「日部 西谷墳墓群の調査」1992 鳥取大学法文学考古学研究室

(20) 近藤義郎編「極楽寺跡埴丘墓の研究」1992 横尾刊行会

(21) 古川登「北陸地方の四隅突出型埴丘墓について」「鳥取考古学会誌」第10集 1993

(22) 坚穴住居が塩津丘陵遺跡群内に全くなかったというわけはない。存在していたとしても、柳遺跡上半のような日立部分ではなく、丘陵部あたりだったのではないかだろうか。

(23) 郡出比己志「個人別食器の成立」「日本農耕社会の成立過程」1989

(24) 中川寧氏も同様の見解を述べている。注(1) 中川文献

(25) 赤塚次郎「廻間遺跡－愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第10集－」1990 (財) 愛知県埋蔵文化財センター

(26) 池淵俊一・丹羽野裕・深田清「福地遺跡・平ラ1遺跡・一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書11」1995 鳥取県教育委員会

田中史生・丹羽野裕・東森義「岩屋山北遺跡・白コクリ遺跡(F区)－一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書13」1997 鳥取県教育委員会

最近の調査では、当該期には安来半野周辺のみならず、宍道湖南岸地域でも同様に高所の立地する集落が検出されている。代表的な遺跡として宍道町野津崖II遺跡、上野遺跡、山守免遺跡をあげることができる。

(27) 勝瀬利栄はか「塩津山古墳群－一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区VI」1997 鳥取県教育委員会

# 報告書抄録

フリガナ	シオツキユウリヨウイセキグン (シオツヤマイセキ・タケガサキイセキ・ヤナギイセキ フ カメノオコフン)						
書名	塩津丘陵遺跡群(塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡 附・亀の尾古墳)						
副書名	一般国道9号(安来道路)建設予定地内発掘調査報告書 西地区						
卷次	IV						
シリーズ名	一般国道9号(安来道路)建設予定地内発掘調査報告書 西地区						
シリーズ番号	IV						
編著者名	丹羽野 裕・守岡利栄・梅木茂雄・卜部吉博・池淵俊一						
編集機関	島根県教育委員会文化財課 埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒 690-01 島根県松江市打出町33番地 電 0852-36-8608代						
発行年月日	西暦 1998年 3月 31日						

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
塩津山	島根県安来市 アラシマキチ 荒島町 カミハシマチ 久白町 クシロコマチ	32206	0069	35°24'46"	133°16'27"	19940407- 19941227	4,200	道路建設
竹ヶ崎	島根県安来市 アラシマキチ 荒島町 カミハシマチ 久白町 クシロコマチ	32206	0529	35°24'34"	133°17'17"	19950415- 19960112	12,000	同上
柳	島根県安来市 アラシマキチ 荒島町 カミハシマチ 久白町 クシロコマチ	32206	0526	35°24'34"	133°17'17"	19950415- 19960112	8,000	同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
塩津山	集落跡	弥生・古墳	竪穴住居跡 加工段	6棟 3	弥生土器 石器 鐵器(弥生)	巨大四隅突出墳丘 墓や前期古墳を含む	1	塩津山墳墓群に隣接
竹ヶ崎	集落跡	弥生・古墳 近世	竪穴住居跡 加工段	25棟 22	弥生土器、石器、鐵器(弥生)、須恵器、土師器、陶磁器	弥生時代後期末の短 期間間に形成された集 落		
柳	集落跡	弥生・古墳	竪穴住居跡 加工段	10棟 58 掘立柱建物跡 31	弥生土器、石器、鐵器(弥生)、須恵器、土師器	弥生時代後半～ 後期末の掘立柱建物 と加工段が集中		

塩津丘陵遺跡群  
(塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡・附 亀ノ尾古墳)

一般国道9号(安来道路)建設予定地内  
埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区IX

(第2分冊)

1998年3月

発行 建設省松江国道工事事務所

島根県教育委員会

印刷 ㈱島根県農協印刷